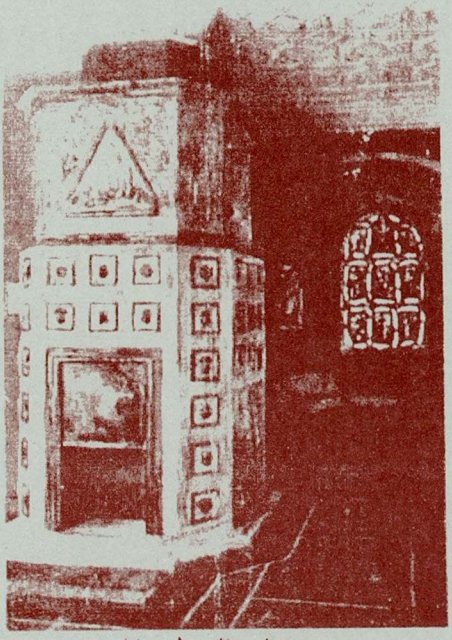
建築ト社會

第五輯　第一号



いらたか

大正十一年一月一日

日本建築協會

日本建築協會會則

第一條　本會ノ目的ハ我國建築界ノ堅實ナル發展ヲ期スルニ在リ

第二條　本會ハ日本建築協會ト稱ス

第三條　本會ハ事務所ヲ大阪市ニ置ク

地方ニ支會ヲ設クルコトヲ得

第四條　本會ハ入格、學識、經驗アル建築家ヲ以テ會員トス

會員ノ氏名住所ハ會員名簿ニ之ヲ記錄ス

會員タラムト希望スル者ハ會員五名以上ノ紹介ヲ以テ入會希望書及履歷書ヲ本會ニ提出スヘシ其諾否ハ理事會ニ於テ議決ス

第五條　本會ハ其目的ヲ贊成シ事業ヲ援助スル者ヲ賛助員トス

賛助員ヲ分チテ左ノ四種トス

一　名譽賛助員―地位又ハ學識アル名望家

二　終身賛助員―金參百圓以上又ハ之ニ相當スル物件ヲ本會ニ寄附スル篤志家

三　特別賛助員―建築ニ關聯スル特種ノ技術家又ハ事業家

四　普通賛助員―建築ニ關係又ハ趣味ヲ有スル者

賛助員ノ氏名住所寄附ノ金額又ハ物件ノ名簿ニ之ヲ記錄ス

第六條　名譽賛助員ハ例會ノ決議ニ依リ本會之ヲ推薦ス

終身賛助員タラムトスル者ハ會員貳名以上ノ紹介ヲ以テ申込書及寄附ノ金額又ハ物件ヲ本會ニ提出スヘシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス

特別賛助員タラムトスル者ハ會員二名以上ノ紹介ヲ以テ申込書及履歷書ヲ本會ニ提出スヘシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス

普通賛助員タラムトスル者ハ會員ノ紹介ヲ以テ申込書ニ提出スヘシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス

第七條　會員ハ第十九條ニ關スル權利ヲ享有ス

會員ハ會內ニ於ケル其言行ニ付會外ニ於テ責ヲ任ゼザルコトヲ得

名譽賛助員ハ本會ノ優遇及第十九條ニ基キ相當ノ利得ヲ受ク

終身賛助員、特別賛助員及普通賛助員ハ第十九條ニ基キ會誌ノ配布其他各相當ノ利得ヲ受ク

第八條　會員ニシテ脫會セムトスル者ハ其旨ヲ本會ニ申込ムヘシ

前項ノ規定ハ賛助員ニ之ヲ準用ス

第九條　本會ハ會員ニシテ本則ノ規定ニ違背又ハ本會ノ名譽ヲ汚スノ行爲アリト認メラルヽ者ニ對シ理事會ノ決議ヲ經テ其權利ヲ停止シ若ハ之ニ脫會ヲ勸告シ又ハ例會ノ決議ヲ經テ之ヲ除名スルコトヲ得

第十條　脫會其他ノ事由ニ因リ會員タルノ資格ヲ失ヒタル者ハ既納會費ノ返還ヲ求メ又ハ其債務ヲ免カルヽコトヲ得ズ

前項ノ規定ハ賛助員ニ之ヲ準用ス

第十一條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一　會頭　一名

二　副會頭　一名

三　理事長　一名（理事長ハ理事ヲ兼ヌ）

四　理事　十名

會頭ハ會務ヲ總監シ本會ヲ代表ス

副會頭ハ會頭ヲ補佐シ會頭事故アルトキ其職務ヲ代理ス

理事長ハ會務ヲ總理シ會頭、副會頭事故アルトキ其職務ヲ代理シ理事會ヲ代表ス

理事ハ會務ヲ處理シ理事長事故アルトキ理事會ノ決議ニ依リ其職務ヲ代理ス

第十二條　役員ハ會員中ヨリ例會ニ於テ之ヲ選舉ス但會頭、副會頭ハ名譽賛助員中ヨリ之ヲ選出スルコトヲ得

理事長ハ理事之ヲ互選ス

役員ノ任期ハ二年トス　但シ理事長ニ付テハ一年トス

理事ノ改選ハ毎年半數トス但引續キ重任スルコトヲ得ズ

第十三條　本會ニ左ノ職員ヲ置ク

一　主　記　一名

二　主　計　一名

三　編　輯　三名

四　編　輯　補　若干名

五　書　記　若干名

主記ハ庶務ヲ、主計ハ會計ヲ、編輯ハ編纂ヲ處理ス

編輯補ハ編輯ノ旨ヲ受ケ編纂ヲ分掌ス

書記ハ理事長、理事ノ命ヲ受ケ會務ニ從事ス

第十四條　主記、主計、編輯ハ理事之ヲ互選ス

編輯補ハ會員中ヨリ理事會之ヲ指名ス

書記ハ理事會之ヲ任命シ有給トス但スコトヲ得

第十五條　本會ハ調査研究ノ必要ニ應シ例會ノ決議ニ依リ各部ノ委員會ヲ設ケ各部ニ委員長一名委員若干名ヲ置ク

委員會ハ委員長及委員ヲ以テ會員中ヨリ理事會之ヲ指名シ委員長ハ當該委員ノ互選トス

理事會ハ特殊事項ニ關シ會員外ノ專門家ヲ囑託委員トスルコトヲ得

第十六條　委員長ハ當該委員會ヲ代表シ委員長事故アルトキハ當該委員會ノ決議ニ依リ委員其職務ヲ代理ス

委員會ノ經過ハ例會ニ於テ之ヲ報告ス

委員會ハ調査研究報告ハ例會ノ決議ヲ經テ本會ノ名ヲ以テ之ヲ發表ス但シ緊急事項ニ付テハ理事會ノ承認ヲ經テ當該委員會ノ名ヲ以テスルコトヲ得

第十七條　本會ハ毎月一回會員ヲ召集シ例會ヲ開キ重要事項ヲ審議シ報告會、談話會、討論會又ハ講演會ヲ催ス但理事會ハ必要ト認ムルトキハ臨時之ヲ開催スルコトヲ得

例會ニ於ケル議案其他ノ事項ハ理事會之ヲ會員ニ豫告ス但緊急事項ニ付テハ此限ニ在ラズ

第十八條　本會ハ春秋二季大會ヲ擧行ス

第十九條　本會ノ行フ事業左ノ如シ

一　建築ニ關スル諸般事項ノ調査研究

二　調査研究報告ノ發表

三　建築ニ關スル重要事項ノ議決

四　會誌ノ發刊

五　建築ニ關スル圖書ノ刊行

六　建築ニ關スル講演會ノ開催

七　建築ニ關スル展覽會ノ公開

八　建築ニ關スル視察

九　建築ニ關スル有志者ノ親睦會

十　理想的建築ノ計畫

十一　其他建築ニ關スル有益ナル事項

十二　會員ハ會費年額金拾八圓ヲ本會ニ醵出ス

但例會ニ出席シ難キ地方ニ在ル會員ノ會費ハ半額トス

一時ニ金貳百圓以上ヲ出ストキハ爾後前項ノ會費ヲ免ス

會員タルノ承認ヲ得ル者ハ入會金五圓ヲ納付スヘシ

特別賛助員ハ特別賛助員年額金九圓ヲ、普通賛助員ハ普通賛助費年額金六圓本會ニ前納スヘシ

但六期以內ニ之ヲ分納スルコトヲ得

第二十一條　本會ノ經費ハ會費入會金寄附金賛助員其他ノ收入ヲ以テ支辨ス

本會ノ財產ハ理事長之ヲ監理ス

第二十二條　本會ノ財產備權債務及每月ノ收支ハ主計其計算書ヲ作リ翌月理事會ニ報告ス

本會ノ財產備權債務及每年ノ收支ハ理事會其決算書ヲ作リ翌年一月例會ニ於テ報告ス

第二十三條　本會及本則ニ關スル詳細ノ事項ハ例會ノ決議ニ依リ細則ニ之ヲ定ム

第二十四條　本則ハ例會ノ決議ニ依リ之ヲ變更スルコトヲ得



日本エレベーター製造株式會社

大阪市東區中道川西町五百六十一番地　電話南三八〇五番

營業種目

エレベーター、リフト
コンベヤー
（東）松捲上機械クレエン
（式）架空索道及諸機械
右設計及製作
試驗
各種機械
高能率
安全裝置
塔設計

出張所
東京市丸之內東京驛前海上ビルヂング六階、六一九號、六二十號室
電話丸之內九六〇番

特約販賣店
東京市麹町區永樂町
高田商會本支店出張所
電話本局二二〇二番

代理店
大連市山縣通百番地
日米公司
電話二二七〇・二〇四五番

代理店
朝鮮京城府長谷川町八十五番地
日米公司
電話二五三〇番

建築と社會　第五輯第壹號目次

▲口繪
○かたらい（三色版）
○日本建築協會役員小照（寫眞版）
○第一回懸賞募集改良住宅設計圖當選者自第一等至第五等第三席（寫眞版自一至二〇）

〔卷頭〕
○迎大正十一年……二

〔論說〕
○建築改善と土地所有權の制限……日本建築協會副會頭 工學博士 片岡安……一
○分散主義の都市建築……名譽賛助員 法學博士 關一……七
○文化生活と田園都市……會員 工學士 橫濱勉……一七
○美的對象としての建築（一）……建築彙會 伊藤正文……二〇
○西洋住宅と日本住宅——私の實驗しつゝある上から——……山川逸郎……二四
○統一原理と「建築」批評……江村郊郁……二九

〔研究〕
○鐵筋コンクリート其の日その日（一）……會員 工學士 增田清……三四
○鐵筋コンクリート構造と施工上の諸問題（一）……會員 T N生……三九

〔都市〕
○亞米利加の都市計畫（一）……ウォルター・ディ・ムウデイ著 Z Y生譯……四二

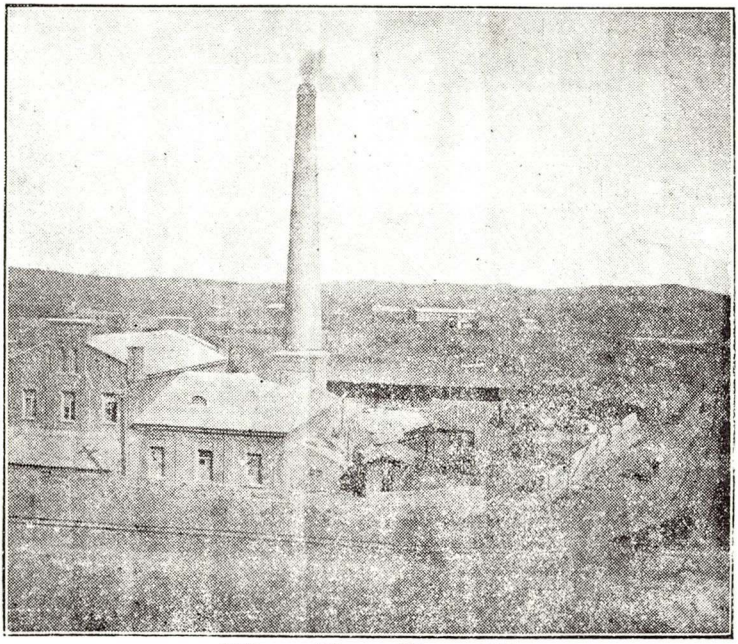
〔住　宅〕
○住宅と色彩(一)……會員・工學士・建築士・葛野壯一郎・五二
○大阪北港株式會社經營の住宅に就て……會員・建築士　小笠原鈔・五六
〔講　壇〕
○「ペイント」の種類竝に應用に就て(上)　日本ペイント會社技師長　伊藤貞興・六四
〔資　料〕
○大阪都市の生態現象……K・生・
〔漫　錄〕
○印度洋より(一)……會員・工學士・置鹽章・七八
○住むくふう……吉村美代子・八四
——思ひ出すまゝに——
○閨秀鎖談……M記者・八八
——住宅改良の希望　工學士内藤太郎氏夫人内藤周子——美術生活を本位に　河野唉子——　八九
□時　報　□會　報
〔附　錄〕
△第二回懸賞改良住宅設計圖案審査概評……

現代建築界ノ最高權威

關東廳土木課・南滿鐵道會社・大阪府廳・市役所
其他諸官省・有力土木建築設計家各位・實驗證明

顧問技師　工學士　雨宮春雄

相談役　前野芳造



（滿洲工場）

營業課目

滿州產

青色大理石、黑色大理石
鹿兒島產白色硅藻土
白色硅石及硅石粉、酸化マグネシューム粉末、滿蒙セメント各種、雜礦石
海水石鹼

鋪床材料

耐火リノリウム（專賣特許出願中）

耐水、衛生、保温、美觀、低廉

土木建築用防水劑

ボースイ（專賣特許）

品質內外品ニ優リ價格低廉

滿蒙化學研究所代理店

大阪市北區南安治川一丁目十三番地

大阪耐火リノリウム工業合資會社

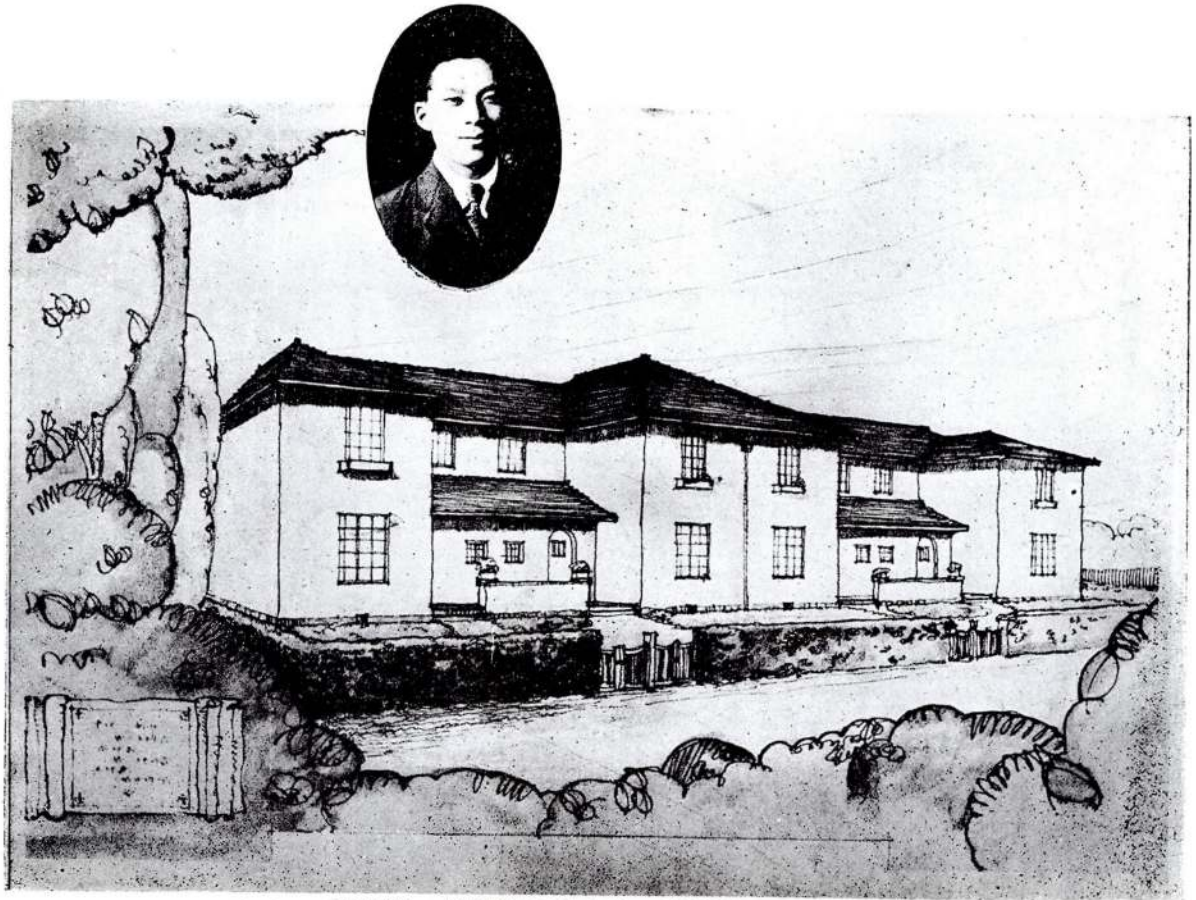
電話西　營業用　四五九
長二五五四
三六三三

日本建築協會役員（いろは順）



（向つて左より）氏安岡片頭會副（央中）氏實田池 事 理(1)　氏郎一壯野葛 長事理(2)
氏吉久木吉(5)氏七長井吉(4)氏勉　濱橫(3)

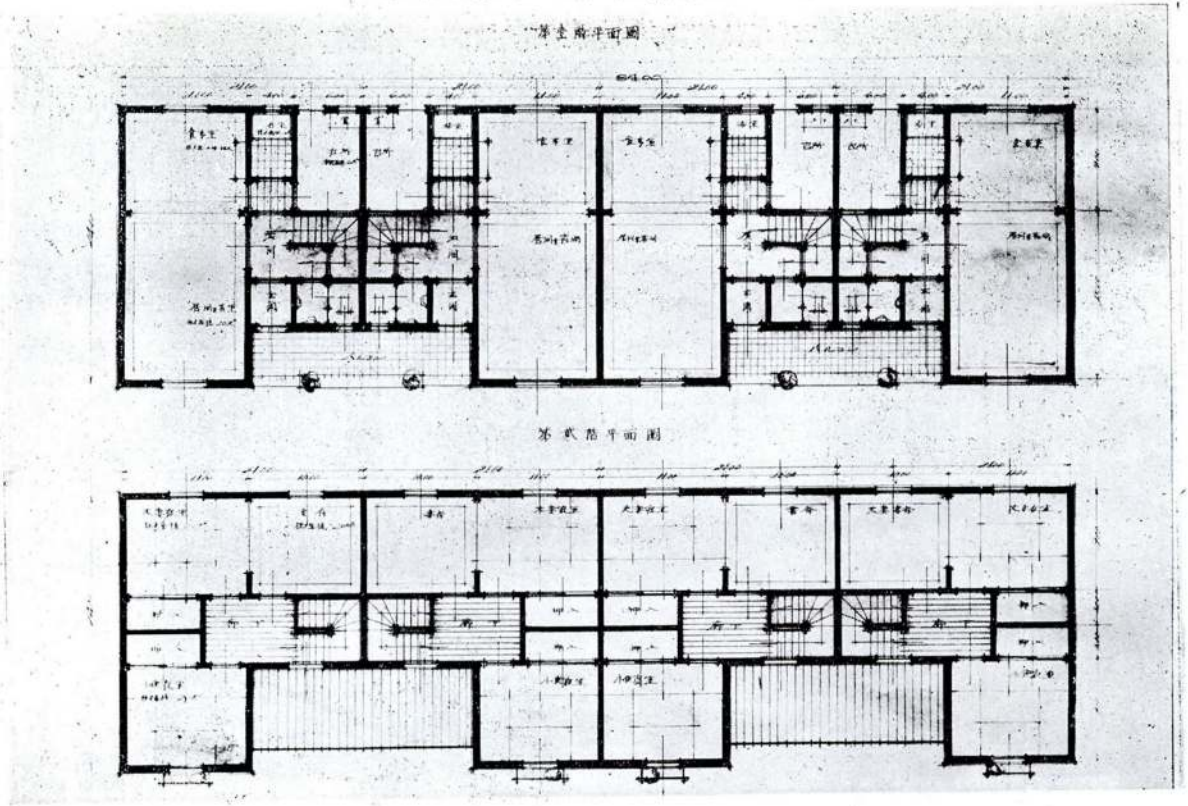
（向つて右より）氏郎三井平　同 (2)　氏吾文戸瀨「事」理(1)
氏夫悌江波(5)氏銅原笠小(4)氏象禹本松(3)

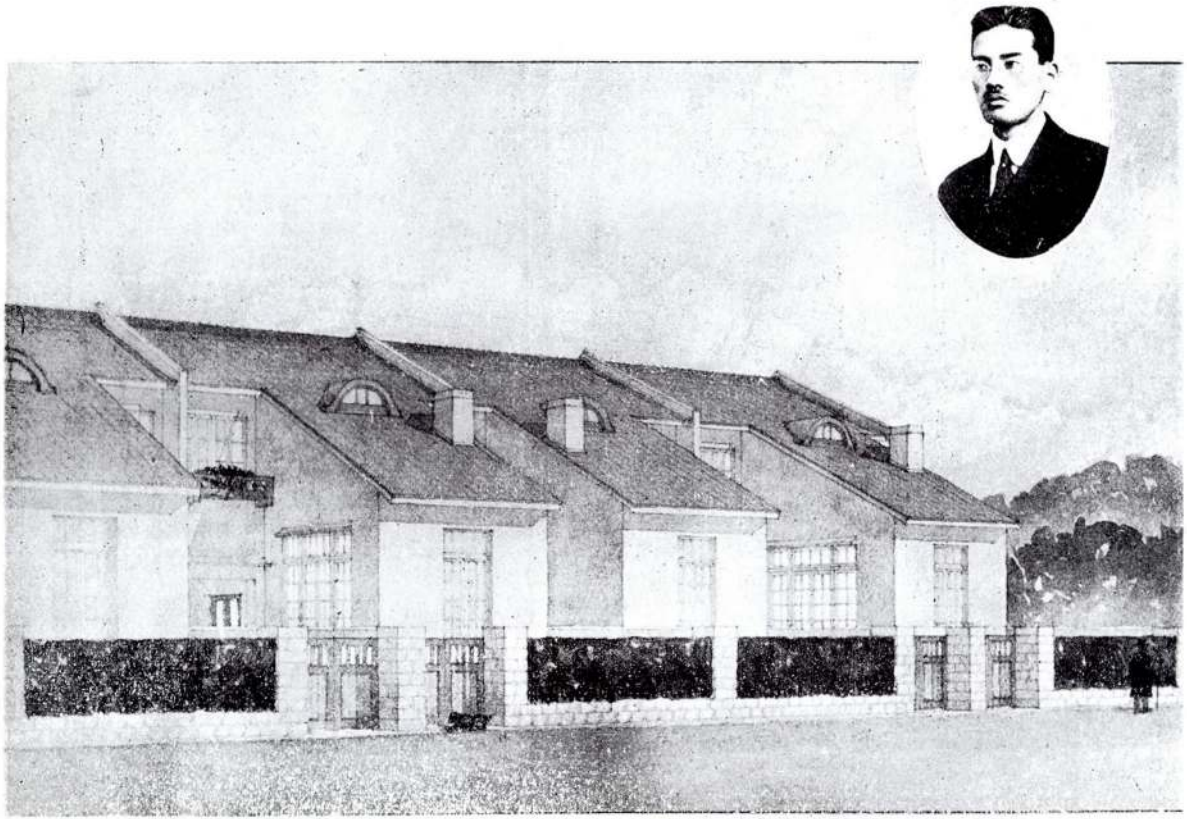


第二回懸賞募集　改良住宅設計第一等當選

（設計者　中村一秀君）

第二回懸賞募集　第一等當選平面圖

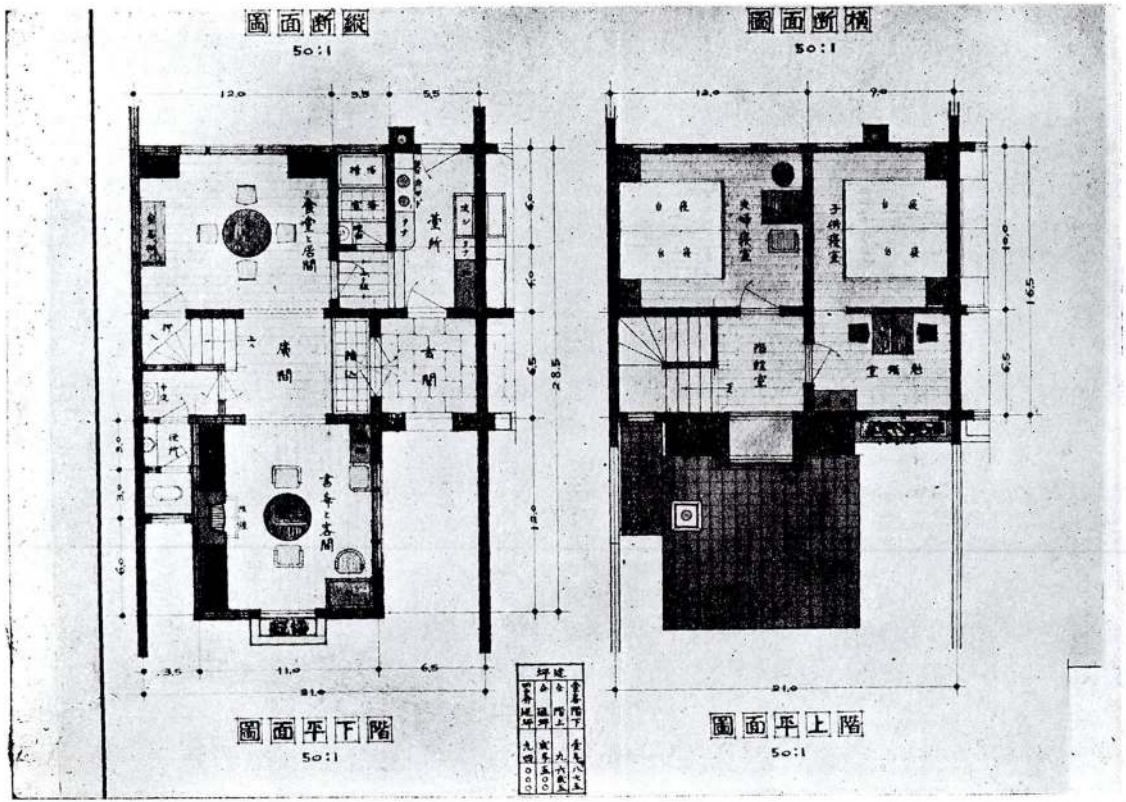


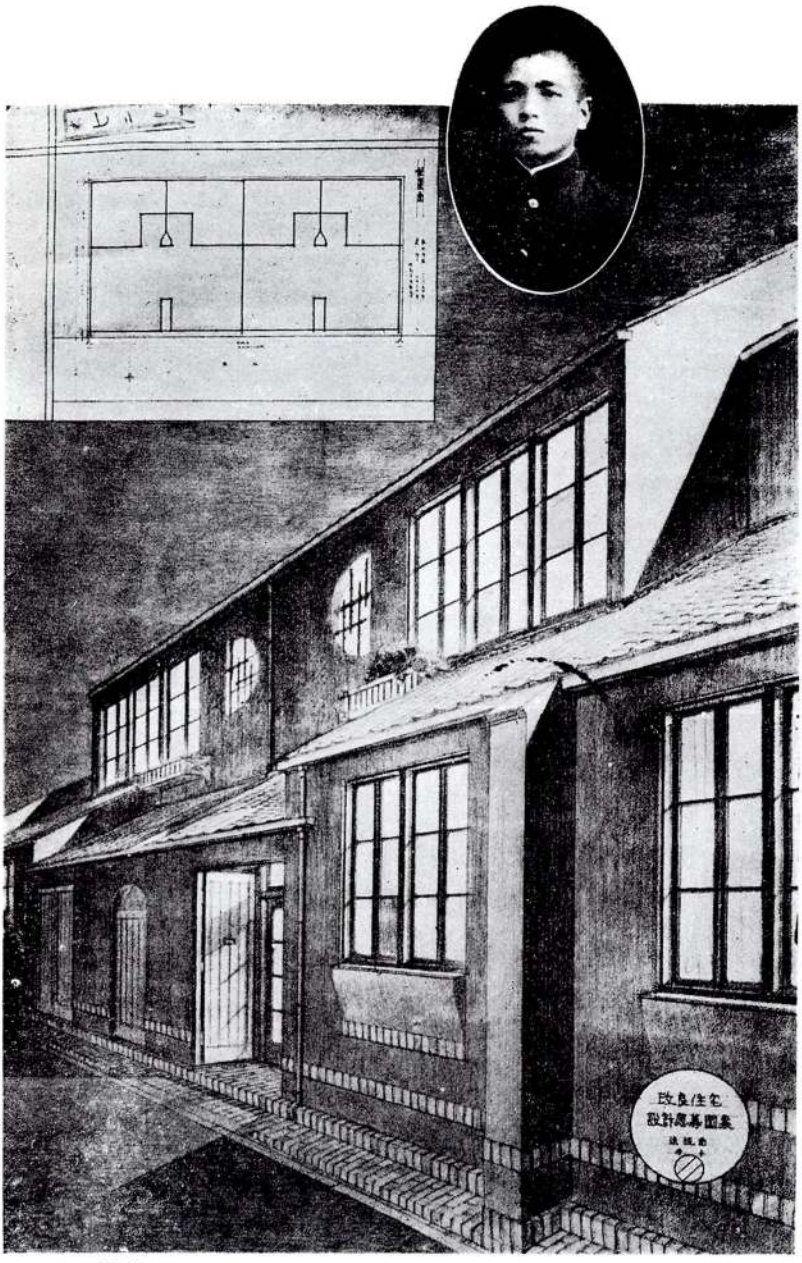


第二回懸賞募集　改良住宅設計第二等當選

（設計者　山本辰次郎君）

第二回懸賞募集　第二等當選平面圖

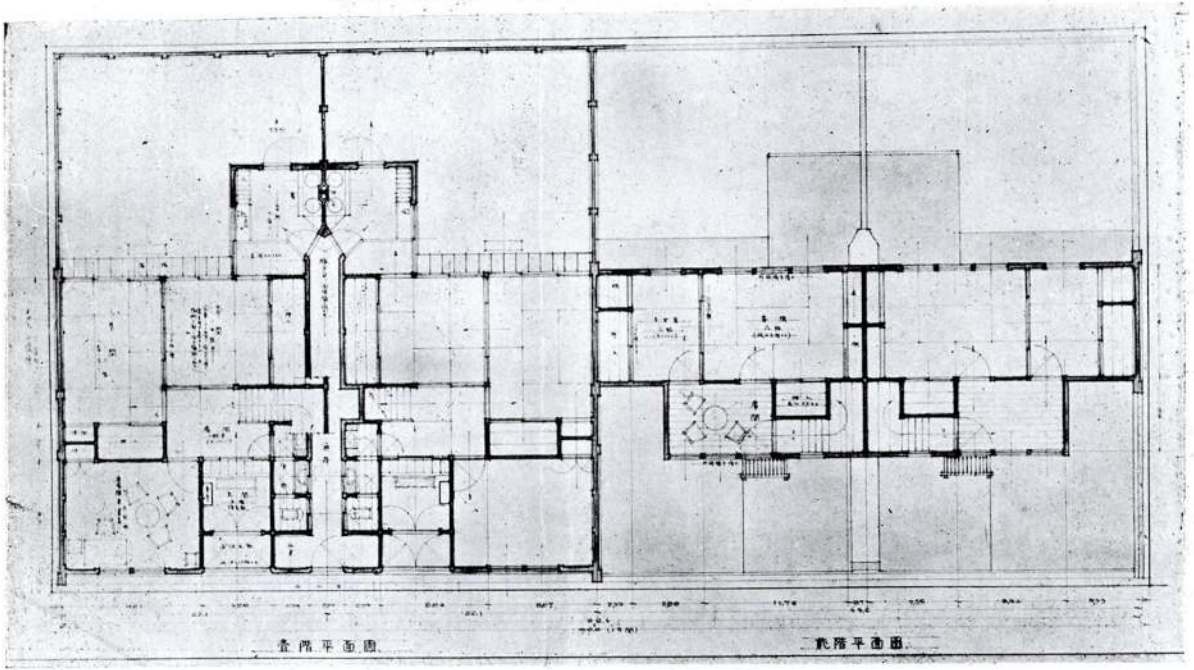


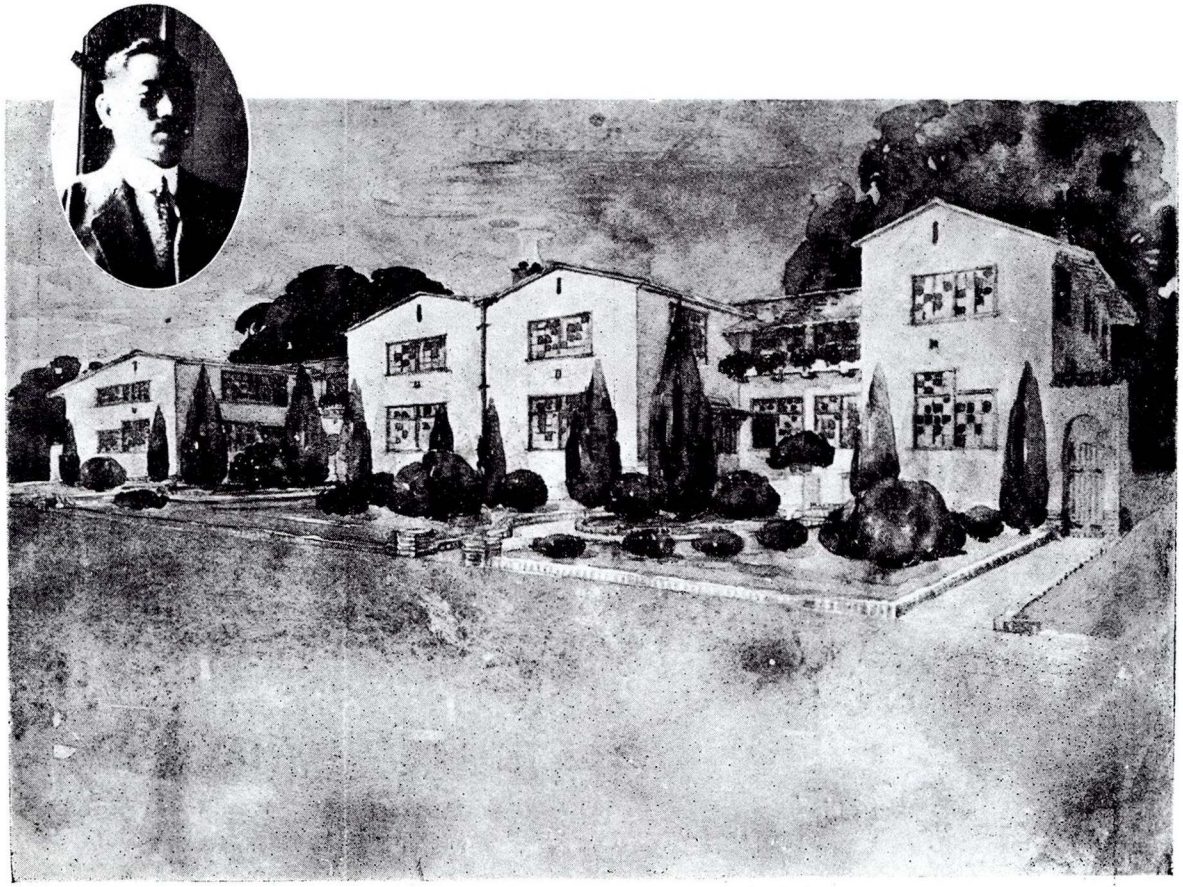


第二回懸賞募集　改良住宅設計第三等第一席當選

（設計者　須藤貞雄君）

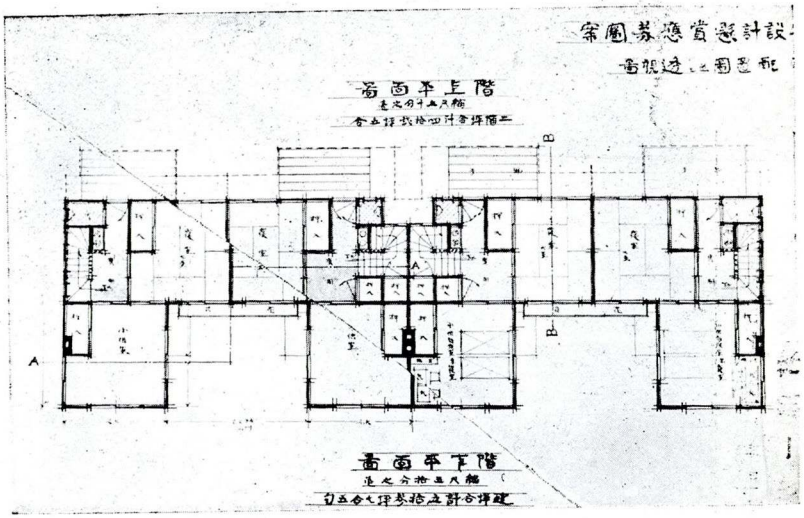
第二回懸賞募集　第三等第一席當選平面圖

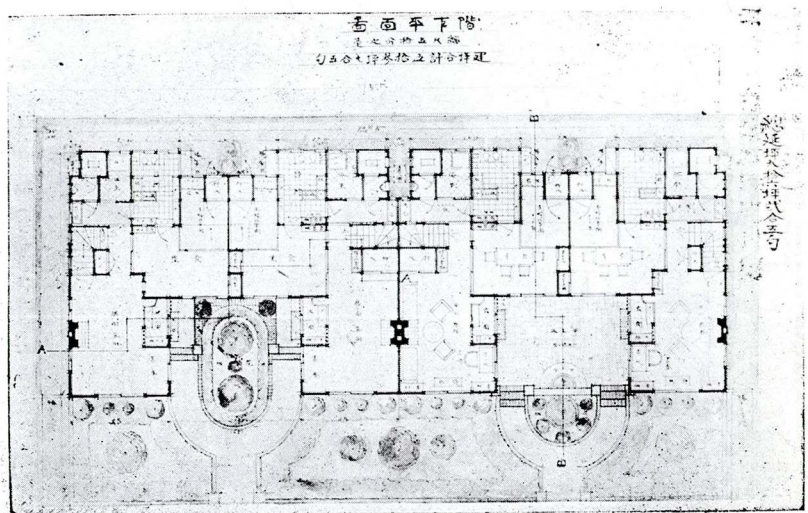




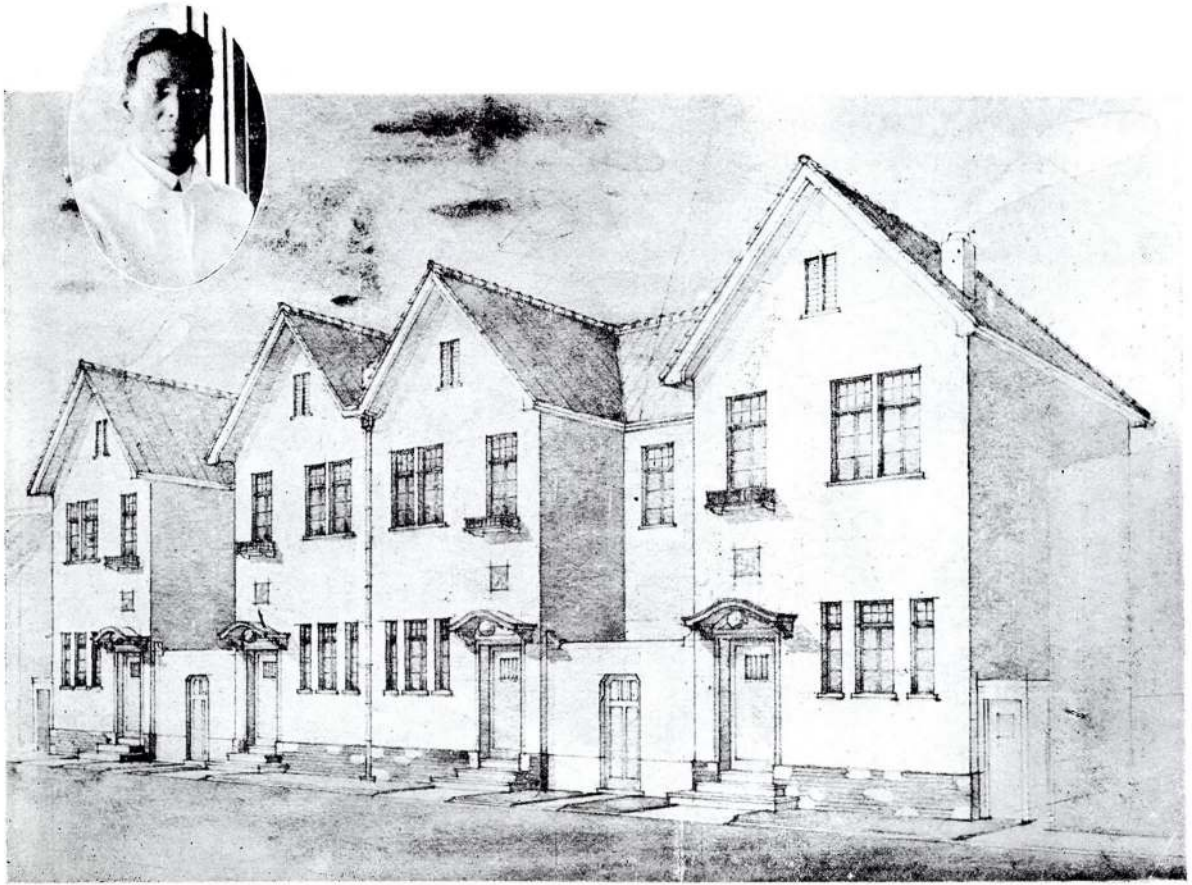
第二回懸賞募集　改良住宅設計第三等第二席當選

（設計者　小川安一郎君）





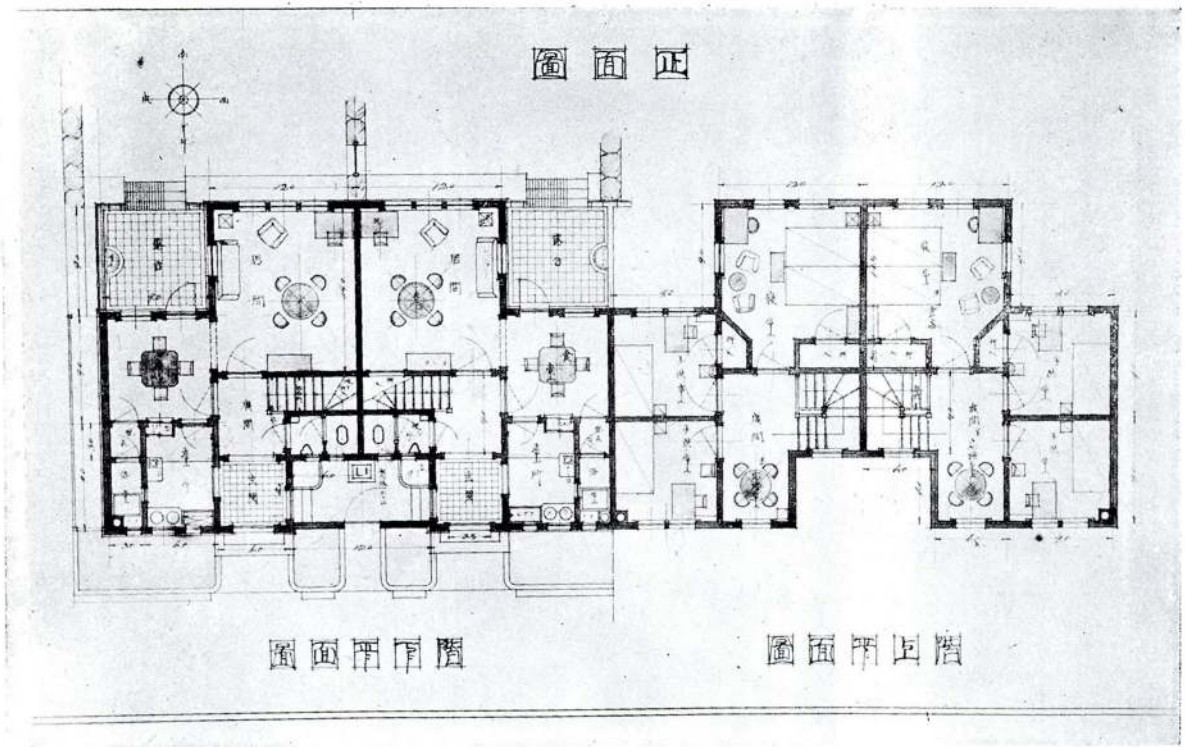
圖面平選當席二第等三第計設　集募賞懸回二第

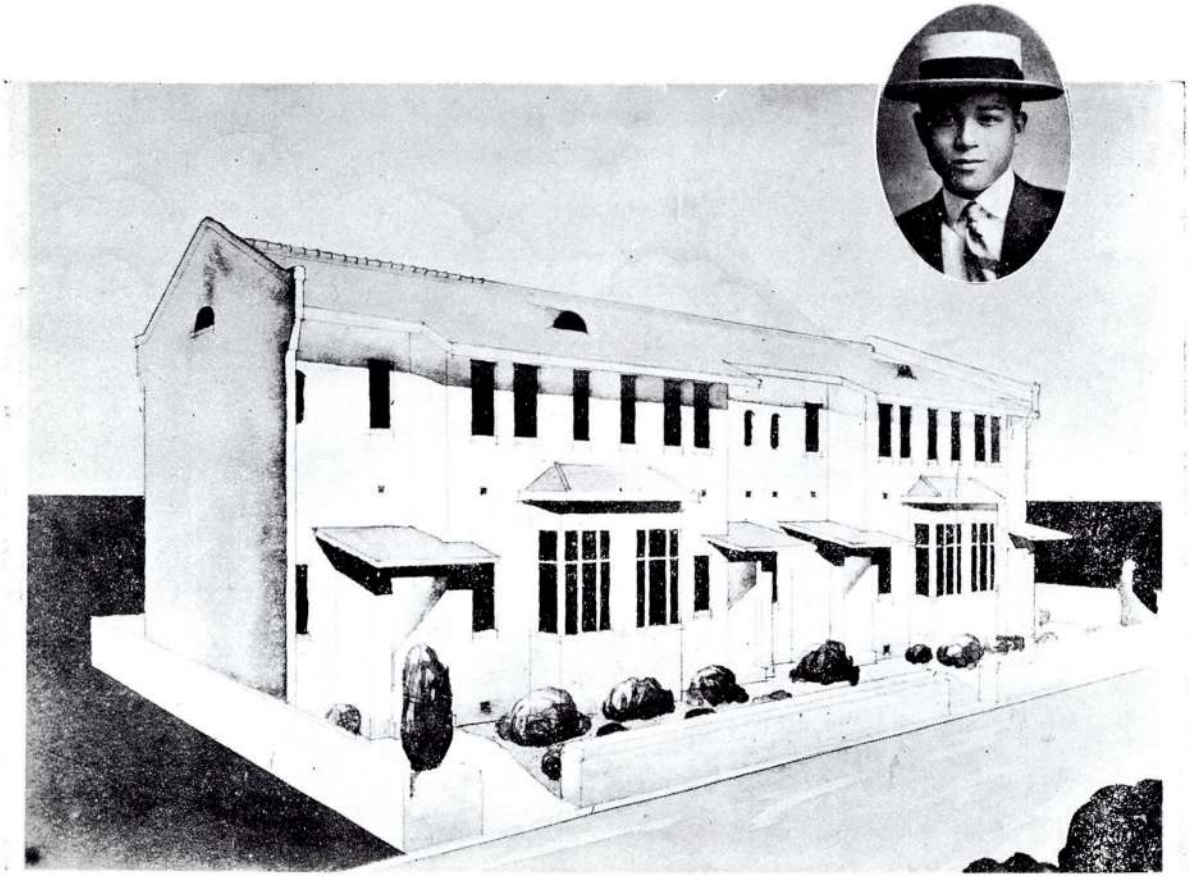


第二回懸賞募集　改良住宅設計第四等第一席當選

（設計者　島本四郎君）

第二回懸賞募集　第四等第一席當選平面圖

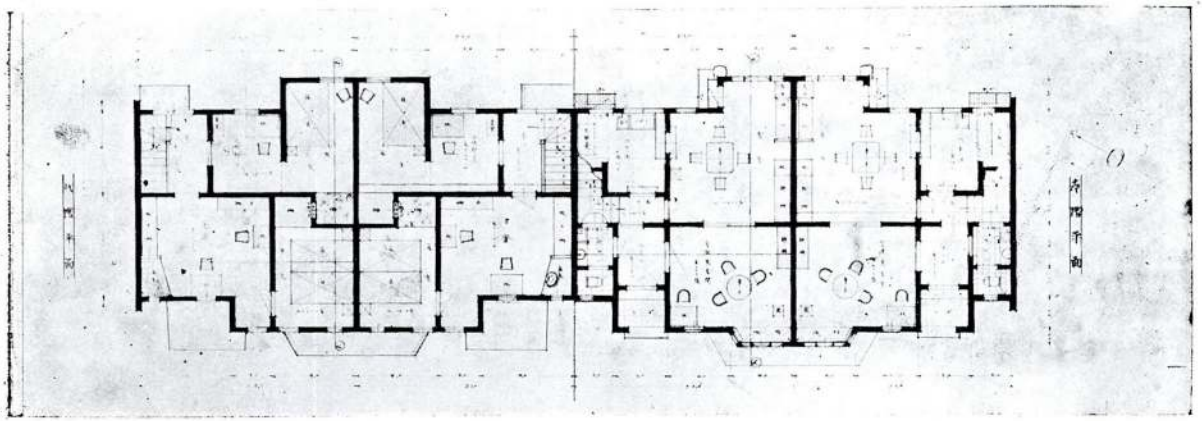




第二回懸賞募集　改良住宅設計第四等第二席當選

（設計者　野口昌三君）

第二回懸賞募集第二等四第二席當選平面圖

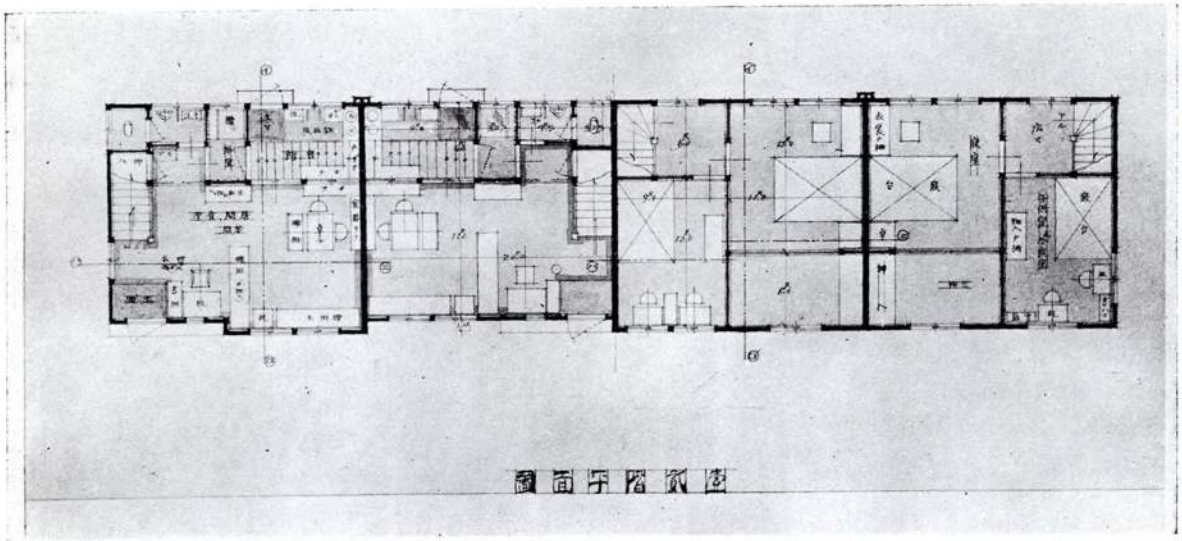


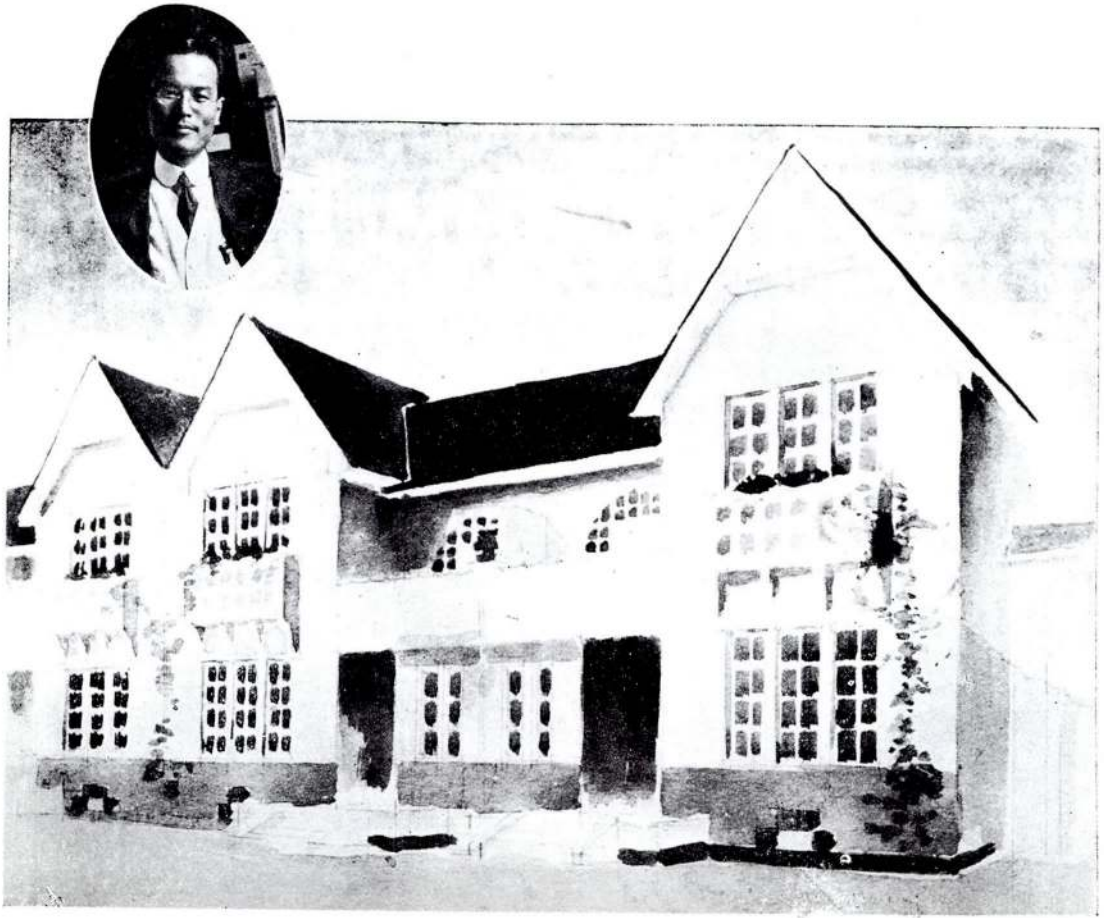


第二回懸賞募集　改良住宅設計第四等第三席當選

（設計者　首藤重吉君）

第二回懸賞募集　第四等第三席當選平面圖

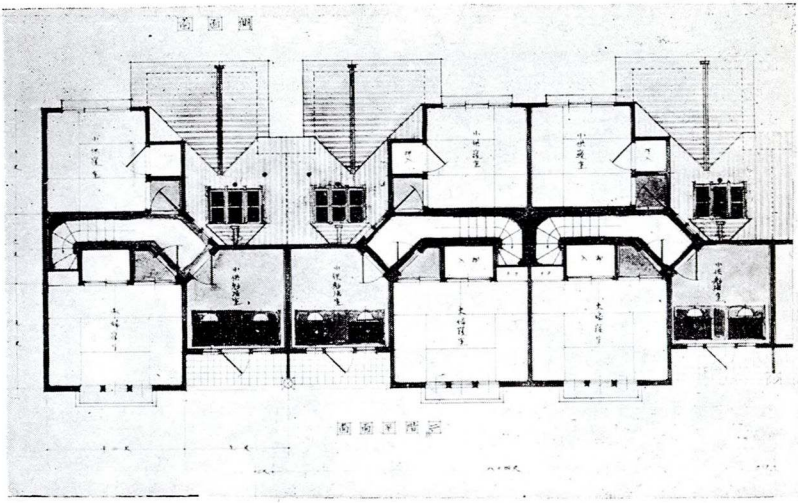


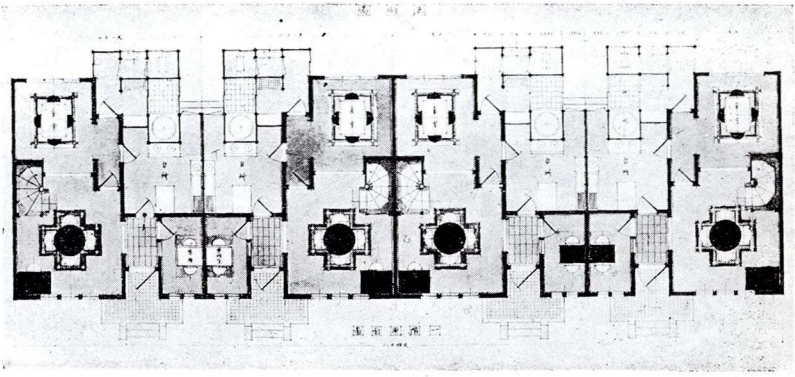


第二回懸賞募集　改良住宅設計第五等第一席當選

（設計者　小西一良君）

第二回懸賞募集　第五等第一席當選平面圖



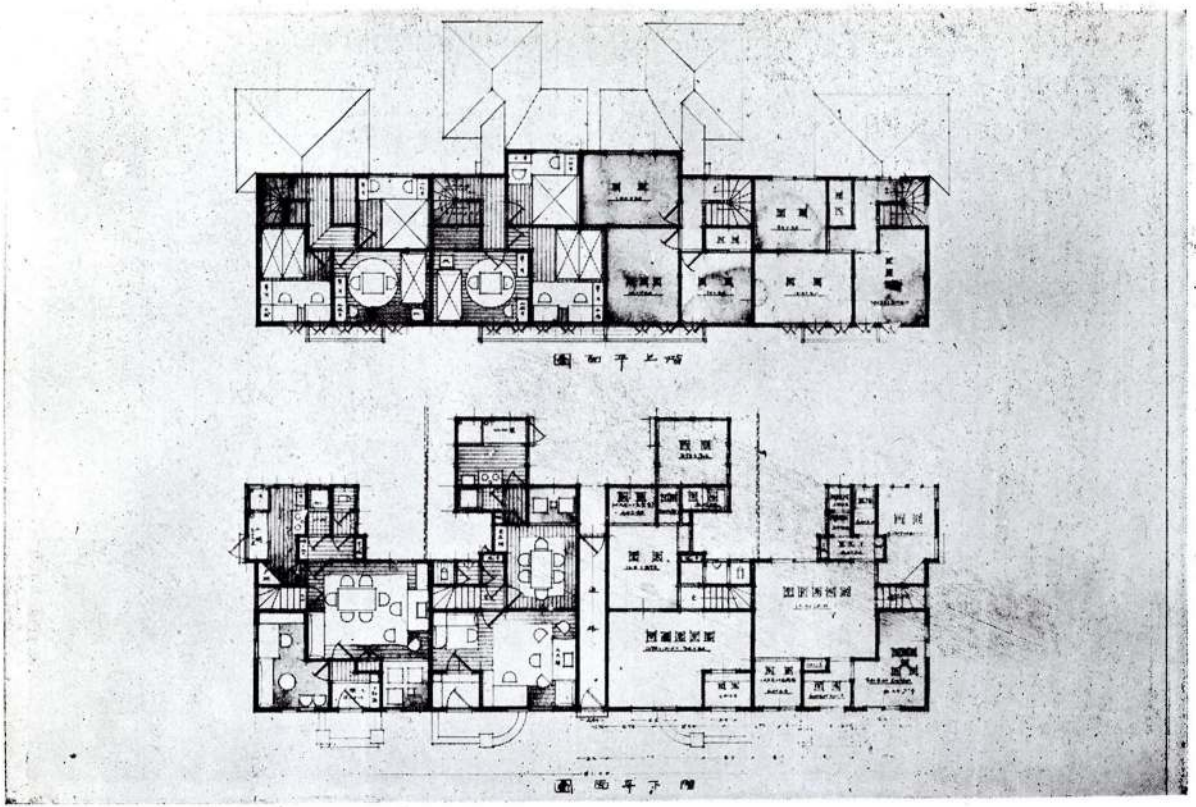


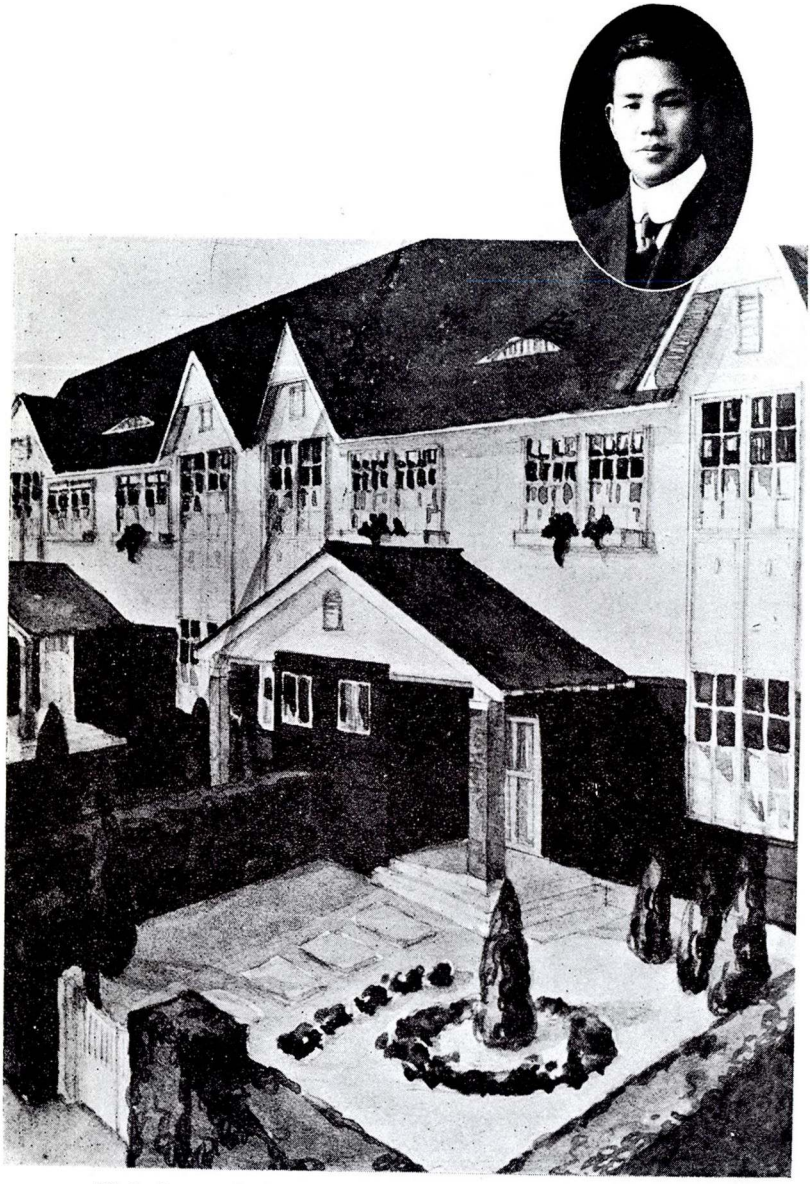


第二回懸賞募集　改良住宅設計第五等第二席當選

（設計者　伊藤次郎君）

第二回懸賞募集　第二等第五席當選平面圖

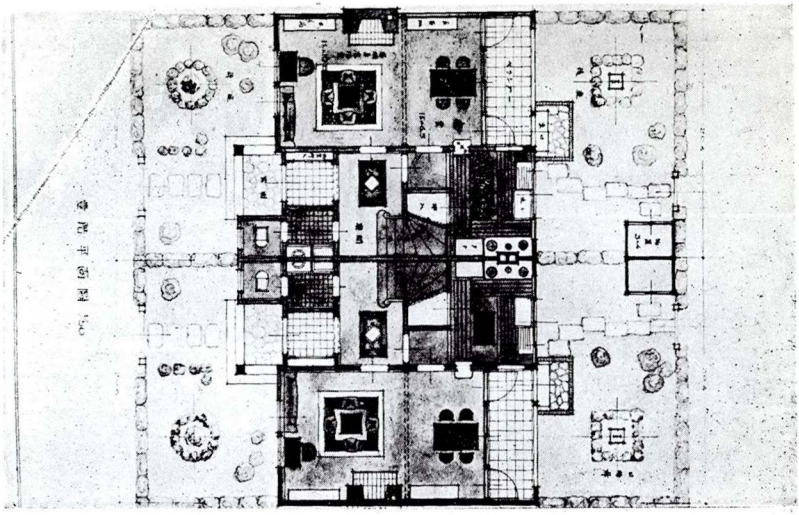


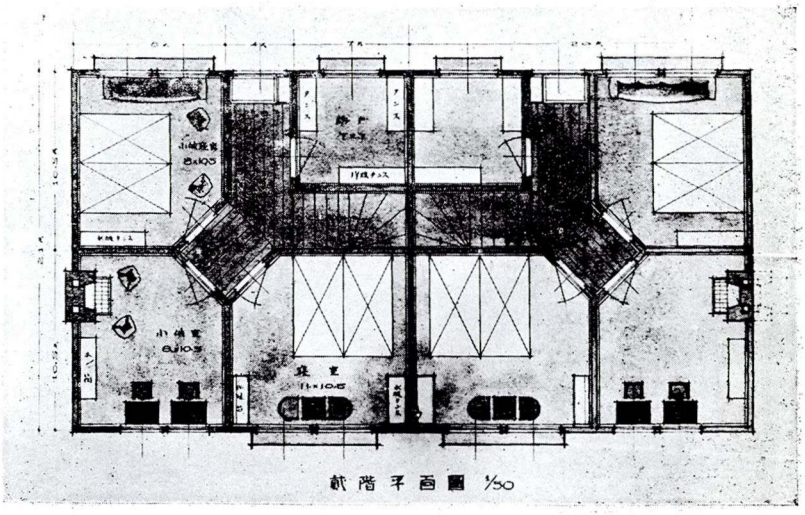


第二回懸賞募集　改良住宅設計第五等第三席當選

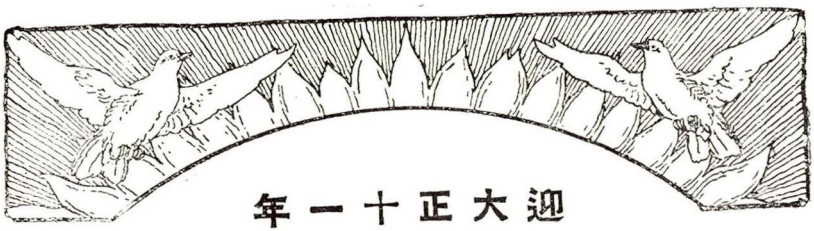
（設計者　増山新平君）

第二回懸賞募集　第五等第三席當選平面圖





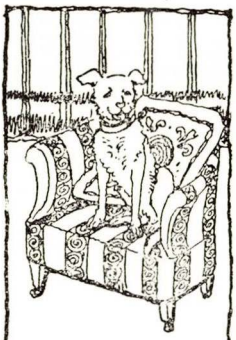
弐階平面圖　1/50



迎大正十一年

正朝觀萬國　元日臨兆民　有政敷玄造
撫機御紫宸　年華已非故　淑氣亦維新
鮮暉秀五彩　麗景輝三春　濟濟周行士
穆穆我朝人　感德遊天澤　飲和惟靈塵

年の内に春はきにけり一年を
こぞとやいはむ
ことしとやいはむ



論說

建築改善と土地所有權の制限

日本建築協會副會頭　工學博士　片岡安



一

建築の改善は現代文化生活の痛切なる要求であることは此處に呶々するまでもなき事柄であつて、吾人の久しく唱導し來つた都市計畫の實現に就ても亦一般生活改善の第一要諦たる住宅改良等の社會政策的施設に於ても凡て建築の改善を基礎とせざるものはないのである。近時殊に難澁の緊急事とせられて居る住宅問題に於ては住宅建築の捗々しからざる其建設難が其中心であるは人も知る通りである。而して此等の時代要求の痛切なるものあるに拘らず、改善されたる建築が何故に促進されざるやは社會の進展上容易からぬ問題であると同時に、其促進

運動の重大なる意義あるを深く感せざるを得ないのである。本年秋期に於て吾人同志が開催せんとせる住宅改造博覽會は正さに其一端に觸れんとする一大促進運動と見て差支はないのであるが、更に此重大なる問題を各方面より見る時は或は土地に關する稅制に不備なる點に於て、或は民衆一般の有する土地所有權の無制限的觀念に於て、或は又住宅政策や、不動產金融の欠陷等に於て凡て一大革新を加へざれば決して其目的を達し得ざるや明かである。此等の各方面よりの革新運動は吾人同志の微力のみでは如何ともし難き廣汎にして且つ根本的な社會的、政治的及經濟的に大問題であることも亦明かである。吾人が社會一般の有識者に愬へんとするのはその難澁なる大問題であるを知るからである。

二

建築改善を促進せんとするには國家の建築行政改善を第一義とするは本誌第四輯第十號に於て既に述べた通りであるが、本編に於ては主として其一部に觸れたる建築敷地の造成に就きて現在の甚しき不備欠陷を述べて見たい。

建築は土地の上に建設さるゝを原則とする以上、其敷地の造成が其根本義であるは言ふまでもない。建築物が一箇の樹木であるとすれば土地は恰かも其根帶であるやうなもので先づ以て土地の適當なるものを得て然る後にそれに適應する建築物が建設さるゝのであるから、好適の土地の收得を以て建築改善の第一歩とせねばならぬ。然るに我國の現狀は建築物の必要なる場所に於て其土地を收得することが圓滑に運ばれて居るや否やと言ふに、吾人は斷じてその然らざる難澁の情態にあるを叫ばざるを得ない。換言すれば現在に於ては、建築物の建設はそれが經濟的のものでも公共的のものでも將亦住宅專用のものでも、殆んど其凡てが土地收得難の爲めに沮止されて居るやうな情態であるを言ふのである。而してその建築物が生活改善の意味に於て緊急であればある程其建築敷地收得の困難が甚しいのである。或は

之を以て經濟自然の原則と見做す人もあらんが、吾人の見るところでは唯單に需要の旺盛に伴ふ供給の騰貴と言ふ如き一時的現象ではなく、土地所有者の投機的行爲と其行爲を助成する如き稅制の欠陷及土地賣買業者の策謀等が累を爲し、經濟上合理的に土地の價格を評價することが沮止されて居るのではないかと思はれる。而して更に其上に一大病弊が介在する事は、我國の大都會は其外郊地帶の大部を擧げて已に業に行詰りの狀態にまで放拋して顧みず、唯單にそれを投機の材料として取扱つて居ることである。

三

土地を農業の耕作に利用し又は牧畜や果樹花園を以て厚生の資となす場合と、之を都會地に於ける建築敷地となす場合とは其經濟的價値に非常の差異を生ずるは固より當然である。而して都市の發展及其擴大に伴ふ土地狀況の變遷により其土地所有者のみが其莫大なる增加價値を獨占するは不合理の極であるは言ふまでもない。此處に土地所有の權利が大に制限されねばならぬ理由が存在するのである。

土地所有者は其土地が從來田地であつたり、果樹園であつたりした時に得た其所有權を以て、其土地の市街地と成り又は住居地帶となるに連れて特に增加したる經濟的價値を當然の報酬と心得て居るのを普通とする。其處に土地賣買の忌むべき投機が行はるゝのである。英吉利に於て貴族の多數は其世襲の財產として廣大なる土地を所有して居たのであるが、近時都市發展の爲めに其等が驚くべき大資產となつたことは有名なる事實である。ロイドジョージ氏が地價增加の差益稅を立案して其實行により其不合理を匡正せんとしつゝあるけれども、未だその目的を達するところまでは達して居らぬと言ふことである。倫敦市街地に於ける一大地主たる一貴族は、其一ケ年の地代として收むる處約一千五百萬圓に近しと言ふやうな事實は、什うしても其土地所有權に一大制限を加ふるの合理的なるを思はしめると同時に

我國の現時の狀態を考慮するの急要なるを誨ふるものと考へられる。

我國の大都市及その近郊は最近二十年間に著大なる發展を爲し、殊に歐洲大戰以來の發展振りは目覺しきものあつて、建築物の改善は古今未曾有の狀態である。然るに其內容を精しく觀察する時は土地所有者の誤れる所有權觀念と稅制の不備は其實質的發展を沮止すること著しきものあるはまだしも、市街地及郊外地に於ける土地の讓渡は全く骨董品競賣と同樣に行はれ、折角の文化的に又經濟的に合理的の改善進展の計畫も、競り上げ、釣り上げ又は誘惑的に運ばるゝを常とするやうな變態にある事を發見するのである。言ひ換ゆれば、現在我國の文化生活の進展向上が殊に著しきものあるやうな機運に到達したにも不拘、其經濟的及文化的の施設が土地所有權の合理的制限なき爲めに、可成り甚しく沮害されて居るのである。之を一々例示すれば際限なき事なれども、其著しき一二の實例を擧げて如何に吾人の文化的施設が其實現を壓へられて居るかを述べて見たい。

四

世界中地價の最も高きところは紐育市のマンハッタン區に屬するブロード、ウエーの南部及第五街の一部であつて、其時價は一坪に付き約一萬圓乃至五萬圓であると言はれて居る。而して其地價が斯の如く高位にある理由は寔に簡單に之を說明し得るのであつて、其土地利用の經濟上合理的なる採算數字に之を表はし得るのである。決して骨董的の意味や投機的又は誘惑的の賣買價格ではない。若し其處に少しでも斯かる意味を含むものとしたならば、彼等は決して之を傍觀してその儘に之を見送り、彼等の愛する大都市の文化的施設が其の爲めに沮害さるゝを不關焉で濟まし込むものではなからうと思はれる。同市のブロード、ウエー南部に於ける二三十階乃至五十階の建築物は其各階の有效面積は極度に利用され、每平方呎の一ケ月賃貸料は二十五セント乃至五十セント（我一坪に換算すれば十七八圓乃至三十五

六圓）を普通とする。而して戰後は特に上騰して新たに賃貸を始むるものは更に割增を要すると言ふことである。若し此の賃貸料金を其建築費及土地代金に還元する時は我一坪の土地が或は三萬圓や四萬圓であつても採算上合理的であり得るのである。之に反して同市の住居地帶或は郊外地に就て見れば其地價は著しく低廉であつて、交通機關を利用して一時間以內に到達し得らるゝ理想的の場所と雖も、其地價は殆んど其開拓實費に過ぎないやうな狀況である。近來同市の膨脹と共に住居地帶には好適なる共同住宅や單獨住宅が盛んに增築さるゝその半面に郊外地にも低廉なる住心地よき住宅が次第に增加し、以て同市民の生活狀態をその行詰りより救ひ更に一段の向上を促して居るのである。而して之を我國の實狀に見る時は正さに反對の現象をそこに發見さるゝのである。

我國の大都市にては市街地の適當なる場所に現代式の建築をなさんとする篤志の投資家ありとするも其等の場所には概ね舊式不體裁のしかも市民の經濟發展や共同的生活に不利益なる矮屋が儼存し其所有者は何れもその改善を企てもせずして其篤志の投資家の企業を妨ぐるを常とするのみならず其態度を當然と考ふるらしく思はれる。其直接間接に文化生活の向上を妨ぐる程度の如何に甚大なるやは別に說明するまでもないが、それ等は凡て土地所有權の無制限なるを信ずるから生ずる恐るべき弊害の一と見てよからう。又郊外地に於ける住居地の收得は更に困難であつて吾人の生活向上を沮止しつゝあることは敢て市街地のそれに讓らぬのである。

以上の事實は主として土地所有權に關する制限が甚だ不十分であることから生ずるのである。其法令の不備なる點が直接の原因であり、稅法の不徹底なることも其一因をなすのであるから先づ以て其關係を十分に精査し、立法的改正を企てるを第一とする。投機的又は掛引屋の材料として土地が計畫的に取扱はれて居る間は其上に建設すべき建築の改善は期待すべくもないのであるから、輿論の力を以て土地所有權の適當なる制限を實現せしめ、土地及其地上權の所有者をして其轉賣の間に莫大なる利潤を得んとする如き行爲を沮止することが今日の急務である。

分散主義の都市建設

名譽賛助員　法學博士　關　一

一　十八世紀以前の倫敦の發達

英國に於ける都市の發達は歐洲大陸諸國と著しく其の趣きを異にす。拾六世紀エリザベス女王時代に至つて國威大いに揚りたるも、國内に於ては佛國の如く中央集權專制國家の發達を見ず。十七世紀に於けるクロンウエルの政治は佛のリンエリユーと共に國運の進展に與つて力ありしも、民權の發達に力を盡し、自治の觀念は此時代に著しく振張し、議會の權能も增加した。スチュアルト王朝は佛のブルボン王朝に比すべく、チャーレス二世は路易十四世と相似たる點多かりしも、議會との衝突によりて永く其の專恣を許されず。佛國の如く都市の美觀を以て王權の表徵となすが如き政策が行はれなかつた。之が爲に英國の富强は地方自治制の發達の上に立つことゝなつた。倫敦の發達が巴里と全く異りたる方向を採り、倫敦が四百五十萬人の人口を包擁する世界最大都市にして尙一建物内の平均人口七八八九に過ぎざる所以は、十六世紀に起原を有する分散主義の賜と云ふべきである。

倫敦に於ける分散主義に就てはエリザベス時代一五八〇年の布告(Proclamation)に於て既に其の起原を探ぬることが出來る。此布告は倫敦の密集住居の弊を指摘し流行病傳染の危險を除去せんが爲に、合ひ住(Indwellers, inmates, undersitters)を禁じ、倫敦市長は一定の期間内に是等の間借、同居者に市外の住宅を指定すべきことを命じ、又倫敦市の城門より三哩の地域内に住宅の增築を許さず、一戸内に二

ッ以上の家族の居住を禁ずることゝした。此の布告は巴里市の如く一般に市外の建物を禁じたるものにあらずして、市の周圍に三哩の地帶を畫きて空地を存し、人口の增加と共に、此の地帶以外に住宅の建築を許した譯であつて、今日の田園都市論者の主張する所と一致して居る。

此の布告は其後十二年を經て議會に於て法律として議決せられ、議會の特別の承認を得るにあらざれば此の空地地帶に新なる建築を許さざることゝした。現今倫敦の中央部に於てホルボーン、フリート、ストリート、ストランドの如き最繁華なる商業區域に近くリンコルン、インス、フイールヅの如き小公園ある所以は、一五八〇年の布告、一五九二年の法律の賜であつて、此場所は一六一三年商人等が此空地に建築せん事を願出でたるも、上述の法律に違反するものとして拒絶された所である。其他一六〇七年に排水工事を行ふたムーアフイールヅの如きも此法律に依つて建築を許さずして公園として保留せられた。

又一六三二年チャーレス二世は倫敦を浮華の風に染ましめ、地方を貧弱ならしむとの理由に依り、貴族の市内住居を禁せんとした。蓋し、チャーレス二世は路易十四世と同じく專制主義の君主であつて、遂に斷頭臺上の露と消えたが、宮殿の豪奢を誇るよりも、地方の富源を維持せむとしたことは佛國と著しく相違して居る。上述の貴族の市内住居の禁令は十分に行はれざりしも、倫敦に於ける貴族と其領地との關係を密接ならしめ、其往來は倫敦附近の交通狀態の改善を促がし、道路を發達せしめた。且つ、當時倫敦は單純なる消費地にあらずして、商工業の中心となり、貴族の消費を見當てにするよりは、商業金融上の利益を基礎とした爲に、十九世紀以後に於ける大都市發達の基礎を有するに至つた。一六八八年の革命に依りスチユワルト王朝倒れ、翌年議會の推したる維廉三世の即位は、倫敦市民の財政上勢援に依るものであつて、一六九四年六、七月に於て財政上の急に應ずる爲に、倫敦市民の獻金は百廿萬磅に達したと云ふことで其富力を知ることが出來る許りでなく、民權の發達を推知すべき事件である。

十七世紀に於て倫敦の發達に重大なる變化を及ぼしたことは、一六六五年及一六六六年のペストの流

行及大火である。前者は拾萬人の生命を奪ひ、後者は一平方哩の面積に亘り、八十九の敎會千三百戸の家屋を灰燼にした。此結果倫敦市民は密集住居の弊を實感して、分散主義を嘆美するに至つたのは當然である。此大火の後有名なる「クリストファーレン」の倫敦改造計畫が表はれた。此計畫は遂に實行せられなかつたのであるが、倫敦に於ては著しき變化が起つた。此變化は商業地域と住居地域の截然たる分離であつて、史家「マコーレー」が細かに記述した如く、大火後「シチー」の特質は愈明白となり、大商人銀行家は一週間中六日間は毎朝商業地域に往復するも、住宅を首府の他の地域又は郊外に求むることゝなり、此居住關係の革命は同時に起りたる政治革命より輕視し難き影響を倫敦に及ぼし、ロムバート街スレッド、ニードル街に富商の住居するものなく是等の商人は「シチー」を以て致富の場所とし、居住休養は他の場所を撰み、銀行商店の閉店時間後の「シチー」は寂寞の巷と化し、銀行家大商人は最早市民にあらずして、從つて市の名譽職等となることなく、「シチー」の名譽職中には世界に名聲を博する實業家の名を列することなきに至つた。

斯の如き變化の生じた原因は、レンの統一的改造計畫を採用するよりも、束縛を脫して自由の天地に於て、必要に應じて分散主義を實行した爲であつて、佛國の巴里の如く政府の煩瑣なる干渉、寵商の保護等行はれずして、地價は低廉で、實際の必要に順應し、容易に變化し得べきことが、最大の理由であつた。其結果として既に述べた如く、倫敦は消費本位より生産本位、商業本位となり、世界都市として其發展の基礎を鞏うすることが出來た。

貴族の倫敦居住の禁止、商業地域と住居地域との分離と共に、倫敦市内及附近の交通は著しく發達し馬車の使用は十七世紀以降漸次に普及し、一六五四年倫敦に於ける馬車の許可證三百、一六六一年には四百に上つた。又一七三九年倫敦の人口が七十二萬五千人に達したる時、自用馬車を有するもの二千四百八十四人、貸馬車千百を數へた。今之を十九世紀中葉の、第二帝政時代の巴里が百五十萬人の人口を

擁するに拘らず、馬車許可證千六百四十六に過ぎなかつたことと比較すれば、兩市の構成の相違を想像し得る。

(Report of the London Traffic Branch of the Board of Trade 1910.)

又倫敦と附近都市との交通も發達し、郵便馬車は普通、急行に分たれ、一七八六年には倫敦より出發する郵便線路は十九線を算ふるに至つた。之が爲に道路の改善を要したるは當然であつて、十七世紀の中葉より英國特有の賃取道路 Turn-pike Road の成立となり、其最盛に行はれたるは十八世紀の後半で一七六〇年乃至一八〇九年間に許可を受けたる「ターンパイク」八千五百十四の多數に上り、其大多數は倫敦附近のものである。蓋し道路築造の技術も、其統一的組織も、佛國は英國よりも遙に進歩し居つたのであるが、其利用の點に於ては佛人は到底英人に及ばなかつた。賃取道路制度の如きは制度として決して賞賛すべきものでなく、其統一を缺きたる爲に後年種々の問題を惹起したものであるが、佛國の如く王宮の窓より所謂四通八達の大道路を眺めて、道路の完美を誇るが如きことは、英人の關知せざる所であつて、使用者の負擔能力を基礎として實際の必要に應じた賃取道路を以て、都市集中の弊害を防止した英人の巧妙なる交通政策は意味深長のものである。且つ倫敦は其 Silent Highway としてテームス河を利用することを忘れなかつた。一六一三年にテームス河上の運送に依つて衣食した船夫と其家族の總數は四萬人に上つたことで、其乘客貨物の運送の大なりしことを想像すべく、スチユワルト王朝時代に國王が市民と衝突して、王宮を「ノルウイッチ」に移すべしと威嚇した際に、當時の市長は冷然として國王は王宮を移し得べきも「テームス」を移す能はずと答へたるは其運送上の重要を示す一挿話である。

二　都市交通機關として鐵道と街路

十九世紀の初より英國に起りたる道路及運送機關の進歩に就ては、一々詳細に述ぶる遑かないが、經

濟上の發達と共に旅客貨物運送は益頻繁となり、必要に應して道路を築造した。殊にマッカダムの道路築造法の發明と共に、路面の構成は一段の發達を促がした。併し、倫敦の住居分散を進め其膨張を促がした原因は、道路の發達にあらずして、十九世紀に發明された鐵道である。鐵道が始めて布設せられたのは、リバプール、マンチエスター間であつて、其目的は貨物輸送にあつたが、開業後の實況によりて旅客運送による利益が巨額に上ること明白となり、各地に鐵道布設熱の起ると共に、倫敦と他の都市を聯絡する計畫として、一八三二年倫敦バーミンガム鐵道、次でブリストル、サウザムプトン等との聯絡を圖る鐵道の計畫があり、大陸諸國に於て未だ一線も鐵道布設を見ない間に、一八四〇年頃迄に倫敦と各方面の都市との間に鐵道の開業を見ることとなり、一八四五年鐵道熱の最旺盛なりし時代に於て、倫敦附近に於ける鐵道計畫は十九線を數へるに至つた。

斯の如く、英國に於ては最進歩せる交通機關を採用して、產業の發達を資けたるのみならず、倫敦に於ける聯絡狀態は巴里市と相違し、各地方より市内に聯絡する幹線に對し、深く市内の樞要部に終端驛を設けしめ、「シチー」に接近するロンドン橋、リバプール街又はセント、パンクラス驛、ユーストン驛パッデングトン驛、チャーリング、クロス驛、ウイクトリア驛等の位置を見れば、巴里の幹線鐵道が市の周圍部に終點を有するものと相違せること明白にして、電氣鐵道の發達以前に於て、市の中央部と其周圍部並に郊外住居地との交通機關として、蒸氣鐵道を盛に利用せるは、歐洲大陸諸國に於て全く其類例を見る能はざる所である。

又倫敦に於ては、純然たる市内交通機關として鐵道を利用し、一八五三年既に「メトロポリタン」鐵道の計畫起り、市の最も繁華なる部分を一周すべき地下鐵道を布設し、各幹線鐵道の終端驛を聯絡するの方法を採りたるを以て、市内の商業地域と周圍の住居地域とは、最も迅速なる往復をなすことを得て、住居の分散、土地騰貴の抑制の目的を達することを得た。爾後倫敦に於ける鐵道の發達に就ては、一々

茲に述ぶる煩を避けるが、上述の環狀鐵道の外に、更に「チューブ」鐵道を以て圓周の直徑となるべき線路を東西並に南北の方向に聯絡して、現今の倫敦市内高速鐵道網を形作り、尙市外幹線鐵道とも聯絡を益々密接にして居る。

されば、巴里が十九世紀後半頻りに廣き街路特に直線街路を築造して、市の美觀を增すことに努めた當時に於て、倫敦は最新の交通機關たる鐵道を利用して住居分散、市民福祉の增進を圖つた。一九〇五年 Royal Commission on London Traffic は一八八五—一九〇五年の二十年間に倫敦附近の鐵道及軌道會社の放資總額は一億磅に達したと計算して居る。此額は恰も「ヲースマン」の巴里改造の爲に支出した二十五億法と同額である。此孰れが都市建設として有利なりやは讀者の判斷に任せる。

倫敦に於ては鐵道、軌道の敷設と共に、街路の改良も全く怠つては居らぬ。一八五五—一八八九年間に倫敦工務局 Metropolitan Board of Woak（法律に依り現今の倫敦府に屬する地域の工務を統一したる團體）が工事費として支出した金額約一千萬磅我が一億圓に上つて居る。又工務局廢止せられ、其事務を引繼ぎたる倫敦府（カウンテーカウンシル）は一八八九—一九〇九年迄に約一千二十六萬磅我が一億二百六十萬圓を支出し居る。但し其内四百九十八萬磅は收用土地の賣却に依つて回收した。上述の費用を投じた主たる工事は Victoria Embankment（一八六二年）一、一五六、九八一磅、Chelsea Embankmeat 二七〇、〇〇〇磅、Albert Embankment（一八六九年竣工）一、〇一四、五二五磅、Holborn Viadukt, Queen Victoria Street の新設 Tollenham Court の擴築、Shastesbury Avenue に依り、Piccadilly Circus と Bloomsbury St. を聯絡する工事（總額一、一〇〇、〇〇〇磅、純支出七五九、〇〇〇磅）である。此の Shatesbury Avenue の幅員は六十呎 Strand の擴築も八十呎に過ぎずして、巴里の街路より遙に狹いものである。倫敦の工事に就ては見榮を飾る考がない。其他多年の問題で最近漸やく解決せられた Kings way の開設は、總額五百磅を費したが其内四、一五〇、〇〇〇磅を殘地賣却を以て回收した。

上の如く倫敦は全く街路の築造、擴築を等閑に附した譯ではないが、之を巴里の改造計畫に比すると非常に經濟的の方法を採り、全く外觀論を棄てゝ實用を主として、街路よりも鐵道軌道を都市膨脹の爲に必要なる交通機關とした傾向を認め得る。要之、十九世紀に於ける倫敦の改造は、統一的計畫の下に行はれたるものでなくして、著しく大陸諸國と趣きを異にする。勿論改造に就て全く計畫なかつた譯ではなくて統一を欠いて居つたに過ぎぬ。此傾向は英國と歐洲大陸諸國の經濟政策の凡てに關して見る所であつて、鐵道政策に於ても、英國の鐵道系統が企業者の自由に撰擇せられて、甚だしき不統一に陷つたことは、英國の鐵道政策上の一大失敗である。併し、此欠點あるが爲に、全體から見て英國の鐵道輸送の現狀が、歐洲大陸諸國よりも劣つて居ると論斷するものがあれば、餘りに早計な近眼者である。都市の建設に於ても全く同樣である。大陸諸國殊に佛國に於ては中央集權制がマーカンタイル主義以來著しく發達した爲に、都市の建設に就ても、政府の強き意志が計畫の根蒂をなして居る。そこで、都市計畫に於ても計畫が定まると共に、之に法律上の力を附與して、之を確定のものとし、統一的計畫が成立するのである。大陸諸國に於ては斯の如く法律上の承認を得れば、所謂統一的計畫が完成したるものと考へるのである。併し、英國では計畫がないのでなくて、形式上此計畫に法的強制力を附することを喜ばない。從つて、大陸諸國の如く專制政府が此計畫を財政上の目的又は有力なる市民の私利の目的に濫用するが如き弊害は英國に起らなかつた。且つ、英國の議會に於て屢々交通の改善都市の改造に關する委員會を設けたことがあるが、是等委員會は人口分散の主義を定めて、都市集中の弊を除くべき大綱を定めて、其細目の實行には餘り干渉せなかつた。そこで、必要に迫つて街路の擴築、新設、其他都市の改造をなすに當つては、此既に定つた輿論の大方針の下に、最も經濟的に分散主義を實行した。其結果は巴里市の美術家委員會又は那翁三世が細目迄決定した計畫に依つて、鐵道利用を忘れて街路の改善のみに沒頭した場合よりも、遙に市民の福祉を增進すべき改良が倫敦に行はれた所以である。

以上の都市集中の弊を防ぐ爲に、自由主義を採つた英國の都市の住居狀態は、干渉主義を以て都市改善を企てた佛蘭西よりも、遙に健全なるものであつた。世界最大の人口を包容する倫敦の家屋が、巴里伯林に比して衛生上の要求に適して居り、高層建築の遙に少き所以は英國の數世紀以來の政策の賜である。されば統一的計畫を欠いた英國の都市の建設は、必ずしも佛國に劣つて居るとは斷言し得ぬ。

三　倫敦に於ける住居狀態の特色

思ふに、住居難は二つの原因から生ずる。第一は一般の社會的欠點であつて貨銀の不當に低廉なること、敎育程度の低きこと、失業、疾病等の不慮の災難から住居の不良を惹起する場合である。第二は都市計畫の不備、交通機關の不完全其他の都市制度の欠陷の爲に生ずる取締の不充分等に依るものであつて都市計畫問題として取扱ふべきものは、第二に關する丈のものである。英國に於ては交通機關の發達に依つて住居分散を容易ならしめ、地價は低廉にして、統一的計畫の欠乏、都市高權の不備に拘らず、大陸諸國の如き住宅難を生ぜなかつた。此英佛の相違は左の數字で明白である。

		倫敦	巴里
面積	中央部	一二六、九平方哩	三〇、五平方哩
	周園部	五七五、九平方哩	一五四、三平方哩
	總計	六九二、八平方哩	一八四、八平方哩
人口（一九〇六年）	中央部	四、七二一、二六人	二、七六三、三九三人
	周園部	二、三九二、三四四人	一、〇八五、二三五人
	總計	七、一一三　五六〇人	三、八一八、六一八人
一エーカー人口	中央部	六三人	一四三人
	周園部	六、五人	一一人
	總計	一六人	三二、五人

以上の數字は全體の平均數であるから、兩市の住居狀態に關する觀念を得るには、特に密集地域を採りて比較することを必要とする。即ち、London Traffic Report は倫敦府を七區に分ち、一一七四〇エーカーを有する其中央區は、一九〇八年一エーカー一〇九、六七人にして、一九〇一年の一一一、一二人より減少して居り、巴里全市の一九一一年平均一「ヘクタール」三六四人より少き狀態である。今尙少しく詳しく說明すれば、巴里は一九一一年人口二、八四七、〇〇〇人であつて、二十區(アロンヂスマン)に分たれ、倫敦府は一九〇八年人口四、七九五、〇〇〇人で、二十九區(ボーロー)に分たれて居る。倫敦の各區中、巴里の人口平均密度(一「ヘクタール」三六四人)より密度多き區を擧ぐれば、五區であつて、四九〇四エーカー八六四、〇〇〇人を有す。故に此五區の密度は一ヘクタール四二二人となる。反之、巴里に於ては其平均密度より多き區が十一ある(一區—六區、九區—十一區、十七及十八區)此の十一區の面積は全市の四割、二八四三ヘクタール、全人口の七割五分、一、五一五、〇〇〇人、一ヘクタール五三三人である。故に巴里市の人口の七割五分は倫敦の何れの部分よりも密集して住居して居る譯である。勿論住居狀態を判斷するに、住居密度のみを以てすることは不十分な方法であるが、之を以て其一班を推知し得る。

又住居問題と關聯して、人口增加の狀況を一言すれば、倫敦は世界の最大都會たると同時に、尤も健康な都會であることを誇り得る。有名なる佛蘭西の統計學者のルヴアスユノルは、倫敦が世界の二十四の大都市中クリスチヤナを除き、其增加の人口五割以上を、出生死亡の差から生ずる唯一の都市である一八六五—七四年間に各市の增加人口中ブタペスト五分、ミユンヘン六分、伯林一割六分、巴里一割七分、漢堡三割、維也納三割五分が自然增加であつて、其餘は移住の爲の增加である。獨り倫敦で八割の自然增加を示して居ることは羨むべき現象である。

英國都市の住居狀態は決して改善の餘地がないとは云へない。倫敦市內の貧民窟の如きは、其除去に

絶大の努力と巨額の費用を要する。併し、此貧民窟も大陸諸國の如き高層建築でないから、其取毀の費用も少い。從つて、其困難も巴里伯林等よりも少い。若し英國の住居狀態に關する唯一の非難を擧ぐれば、大都市の周圍の廣がつて居る小住宅は、餘りに實用的で餘りに單調なことである。併し、此單調な數哩に亘る住宅區域はホワードの田園都市、アンウインの田園郊外と相距ること一步である。此一步を遂行することは、正に都市計畫家のなすべき任務である。美術家建築家の責任である。建築家美術家は其努力の結果たる大厦高樓の美を誇る許りでなく、文化生活の爲に民衆の福祉の爲に一段の努力をなすべきである。英國の田園都市の如き此方面に於ける建築家の努力の賜である。併し、斯の如き建築家の努力を要求するに當つては、其前提條件たるべき交通機關の發達と、安價なる土地を具備した都市を建設せねばならぬ。都市計畫は美術家、建築家をして自由に其の手腕を揮はしむべく、交通機關を完成するを要する。



文化生活と田園都市

日本建築協會理事　工學士　橫濱勉



生活改善の運動は、現世紀の文化運動の一として、最も特筆すべき事項たるや疑はない。衣にまれ、食將た住にまれ、苟も吾々の生活の上に欲くべからざる要件は、向上的に、而も合理的に進化すべきことは當然の傾向と云はねばならぬ。

衣、食の問題は暫らく措いて、今茲に住に就て考へて見たいと思ふ。

住宅改造問題は歐洲大戰以來、全世界の文化運動として否定し難い大勢である。

飜つて我國の住宅の現狀を鑑みるに、樣式の上に於ては、舊習墨守、西洋直寫、將た又和洋折衷や調和を主張するものもある。數の上に於ては、住宅飢饉、到る處『家無し』の嘆聲を聞く。即ちその不足に對する緩和策は焦眉の急として相當に我れも人も注意もし、研究もしてゐるのである。

而して予は、こゝに予の最も重大視する處の、而も住居といふ立前から、決して取去ることの出來ない根本問題として、その建設地域の選定、即ち住宅地の設定に就て、適當なる考慮を主張するものである。敬友葛野壯一郎君は曾つて本誌に論じて云つてゐる。

住宅改善の要諦は、土地其ものゝ整備から出發しなければならぬ。交通の便利であり、道路の整備であり、上水下水の完備であり、瓦斯電燈電話其他家庭用動力の安價な供給であり、何れにしても便

利で愉快で、衞生的で而も經濟的な凡ての裝置が、自由に且つ最も完全に得らるゝ事から出發しなければ嘘だ。家は從で寧ろ土地が主だ。市内市外を論せず、住宅地其ものゝ整備がない限りは、完全な改良住宅は到底求められない。樣式や部分的構造如何の如きは素より末技に屬す可きもので、完全な家は必ず文明的に處理されたる完全な土地にあつて初めて實現さる可きもので無ければならぬ。

以上の所述は予の所信と最も共鳴する處である。

住宅政策として、住宅地の選定と整備とを基礎として立たぬ經營は、現代の文化運動から稽へて策の採らざる處のものである。

住宅地の選定と設備は、都市といはず、田園といはず、必要な條件である。而して住宅地の選定と設備とは、箇々の住宅そのものに就いて考ふるに止まらずして、住宅の集團、即ち住居街又は住宅部落の經營に於ては、殊更缺くべからざる要件である。

都市計畫地域制に於て、住宅地域を設定する所以のものは實にこの主旨に外ならぬのである。

則ち住宅地域制に於て適當に住宅を保護する所以は、住民の保健と安慰とを達成せしむる、文化的社會政策に起因するものである。

予は更らに、現代文化生活として、田園都市の達成を疑ひ、且つ推賞するものである。

予の敬慕する西村伊作君は其著『田園小住家』の自序に於て云ふ。

田園都市と云ふよりも、ガーデンシチーといふ方が其の意味を明らかにしますが、そのガーデンシチーは自然と親しむ文明人の生活といふことゝ、健康と便利と親しみある社交とを、民衆的に享樂し得るやうに、文化的、人道的の考から起つたものと見てよいと思ひます。

家と家とが密接して居らず、一つの家庭が一つの獨立した家屋を有ち、十分の光線と空氣とを受入れ、周圍に樹木ある美しい庭園を有し、隣家と平和な交際をたもち、簡素な生活をするといふ村

落の有する自然の惠みを十分に得られ、而も水道とか瓦斯、電氣、または日用品の便利な供給などに於て都市に讓らぬ幸福を得られる、さう云ふ理想に依つて田園都市なるものが作らる可き者と思ひます。

以上聰明なる所說に就いて、予は全然同感するものであり且つ又讃美する處である。

都市生活の改善の意義に於て住宅改造問題は重大なる主命を帶びるものであり、又帶びねばならぬ性質のものである。

吾人は既成住宅に對する改良の手段に就いても最も熱烈に努力せねばならぬと同時に、更に新意義なる現代的住宅政策として、田園都市の進展に關して、層一層の考慮と努力とを拂はねばならぬのである。繰り返して云ふが、田園都市は吾々都民を文化的有意義の生活に誘導する新經路である。

西村氏は更らに云ふ、

新しき生活に入るためには、我々人類の正しく進む可き道を悟り、信じて、勇氣を有つて新しき世界を作ることを斷行せねばなりません。我々の幸福を求めることに何の遠慮も要りません。

多くの人は新しい愉快な生活を實行しやうと思ふが、家に老人があるとか、家内が反對するとか新舊の思想が衝突するとか云つて新生活に憧れる計りで、實際斷行し得ぬやうです。熱心な人、信ずることを通す人、勇氣ある人、決斷のある人が成功します。

生活を樂しくするならば、自然に心が美しくなり、德が高く、禮を重するやうになるでせう。世界が美さに輝くでせう。身體が益々健康になるでせう。家庭は益々榮るでせう。

と。もはや多くは云はない、この雄辯に於て盡されてゐる。

予は終りに、田園都市の企劃と、その達成とを促して、茲にこの稿を鎖ぢる。（了）

美的對象としての建築

——ショペンハウエルの建築美に關する論文——

建築枩會　伊藤正文

■前の問題—建築を美と見ることについて——
■ショペンハウエルの建築美に關する論文より——
■後の問題——

■建築を美と見ることについて

私は建築を美として觀照する立場から出發してショペンハウエルの形而上論の中から建築の美に關する論文を抽出して述べたいと思ひます。

建築を美として見る、その「美として」と云ふのは「美的價値を認めて』、云ひ代ふれば「美的態度」に於て見ればと云ふつもりである。即ち美的態度に於て建築と云ふものゝ中に美を發見し、尙深く、建築が眞に美的價値を有する爲には、如何なる形態に於てあることが必然であるかと云ふ事が、云はうとする問題である。

そこで美とは我等が感覺する物象の性質の一つであり、且つ美的評價の價値がその中に與へられてゐる場合に、そのものを主觀的に評價することである。

而して美的價値は美の本質であり、美的價値は對象が內面的に快感を與へる場合にのみ認められる。快感は感情であるから、心理學的な云ひ方をすれば點に於て作用された感覺が線的に流れる活動の意識

即ち感情の進行となる。

從て建築を對象として美を感ずる場合に於ても、視覺が美的感情の活動の中にとけ入る。

しかし此美的觀照の態度は即ち所謂美的態度に於て成立すると云へよう。

美的態度は對象の中に人格的生命を附與する態度である。即ち建築が對象であれば、建築を人格化して見ることである、或は生命を見出すことだ。そうして對象が生きて感せられる即ち有情化される。つまる所感情移入を行ふてはじめて美を眞に體驗することが出來る。

「美的價値は感情移入價値である——(阿部氏倫理學の根本問題)」感情移入とは對象の中に深く沈潛することである。自己を捨てて對象の中に生きることだ。實感をしりぞけて、三昧の境に入ること、それが純觀照の態度であらう。此態度には直觀によつてのみ入り得る。

「ブローデル、クリスチャン、ゼンもグーテの云つた色の感管的道德的結果の爲に基き、色の印象は所謂感覺に於て盡きるものではない、各々の色はそれぞれ特殊の情操を起す、この二次的印象は自己を唯一つの色に沒して見た時に最も强いのである。——(西田博士)」己を唯一の色に沒することは「特殊の情操」が美的情操であればそれは感情移入の意味を持つであらう。

之は只別の論文を借用しただけのものであるが兎に角對象の中に沈潛する態度、對象に對する沒入的な態度によつて初めて、その對象の價値を握み得る。

建築の美に於ても建築の利用價値を見ずに、只建築が我等の視覺に訴える形態の中に、人格的の活動を直觀しなければならない。即ち建築の形態の中に「雄大」「崇高」「優美」「氣輕さ」等の感情の內容がしみ込んでゆき、そして自己がふりかへつた時に自己の內面に快感を感ずる。

建築の構造法間合りの工合等から考へる時は利用の目的の方向に建築を見てゐるのであるからそこに美は成立しない。

又建築物の使用目的の概念から、例へば銀行らしい、住宅らしい、工場らしい、役所らしい等と云ふらしいと云ふこと即ち表現を以て美的評價の對象としようとすることは直には受入れられないことで、建築美を云ふ上からは第二義的又は第三義的の問題として後に殘さる可きものであらう。依て之は後の問題の項に於て云ひ度い。

だからもつと直接に云ふならば建築の形態そのものゝ中に現れる合理的な力の調和の美を體驗することが第一義的であらう。(ショペンハウエルの見方による)

其他の見方についての問題は本文及後の問題に讓ることゝする。

建築に於ても、それを美と見る態度には純粹な受入れ方を以つてすることを根本とする。

ついでに藝術と云ふことゝ、建築との關係を云ひたい。客觀した藝術は藝術品である、藝術品を對象とする我等の態度によつて、その藝術品は色々の意味を附與される。だから藝術は美であることの爲に是非とも我等の主觀的態度に制限を要求する。而して藝術は美的評價の對象となり得るものの中最大の美的價値の內容を含んでゐる。

その意味に於て我等の主觀の制限を要求することから、藝術として建築を見ることは出來るけれども、建築は藝術であると云ふことは直には云へなくはあるまいか。

次に本論に入る前にショペンハウエルの建築美に關する論文に於ては所謂楣式建築と拱式建築について云つてあるが、鑄式建築には及んで居ない、即、鑄式建築と云へば彼以後に出來た鐵筋コンクリート構造の建築であるから當時に於ては考へられなかつたことである、と云ふことを附言して置く。であるから鐵筋コンクリート式である最近の建築についての考を、「後の問題」の中に加へて言ひたい。尙「前の問題」は「前の問題」だけの事であり「本論」は「本論」であるとして置きたい。從て又「後の問題」として云はうとすることは、「前の問題」及び本論に云ふことに直接の關係の有無は問題としない。

そうして本論であるショペンハウエルの論文は出來るだけそのまゝコッピーするつもりで、主として姉崎博士の譯文から抄出することゝする。

そしてショペンハウエルの哲學は主意主義即ち意志（大なる意味に於て）を以て一切の宇宙的發展の原理としてゐる。盲目的衝動である可き意志を物理的存在の本質と考へてゐる。そして宇宙を意志の色々の形の現れる爭闘場であると見た。

一面に「美」を此意志の戰を超越する、所謂プラトーンの觀念を認識する一つの見方に到達してゐる。そしてその意志の客觀性を現識であるとした。

そこで意志の客觀性の低い程度にある觀念の或るものを明白に直觀に見せるのが建築美術の目的である、と云つてゐる。

此邊で『前の問題』を止めて本論に入ることゝする。（つゞく）

古家のひづみ直しぬ兎角して。
木枯も人の付けたる名なりけり。

西洋住宅と日本住宅

——私の實驗しつゝある上から——

山川逸郎

氏は本誌前號にて紹介せる「キャラバシ園」の設計者にして、建設及經營者である。前號にも紹介せる通り、氏は、建築專門家にあらずして、斯る大作を爲したのであるが、其住宅改善觀を聽くに、頗る出色の見地を有しておられる。仍つて、其要旨を採錄して、斯の一編を成した、其文責は勿論記者の負ふ處である——（一記者）

曰く、生活の改造、曰く、住宅の改善、曰く、何と、近時頻りに、我等日本人の生活問題を議せられつゝある中、所謂住宅問題は、其最も顯著にして而も重要なる問題の一つである。蓋し、現在、不便にして不經濟、非活動的にして、骨董的なる、我等日本人居住の古典的な生活は、勿論、今日の文化生活に適せず、就中、其住宅の如きは、非文化的生活を徹底するものにして、我等日本人は、一日も早く斯る現狀より脫却して、能率多き文化生活を營むことは、自他共、眞劍に考慮すべき問題である。

惟ふに、我國が世界文明國の班に伍して以來、既に五十餘年の歲月を經たる裡に於て、我國の諸制度及各般の文物は、寔に急激にして迅速なる發達を遂げ、少くとも、世界の驚異たることは、世の容す處であるが、斯の裡に在りて、獨り我等日本人の住宅のみは、少くとも、幾十年の後に取り遺されたるの觀ありて、其環界凡ゆるものゝ進展に比し、其進歩の度著しく遲延せるは、恐らく、何人と雖も容易に肯定する處であらう。

而して、斯る住宅問題に關しては、具眼者の夙に唱導せる處であつて、それ等先輩者に藉り研究と指導を受けつゝあるの現狀であるが、今は、最早、我等の住宅を奈何にすべきか、との實施問題に轉向し

來れるものであつて、抽象的な改善問題は、既に業に其時期を去つたのである。然るが故に、斯る眞劍な問題に展開し來れる現在に於ては、最早、研究とか、思案とか云ふ如き、抽象的問題より脫し、努めて、世の進運に取り遺されず、文化的機運に伴ふ處の生活を營爲することは、文明國人として、寧ろ、吾人等の義務であらねばならぬ。而して、斯くの如き生活の改造は、實に、我等生活の本據たり鑄造所たる住宅其ものより始めねばならぬ。されば、苟も有形的斯問題に多少の興味を有する者は、自ら進むで、生活改造としての中核たるべき住宅改善問題の解決に、力を濺がれむことを希望する。

斯くて、生活の改造は、住家の改善に始まり、住家の改築は、其環境に於ける設備の奈何に由るものであつて、單に自己一人のみ理想的な新生活を營爲するとも、其環境が、例へば、非衞生或は生活に必須な物品の供給乏しく、乃至は、幾多文化的施設の缺げたる、其他、同一環境裡に生活を寄せに人達の生活が全然我等と駈け離れたる、凡て斯くの如きは、眞に生活上の享樂を得難い。故に、吾人等住宅の改善は、他面に其環境の改善に俟たなければならぬ。されど、斯の理想は、今日の我住居生活の現狀として、到底急速なる實現を期し難い。故に有識にして有資者、而して住宅問題に考慮を有するの士は、所在に、理想的住宅群の境地を拓成し、以て、我國住宅改善の指導者たり先達たらむことを期せられたい。

不肖逸郎、亦其理想の一端に醒め、由來、日本式住宅に非常なる懷舊の情を有ち、住宅改善に多大なる興趣と、多少の自信を有せる結果、現に今、南海沿線、高師の濱に臨める或一地域に、歐米式を參酌せる理想的住宅群を建設し、水道、道路、下水、煖房、採光、花園、其他歐米都市の最も進歩せる田園都市を築きつゝありて、是を、地名に因みて、『キャラバシ』園と名付けた。斯園は、徹頭徹尾、吾等建築專門家にあらざる者の手に藉りて築成しつゝあるのだから、建築專門家殊に住宅改善に一雙眼を有する方は、親しく、私共の理想の流露を見て頂き度い。

仍で、私は、住宅改善問題に就き、彼樣に是を實際に現はして、其解決の一端に備はり度いと努力し

てゐるのであるが、然らば、之を奈何に改善すべきであらうか、といふ住宅の建設其ものゝ問題となる。私は、是に就いて、今姑く、本誌の幾頁を汚してみたい。抑も、家庭を經營して、日々是を管理して行くに就き、其家の構造や設備の便否は、其一家に於ける仕事の能率に、云ひ換ゆれば、有形生活其ものに、多大な影響を及ぼす。卽ち、其生活に餘裕が出來て、眞に生活を樂むようになるのも、年自年中秩序なき仕事に追はれて、只齷齪して、生活に何等の意義を見出し得ないのも、實は、居住其ものが餘程關係を有してゐる、と想ふ。而して、眞に生活其ものに意義を見出し、生活を享樂して、ヨリ能率の多い生活を營むが爲に必要とする處の、所謂新時代に於ける住居は、之を一つの標語的に云はゞ『家庭としての種々なる條件をヨリ多く備はると同時に、最大に手數と費用を省く住居』とでもいふことが出來得る。斯の見地からすれば、疊と襖と障子と雨戸と、そして、下座生活を爲る處の、在來の日本家屋と、板床とドアーと、窓と、椅子と、テーブルに藉りて生活する處の西洋家屋とを比較して、其孰れが、果して、上述の要求を多く充足し得るか、といふことは、何人が考へても、其後者であることは、間違ひのない事であらうと信ずる。卽ち、西洋の住宅は、其外觀が頗る瀟洒で氣持が好い上に、五年や十年では、新しいものと同樣で、容易に古けない。內部は、凡ゆる點に於て、科學的にも、審美的にも、便利に氣持佳く仕組まれて、在來の日本家屋とは、全然氣分が異ふ。又、日本家屋のように塵の溜まる塲所が少しも無いから、日本のそれのように、每朝每夕掃除に餘計な勞費を掛けなくても可い、卽ち、常に清潔を保たれる。其構造に於ても、日本のそれと異り、頗る簡單にして堅牢であるから、大概な地震や風雨抔には、何等懸念を要せずして、住居の保安に一段な價値を有つてゐる。殊に、日本家屋と比較して、著しく異つてゐることは、日本家屋のように鼠族に同居したり、昆蟲類に生活を脅かされない點で、防鼠防蟲の設備が完全だから、冬季に於ける生活の脅威者たる處の、蚊や蚤や蠅抔に侵されることなくして、安易に快適に生活を營まれる。

而して、建築費に到りては、日本家屋に比し、割合に廉く出來上り、而も自分の好ましい物が出來、殊に、内部の附屬物、就中、疊だとか、襖だとか、障子だとかいふような物の度々破損して、少なからぬ修理費と手數とに比較したなれば、西洋家屋の、板床やドアー抔は永久的なものだから、是だけでも經濟上に多大な關係を有つてゐる。

又、保健上の關係から云ふも、西洋家屋は、換氣に於て頗る佳く、日光の射入も充分に受け得られ、日本家屋の如き疊の塵で室内の空氣が汚濁される氣遣ひなく、夏季に於ての難物たる蚤を發生する憂ひなく、蚊や蠅、其他の昆蟲の侵入は、「スクリーン」で完全に防ぎ得られ、其他、日本家屋の如くに餘りに開放的でないから、騒音に惱まされて安眠を妨げられることもなく、夜分寢室に新鮮な空氣を始終取り入れて、而も安全且つ適當にして、是を容易に爲し得ることは、西洋室に於てこそ初めて實現し得るのである。殊に、冬季は煖房裝置の理想的なることは、日本家屋の、火鉢と炭火によつて、個人的な煖を採るの比較ではない。

日本式な住家であれば、朝起ると、先づゴト々々ガタ々々と戸を明けて、ドタン、バタンと寢具抔を取り片付け、バタ々々、サッサッと室内の掃除を了へ、それから漸く一日の仕事に取り懸る。そして、夕方になると、前のような事を其儘又は逆に繰り返す。然るに、西洋風な板床や窓に成し、又ベッドを使用することにすれば、朝夕の一等忙しいときに、それだけの手數を省けるのだから、一家の仕事が餘程能率的にも成り、餘裕が出來て樂に成る。殊に、朝から晩まで、立つたり座つたりしては、仕事が思ふように捗らない許りでなく、一度座つたが最後、何か仕事を始めると、つい、立ち上るのが餘程面倒臭くなつて、『立てる者は親でも使へ』抔といふ風に、他人をも使ひ度くなつて、それだけ能率が上らない。斯の點になると、西洋式に、椅子やテーブルに藉る居住生活は、動作が餘程に敏捷に成り、氣持よく立ち働けるから、隨つて仕事が捗つて行く。元來、西洋室は、日本室程極端な亂雜にならぬように、

其自然の構造が仕向けられてゐるから、斯の點だけでも、居住生活の凡ゆる方面に影響する。例へば、日本のように疊敷の室ならば、少し心を許さむか、讀みかけの新聞も、脱ぎ捨ての着物も、玩具も、食器もといふ風に、忽ち、足の踏み入れ場もない程に散亂することは、日本人の等しく日常接觸してゐる處の事實である。然るに、西洋室であれば、可成り放埒に爲ても、新聞や雜誌抔を床上に投げ出す樣な事は、其構造の關係上出來得ない。必ず、机の上とか、「カウチ」の上とか云ふ風に部分的に成り、またしても、散亂された跡を、氣を採むで取り片付けねばならぬ無駄な時間が省ける。殊に、日々の掃除にした處で、塵拂ひに、箒に、雜巾掛けに、却々の仕事であると同時に、却つて塵を飛散させ、衣服や調度を毀損し又は汚穢ならしむる。けれども、是を、西洋室のように、「マッブ」と掃除器を使ふて、手拭一つ被らずに雜作なく掃除の出來得るのとは、其時間と勞力に於て孰れが勝つてゐるか、說明するまでもない事である。要するに、西洋家屋に住むでみると、日本家屋のような無駄と、だらしない事から脫れて、凡てが規則正しく、秩序よく運むで、生活に餘裕を生ずる。そして、其處に、私共生活其ものに意義を見出す事が出來るのである。敢て、住宅改善問題に興味を有する諸君の一考を煩はす。

京都の戸口を調査す

享保十七年の調査に依れば、京都市中の戸口は戸數十二萬八百七十五戸にして、人口は五十二萬六千二百十九人（男二七七、九六二人、女二四八、二五七人）なりしと。

統一原理と「建築」批評

「建築と社會」編輯擔任　江村郊邨

○建築を科學だといふ、眞實く其通り。そして、建築を一つの藝術だとも、又、美の觀象だとも云ふ、是も其通り。其他、曰く、何、と。私共は、建築其ものを抽象し、分析し、推理し、其處に種々象を攝取認識する。

○それは、恰當、私共お互に眺め合ふように、凸助でも、凹兵衛でも、乃至は、三角氏でも、四角君でも、自己の認識其ものが、必ずしも權威ではないから、其處は、何人となりとも、勝手に自由に、熱を吹くがよろしい。そして、我等お互樣の熱は、皆な眞理で、而も、皆な間違つてゐる場合もあり得る。

○それよりも、わたくしは、建築を批評することが、怎ういふ統一原理より初一歩を踏み出したのか、斯の事をお訊き致し度い。

○元來、わたくし共人間は、猿よりも毛が三本程多い、と謂はれた程の、やッと、動物的な本能から、獻智——然り此の地上に於ける凡ゆるものゝ中で一等勝れた獻智といふ一段高い處へ進化した許りで、斯の危ぶな氣な「自我」といふものは、其處に、何ものかによつて、自我の統一を、即ち、自己に對する統一原理といふものを有たない限り、忽ち、自我の分裂を來たし、自分といふものは個々の自分となつて、之を個別に觀れば、孰れがほんとうな自分か、之を全格的に觀れば、實は、全き自我なるものがないことゝなる。

○斯くて、獻智に進み來つた自我は、只、本能にのみ生くる其昔に逆戻りする。そして、斯る統一原理

の無い處から出て來る處の、對建築批評は、「さるが故に爾かなり」でなくして、「爾か思ふが故に爾かなり」といふ自我統一なき批評に過ぎない。即ち、理想的思惟でなくして、單なる感覺的思惟たる處の本能的な批評であつて、獻智的なそれではない。

○さらば、私共の建築批評は、奈何なる統一原理に立つべきであらうか。建築を「美意識」の對象としてのみ觀て、美感覺に自我統一原理を看出し、是より發程する批評其ものは、勿論、間違もない眞理である。けれども、亦同時に、錯誤であつて、所謂群盲が象を批評するのと同じ軒下である。

○さりとて、單なる建築技術のみに出發する批評は、技術其ものとしては、素より妥當なことであらう。けれども、一箇躰を成す處の建築物其ものとしては、建築技術自體のみが、其凡てゝはない。

○所詮、建築は、其構成された場合に於て、一箇の有機體的存在を有つてゐる處のわたくし共に似てゐる。わたくし共有機體は、種々な動的又は靜的方面を有つてゐるがように、建築を技術的に觀れば、綜合技術であり、藝術的に觀れば、綜合藝術である。そして、わたくし共の實生活其ものから觀れば、生活の一部面、而も、表現生活としての一部面である。

○彼樣に、建築には、種々相と、幾多な部面がある。建築批評が、若も、建築を「美」の對象とし、構造技術の觀照とし、乃至は、生活功利の比較として、其處に出發點を求めたならば、勿論、完き對建築批判ではない。許りでなく、實は、構成されたる「建築」要素其ものに對する批判で、即ち材料其ものの批判であつて、「建築」自體の批評ではない。

○何故ならば、わたくし共を徴象する「體形」其ものは、表現したわたくし自體である。手や足や其他の凡ゆる機官を綜合したものが、決して、わたくし自身ではない。わたくしの凡ゆる機官は、わたくしを徴象してゐるが、さりとて、わたくしは、それらの綜合したもの〻上に、抽象されて存在してゐる。

○そのように、構成されたる建築其ものは、凡ゆる材料と要素とによりて成つてはゐるが、決して、そ

れ等のもの、總計ではなく、何處までも、一建築として抽象されたる實體である。さるが故に、對建築批評は、決して、必ずしも建築を美の對象とするでもなければ、さりとて、單に技術のそれでもない。何處迄も、其抽象された「實體」に對する處の批判であらねばならぬ。

○然らば、美學からも、構造科學からも、乃至は、實用方面からも、其他凡ゆる觀點から、多岐に亘つて、凡ゆる批判を爲し得たとて、それは、依然對部分の批判であつて、其批判と批判との間には、皆個別的な線が劃されてゐる筈である。さるが故に、抽象された其建築自體に對する批評とはならない。

○されば、眞實、批評の範疇を、抽象されたる建築其ものに定めて、部分の總計的批判でなく、左りとて綜合した批判でもなく、抽象されたる「建築」其ものに突き入つての批判は、自我の有てる統一原理から出發せなければ、出來得ようがない。そして、所謂統一原理とは、其云葉の上からすれば、種々に見樣がある。科學も統一原理となれば、自己流の考察も統一原理となり得る。けれども、自我を統一する種々な統一主體ある中に、最高にして全般的な統一主體は、之を抽象的に云はゞ、形而上的思惟其もの、之を具體的に云はゞ、哲學其ものである。

○自我を形而上學的若くは哲學的に統一することは、自我の至上統一であつて、それ等の統一原理は最高統一原理である。斯の原理に自我を鑄形し、錬成して、それより出發する批判こそ、至高な批判であり、全豹的な批判であり、そして、生命ある批判である。對建築批評も、亦斯る見地より出發せなければならぬ。

○何んとしても、形成されたる建築其ものは、素より建築材料の集合でも、建築技術の總計でもなく、實に、わたくし共自身は肉と皮膚と諸機官の集合によつてわたくし自身があるのでなく、ほんとうの自我は、抽象された「わたくし」であり、感ずべくして見るべからざる「わたくし」である如く、建築も亦それであつて、目に見へるものでなく、感ずべきものである。そして、それが、亦、我等の自我を建

築に表現し、更らに批判其ものに再現する一つの「創造」である。

○エドワード・カアペンターは、「創造」を說いて曰く、

『――創造は、無から急激に事物の形と堅さを賦與できる全能の命令ではない――若しも幷うだとすれば、それは吾々の經驗できぬ吾々に不可解な過程である。又他方で、吾々は、それを物質的原子の偶然的聯合とは認められぬ。こんな原子若しくは原子の存在の經驗を吾々は曾て有たぬからである。且つ創造のそんな無感覺な事物の聯合であるならば、創造自身も無感覺であり、單なる囈言に過ぎぬであらう。(が、確かに創造は囈言ではない。)予の見解によれば、それは隨時に吾等自身の心と身體に於て認められる過程であり、不斷に感情と慾望から形相を造化しつゝあるのだ。そして、漸次に鮮明さを收得して、透明不可見のものより具象的にして觸るべきものに進轉する。この過程を吾等は吾等自身の內に於て觀察できると予は斷言する。即ち「情緒」から「思惟」への轉移、これら思惟より再び「動作」及び「外部世界」への轉移に於て。それは人間の凡ゆる「藝術」の根基である。――「藝術家」「音樂家」のみでなく事物を製作する職工は皆同樣の事をする。「人間」の世界はこの過程によつて創造される。――』と。

○即ち「創造」は生けるものである。無機物なる「材料」の集合、連結、交錯、其ものでもなければ、それ等によつて形成された或ものでもない。象徵的には、何かの形態と成るであらうが、決して、それではない。「建築」も「創造」である、隨つて、其「建築」なる形態以上の抽象された實在であつて消極的に、生きてゐるものである。

○それは、カアペンター氏の右に所謂『不斷に感情と慾望から形相を造化』するのであつて、『「情緒」から「思惟」への轉移、それら思惟より再び「動作」及び「外部世界」への轉移に於て』わたくし共の思想と感情、即ち生命、それが建築と成るのである。要するに、わたくし共の生命は、「建築」なる「生

命」を創造するのである。

○されば、對建築批評は、見るべきもの、批判ではない。無機物の集合を科學的に理想化したものに對する批判でもない。即ち、何處までも、「建築」てふ生命則見へざるもの感ずべきもの、而も實在に對する批判であらねばならぬ。

○生ける人間を評することは、骨骼皮膚機官の集合其ものを評するのでなくして「人格」を批判するのである。そして、「人格」とは見へざる實體で、思惟し感得すべきものである、と同樣である。

○されば、建築批判の主格たる「我」は、有形科學なる建築技術や、構造學上に自我の統一原理を求めて、是より出發するのでは、人間の骨骼や機官を評して、「人格」を批判すると考へてゐるのと同樣な錯誤ではあるまいか。わたくし共、ほんとうに建築批評家たらむ者は、先づ、自我の統一原理を、形而上に求めなくてはなるまい。

酒を農民に沽るを禁ず

寛永十九年五月二十六日大猷院殿御實記に曰く（コトシより鄕邑にて酒醸すべからず、されど、街道の市廛にて酒賣る事さるれば、往來のものばかり賣り與ふべし。



筋コンクリート其の日その日（一）

會員　工學士　增田清



新年號に何か研究物へ書けといはれたのですが馴れぬ悲しさ、何を書いて宜いやら手も足も出ぬ始末、考へて居る中に期限はどん〳〵遠慮なく迫る、止むを得ず毎日、ぶつかる問題を何れといふことなく、思ひ付くまゝに書いて見ます。何れ其中には多少纏つた事を申し上げたいと思ひますが、先づそれ迄はこんなことでお茶を濁すことゝしました、何卒あしからず。

一　鐵筋コンクリートの繼ぎ目に就て

毎日見る仕事の中で、迂濶にして居ると直ぐ間違ひの起るのは、打ち接ぎの箇所です。御存知の方は何だそんな事と一口に御言ひになるでせうがこんな簡單に見える事柄でも、一般の現場では充分に滿足に行はれては居ません。而して斯る不注意が時として重大な結果を惹起するものだといふ事は、多少多注意深い監督者が皆識つてる事です。けれども仕様書に打ち續ける箇所を明記する習慣

は未だ少ない様ですし、監督者の中にも無頓着な人々をも見受けますが如何にも遺憾千萬な事であります。

第一の間違ひはスラブを打ち繼いで行くのにスラブを受ける梁の眞上でやることであります。是は在來の木造を基として考へると此の處が最も安全の様に思はれるのでせうが、鐵筋コンクリート構造は各部即柱と梁と、梁とスラブとが各一體的（モノリシック）になるといふことがその特徴の一なのですし、殊にスラブと梁とは連絡して一つの丁字梁として計算もし構造もすることが多いのですから、此處で切ることは頗る考へものなのです。

第二の間違ひは徑間の四分の一前後の所で繼ぎ目を作ることです。是れは本によつては此の部分が最もよい部分である様に書いたのもあるさうですが、剪力を基として此の繼ぎ目の場所を考へますと、此の部分は剪力は零ではありません。殊に在來多く行はれた梁の試驗成績を見ましても鐵筋又はコンクリートが夫々張力又は壓力に抗し得た場合には梁の破壞は第三の原因即、斜張力に堪え得ないといふ事から起ります、而してその破壞は經間の約四分の一又はそれより支端に近い所に斜めに起る龜裂がその先觸をなすことを思ひ合せたならばかゝる剪力の多い部分で繼ぎ目を作るといふことが何れ程の危險を伴ふかも知れぬといふ事は直ぐに想像が付く事と思ひます。尙スラブの支點に近く集中荷重が頗る多い時などは更に危險なことも起るでせうし、多くの場合にやる様な斜めに打ち繼ぐことはその繼ぎの面がこの斜張力から起る可き龜裂の方向と一致する時には、一層の不安さを增す譯であります。しかしこんな繼ぎ目は在來も再々、目にした所であります。

然らば何處で繼ぐのが最も安全でせうか、私の考へでは徑間の中央又は中央に近く切るのが當然だと思ひます。この部分では第一剪力が多く零に近いから剪力を顧慮する必要がありません。第二曲能率を考へて見ても、曲能率の爲めに起る應力の中、張力はスラブの下部にある鐵筋が堪える勘定ですし、壓力は上のコンクリートがそのまゝに受けてくれます。又、中軸以下のコンクリートは

初めの計算に於て厚さとが鐵筋量とを定める時に既に張力には堪えぬものといふ假定がしてあるから更に繼目があつたとてそれを考へる必要はありません。只注意すべきは此の場合には此の繼目は必ず眞直でなければなりません。それは今申し上げた曲能率が起る應力の時上層のコンクリートは中軸の面に直角に壓力を受けるのですから斜めに切つたのではそこに互にずれる様な傾が起るからです。

今迄は主としてスラブについて考へたのですが梁についても同様なことを、更に、力を入れて云つてもよい譯です。

梁とスラブとを比較しますと、スラブでは多くの場合に特に剪力に堪える爲めにスターラップを用ひなければならぬ程、剪力が大きくなることは稀ですけれども梁では斜張力を計る標準になる處の剪力が單位面積について可許應剪力（普通一平方吋について四十封度）を超過する方が多いのですからスラブで注意する以上に梁では繼ぎ目の位置に注意をしなければなりません、このことは何れ、其中に數字を用ひて明らかに說明をしたいと思ひます。

柱にあつては繼ぎ目は構造上、自然に柱と床との接合點及び梁と柱との接合點、即梁下ばの點で多く起ります。只此の際注意すべきことは柱と梁との取合ひの點に持送りがある時です、此持ち送りは本來構造が一體となり易い様につけることもあり柱に起る曲能率からの應力が少くなる爲めに用ゐることもあり、又梁の端に近い部分の剪力が過大になるのを防ぐ爲めにも使はれますけれども何れの場合にも必ず持ち送りの下の部分で切るのが安全であります。而して柱を打つた後柱の中のコンクリートが凝固して幾分長さが縮んだ頃に上の床のコンクリートを打つ方が常に安全な結果を得る譯であります、持ち送りの上端即梁の下端でコンクリートを切ると多くの場合には此の部分に一寸した龜裂が起り勝ちであります。

又柱を中途で切る場合にはその上端を斜めにして置くことは柱の本來の役目が上の荷を受けるといふ事から考へても避けなければなりませんが充

分に搗き固めをして置けば、特にその表面を美しく均す必要はないものと思ひます。

基礎の場合には在來施工に關係する土工の中に妙な習慣があつて斜めに打ち繼ぐことがありますけれどもこれも上に述べた事柄から推して改めた方がよいと思ひます。亦連續梁になる樣に計算した梁形の基礎ならば無論梁として考へなければなりませんから斜めに切つたり柱の眞で切つたり四分の一に近い所で繼ぐ事は禁物であります。

コンクリートを打ち繼ぐと、その繼ぎ目の強さは繼ぎ目のない一時に續けて打つた部分に比して弱い事は正に事實であります。而してこれに就いては、曾て成績を發表されたのを讀んだ記臆があるのですが、今一寸その記錄が見當りませんから確かな數字を申し上げかねます。普通前回に打つたコンクリートに何の手當もせずに繼いで行つた時の強さは、繼がない部分の強さの半ばに達せず、また充分注意してその表面を掻き取り純モルタルをその繼目に打ち込み、其後にコンクリートを打ち始めた場合と雖も尙本來の強さの八割にしか達しなかつたと記臆して居ります。これも他日機會があり次第調べて精確な數字を申し上げたいと思ひます。

然らば繼ぎ目は如何にしたらばよろしいか。これには色々說もありますが先第一、一日又は一回分の行程の終りにはスラブ、梁共、眞直に板を當てゝコンクリートを切る事、尙出來得るならばこの載面に溝をつけて置ける樣にすること、次に打ち繼ぐ時には前の板を外してその面を充分掻き荒しその邊に流れかけたコンクリートの屑等を捨て去つて清淨にした後ちに純モルタル又は一、二位のモルタルを厚み少くとも四分位ぬりつけて續いてコンクリートを打つべきであります。尙場合に依つてはこの打ち繼ぎの場所を打ち終る時に長さ三尺許りの鐵筋の切れ端を入れて置けば上等であります。

コンクリートの建物が溫度の變化に暴露されると、此の打ち繼ぎの部分にかゝる龜裂が起り易いものですし、又不幸火を失した時にもかゝる繼目が厄介な問題の種ともなり易いものです。日本で

は餘り聞きませんが、米國でフラット、スラブの床をもつた工場が失火の際にこの打繼ぎの部分に沿ふて火を吹き出した事があるといふ事です、また在來建物に荷重試驗をすると多くの場合この打ち繼ぎの部分が最も弱い爲めに、この繼ぎ目に沿ふて龜裂が表れたといふ事が米國イリノイス大學の紀要の中に出て居たのを讀んだことがあります。現場の監督に當る方々は、充分注意して第一繼ぎ目を無暗に造らず必ず、今申し上げた樣な剪力が少い線（普通徑間の中央）に沿ふて成る可く少く作り、又打ち繼ぎの場合には柱と床と基礎と壁とを問はず充分屑を取り去つた後にモルタルを入れ、尙能ふべくんば、鐵筋をその部分に丈、餘分に入れて置きたいものであります。貯水槽は勿論、水壓を受ける部分の如きは特に充分の注意を爲て、成る可くは、一氣に仕事をした方が安全でありませう。

云ひ忘れましたが、丁形梁を打つのに梁のウエツブ丈を初めに打つてスラブを二回目に殘すことの善惡に就ては從來餘り差支えのないものだといふことになつて居ます。私自身もかゝる工程によつて仕事をさせて、後に眼に見える程の不都合は見付けませんでしたが、梁の胴體に比してスラブが薄い場合には或は宜しとしても、スラブが相當厚くなつて胴に比してその割合が大きい時には寧ろ一回に必ず打つべきことを主張したいと思ひます。これを二回に分けるのは恐らく、よい事はありますまい。又割合薄いスラブの場合と雖、スターラップ形に入る補助筋を成る可く餘裕を見て數多く入れる方が安全でありませう。又同じ梁でも採光の都合上、梁の胴體をスラブの上につける式のものがありますが、かゝる場合は前と反對にスラブを第一回に打つてから胴體に移ることが多いのですが、是も成る可くは梁の假枠を初めに付けて置いて一時に打つ方がよろしい。補助鐵筋を多く入れる注意は前の場合よりも尙多く適用されるものと思つて頂きたい。この式で打ち繼ぎの面に沿ふて水平に龜裂の入つたのを私は何度も見たことがあります。

鐵筋コンクリート構造と施工上の諸問題 (一)

會員 T N 生

若し鐵材の製造業が十九世紀の後半期に於て其異常なる進歩發達を成就し得なかつたならば、殊に建築用材として最も適當なる軟鋼の精製な良法が工夫發見せられなかつたならば、鐵骨構造其者すらがしかく偉大なる事績を二十世紀に晝かなかつたであろう。

して見ると優良セメントの發明と精製軟鋼の改良とはやがて鐵筋コンクリート構造といふ一大驚異を導き來つた二つの大きな原導力である。又、此等二つの大きな原導力が既に十九世紀前半期に凝結して居つたといふ事實……しかも此二大發明が鐵と石炭の豐富な英國に於て成就せられたといふ事……を考へて見ると、宴に無から有が生れるといふ事はあり得ないし、其發明が完成

○

鐵筋コンクリートの發明が佛蘭西の植木鉢から其端著を開かれたにせよ、其進歩發達の跡から鑑みて觀ると、究めて止まざる幾多の諸人士の研究工夫の結晶であることは否むことの出來ない事實であるが、建築構造史の上から觀察すると、大きな時勢の波の力であることは亦爭ふべからざる斷定であり得ると思ふ。

若し今日の優良なポートランド・セメントが西暦一八二四年英人ジョセフ・アスピヂン氏の力によつて發明せられなかつたならば什うであつたかとても「コンクーリト」其者すらが其偉大なる價値を認められずして或世紀を送つた事であろう。

される迄に相當の舞臺と役者と道具立とが相備つて居たのだと感歎之を久しふする次第である。

それは恰も自動車の發明が都市の道路の半垣になつたが爲めに促進せられたといふ事實、そして飛行機がガソリンエンヂンの改良進歩に負ふ所が多いといふ事實、或はまた活動眞寫の發達にセルロイド工業の進歩が影響して居る事多大であるといふ事實等と相對比して頗る興味あることではあるまいか。

○

一度、鐵とコンクリートとの結婚が成り立つて以來、筋として挿入せられる鐵材がよくコンクリートの缺點を補ひ、コンクリートは亦鐵材を包圍保護して堅靭硬直なる構造体を形成せしめ得るといふ其長所美點は幾個條の効能書となつて紹介せられた、然るに鐵筋がコンクリートの肉の中で腐蝕作用を起して折角の効力が不能になりはせぬかといふ杞憂は直ぐに起つた。そこで此新構造に對の危倶、不安、それから中傷も加へられて居たが其　眞價を推奬する熱心なる賛同者の努力はとうゝあらゆる比難を排除して今日あらしむるに到つた。

乍併、鐵とコンクリートの兩者が相結び相契る以上は其素質に於て双方の缺點を補強して完全なる結合体になる丈の天賦の妙所がなかつたならば什うして今日の結果を贏し得たであろうか、鐵筋がコンクリート体中で銹を生ぜざるばかりでなく銹ある鐵材をも消化して英氣を生ぜしむるといふ事實は、實に媒介者にとりても彼等自身にとりても望外の仕合であつたのであろうと思ふ。

更にまた一葦帶水を相隔てた英國と佛國に就いて考へて見る、呼へば答へん御國柄である以上は鐵とコンクリートの結婚を取扱つた媒介者が却つて佛國に於て成し遂げられたといふのも面白ければ、亦其學理上の研究實績が學術技藝に優秀なる頭腦の所有者である獨墺の人々によつて理屈付けられ計算化せられた事も面白いと思ふ、加之、此等の國々でデッチ上げられた報告をヨシ來たとばかりに應用し利用したのが太洋を隔てた殖民地で

ある北米合衆國や濠洲諸都市であつた事も頗る面白い。

畢竟するに歐洲文明の爛熟した釜の中から湧き出された幾多の發明發見の中に於て二十世紀初頭の驚異として考へられるものゝ間に、少しも損色のない鐵筋コンクリート構造といふ大發明が、セメントと鐵の豐富である諸國の間に釀成せられたといふのは其因念の深きはいはずもがな……所謂瓜の蔓には茄子は生へぬ諺〻一般更らに大きな眼から觀て時勢の力であるわいと考へられる。

○

鐵筋コンクリート構造が日本建築構造に類似の點の在る事は吾々日本人の夙に認めた所であり、同時になぜ日本に發明せられないであつたろうかといふ疑問を起させる——幾萬年後の歷史家は或は日本人の發明に係る所といふかもしれぬが——が、蒔かぬ種は生へぬといふ譬の通り鐵とセメントをしかく利用し得なかつた我國は時勢に後れて居つたのであつて同時に地の利を得ざるが爲であると言ふことは斷言出來る。

若し夫れ今日尙鐵筋コンクリート構造の發達進歩が遲々として居る如きは所謂人の和を得ずして成るが儘に進みつゝあるが爲めと申さうより外何ともいひようがない樣である。

我國に於ける鐵筋コンクリート構造法の研究、計算上の紹介報告は明治の後半期から大正初頭にかけて幾多の篤志家が力を盡して精に入り微を極めて居る、乍然實際上の諸問題については從來あまりに放任されて居る樣に思ふ、我國に於ける施工上の經驗、失敗の歷史が多くは發表されずに終つて居る——殊に失敗に關するものは全く滅却されて居る——といふのは什ういふものであろうか筆者は之の點を遺憾として、茲に聊か亂筆を驅つて自から知れる範圍の紹介を試みて見やうと思ふ



亞米利加の都市計畫（一）

ウオルター・デイ・ムウデイ著
Z Y 生譯



一九一八年に美術院に、二つの遺産が送くられた。ジョルジ・ピー・ハーリス氏が、五十萬弗の基金を送つた。そしてその基金より生ずる利子を全部、樣々の目的のために使用した。これは曾つて美術院に送くられた寄附の中で、最大なものであり、非常に豐富なる賜物であつて、全然豫期しなかつたものであつた。ハーリス氏は終身會員であり、また屢々美術院を訪づれ來たつた人ではあるが、院の事業については積極的の興味を何等持つて居なかつたから、殊に左樣に思はれた。もう一つの遺産はジョルジ・エヌ・カルバー夫人が遺こした凡そ五萬弗の基金である。

上記の人々は美術院をして現在の位置に達つせしむるに、與つて力のある人ではあるが、しかし

院にとつて大なる意義のあるものは、本院の維持と活動とのために年々寄附をしつゝある、年會員たる五千人の友人達である。他に參事會員、終身會員、參事終身會員、維持會員等がある。

美術學校は凡そ七百名の本科生（朝開く學校）と四百名の夜學生と、四百名の正規學生初等學生とその全在籍者一年間に凡そ三千人に達して居る。學校は財政上殆ど自給であつて、一年の收支六萬五千弗に達して居る。各科とも極めて專門的なものをも敎へ、且つ著名なる敎師等を時々遠方より招待して居る。

美術院美術學校の再築は、一九一八年に竣工した。近き將來に、訓練ある美術家を出さんとの要求に充分應ぜんとする目的を以つて、開校されて居る。これは學校がアメリカの工場に、負ふて居る彼等の忠順を認識するのみでなく、美術家に生計を與へて呉れる個人に對し、學校が責任を負へることを充分に認めて居ることにあたる。

フーラートン・ホール（座席四七五個を有す）は、様々なる團隊に提供し、講演の目的のために用ひられてゐる。美術院はこのホールで大抵は美術に關する講演であるが、一年に二百五十回の講演會を開いて居る。その講演の大部分は、入場無料の公開講演である。

年々八千人の人々が、便宜なる建物の中にある美術と旅行に關する、一萬三千冊の書籍を有する大ライエルソン圖書館を利用して居る。一萬五千五百箇の幻燈板と、三萬三千箇の寫眞は公衆用として役立つて居る。

コロンビヤ世界大博覽會は、シカゴ市に多くの偉大なるものを殘した。飛消し去る『時』に對し勇敢に立てる二つのものは、來る年も來る年も永久に聳え立つであらう。その中の最大なるものはシカゴ市をして世界最大の建築美術の中心たらしめた建物である。市のために貢獻した他のものは博物館である。その建物がこの世界第五位の市に與へた福祉は大なるものである。博物館は大博覽會の終頃、一八九四年に設立せられて以來、九エーカーの土地を占めてゐる美術館を用ひてゐた。

而して間もなく、大公園の端から、フロント湖岸に面して立ち、十二市街の端、五哩市中に入る地點に、壯大なる新しき建物を設けた。こゝには市の各方面から、容易に近き得る便宜の地である。

博物館展覽物の中核となる材料は、寄贈に仰ぶぎ、且つコロムビヤ世界大博覽會に於て購入したものである。併し之の大抵の材料は配列し直し再選し、或物は除外したものである。舊き部門を除外し、新部門を設け、既に廿四の年月を終り、六百萬弗の費用を支出して、今は五部門―人類部、植物部、地理部、動物部、エヌ・ダブルユー・ハーリス公衆學校延長―に分たれてゐる。

この市の大博物館の建設は、マーシャル・フイルド氏の志によるものである。フイルド氏は最初百萬弗を寄附したが、之れは世界大博覽會出品物中の價値あるものを購入するに用ひられ、更にこれに加へて彼の死後八百萬弗の多大の金額を寄贈した。而してその中の四百萬弗は永久の建物を設くるに使用し、他の四百萬弗はその維持費に當てた。更に他の人によつて八十萬弗が寄贈された。

東洋の樣々の寶庫、アラデイン・ケーブの燦爛たる寶石、地中と海中との驚異、空中の駭く可きもの、粗野ではあるが魅力ある原民、蠻人の細工物、近世の立派な手細工物、恐龍（ディーサウルス）、アストドン（象に似たる第三紀産の巨獸）の骸骨、地上の爬蟲類等、世界の各方面から蒐集したる點、ワシントン市の博物館や大英帝國博物館に正敵し得るもの又之れに劣らない。又そこに設けある包括的なライブラリーと講演會とは、嘆賞す可き附屬物である。博物學の各部門は博く見本を集めてゐる。例へば古代の涯に居住せし人種と山野に居住せしアメリカインデアンの武器、陶器、織物、飾物の見本を蒐集せる米國考古學の如きである。ブリツチツシユコロムビヤとエキスモー種の參考物もある。その他亞細亞、亞弗利加、支那、西藏の人種學も自然に、又人を引着する方法で展覽せられてゐる。

又同館は世界に於ける寶石の、最も立派な蒐集の一をもつてゐる。その中には現在の人智によつて知られてゐる、殆ど凡ての寶石の眞寫と、注意

す可き隕石の蒐集がある。直徑十八呎の月球のモデルもある。古代より近代迄の、地球の生物を物語らしむる、發掘物もある。三百種類の植物、花果實の構造の模型、科學上の研究の參考たらしむる目的の（こは何人でも博物館に赴く人は自由に使用し得る）七萬冊の書籍を有する圖書館がある。公開講演は今は美術院のフーラートン・ホールで行はれてゐるが、世界最大の白大理石の建築物たる處の、博物館の大なる新家庭が竣工した曉にはそこで行はれる。そこには一千人が入場し得る劇場を有し、二百名の座席を有する講演室、各室八十名の生徒を收容し得る敎室五室を有してゐる。驚く可き容姿をフロント湖に對して現してゐる。此建物は希臘建築に對する一個の記念碑とも言ふ可きである。壯大なる丹精、公衆に對する準備遺憾なき樣の接近法、又科學的研究に對する十分なる設備が竣工の曉には見らるゝであらう。

博物館はその內容物に對する寄附を除いて、年々二萬五千弗の收入をもつてゐる。その永久的の維持方法に就ては、年々十萬弗宛を、課稅によつて產むべく、立法院の法令によつて定められてゐる。この新建築物が、最近、一九一八年十月グランド公園に壯麗な姿を現した時、一時、一般の病院として政府に呈供し、政府はこれを受領した。

『肉躰を富ますものは、精神である』これ、セエキスピアの金言が、希臘文化に歸れてふ、遠き雄叫の反響であるならば、曾て世界が經驗したことのない、現在の繁劇な又物質上の進步の最も著しい現代社會にあつては、意義ある叫である。中央西部の大心臟たる市加古市には、市として敎育の中心たらしむるのみでなく、『趣味』として知らるゝ精徵なるものを、凡ての者に積極的に注入する放射能の中心として、市の信望を高めたること莫大なるものがある。市の建築上の驚異は、皮相の觀察者に最も多くの印象を與へる。近世建築術を一飛さした『トロイの頂なき塔たる鐵筋コンクリートを創めたる者は、實に市加古市の建築家（故ダブルユ・エル・ビイ・ゼエンニイ）である。若し市が市場の大中心たるとを要求し得るならば、又合

衆國に於ける最大の書籍發行所たりとの權利をも要求し得る。市は八百二十種の新聞雜誌を發行してゐる。又非常に位置重き書籍發行所をも多數有してゐる。尤も中心勢力たる雜誌、通俗雜誌。或は科學雜誌又は繪入新聞等の發行を鼓吹する點に於ては、特に顯著なる働もしなかつたが、併し貢獻ある著者を有する點に於て、凡ての他の米國の都市を指導するの勢力を有してゐる。その著者等は神仙譚、劇曲、歷史物語、科學上、宗教上の勞作物、定評ある商業書、學校教科書等を、豐富に產出した。書物發行は紐育の仕事であり、この著作の點に於ては市俄古が顯れてゐる。或著者が以下の如く言つてゐる。

『疑もなく米國人であり、又新しい興味深い語る可き材料を有し、そしてこれを個性表現の文躰で現はす記者を、市俄古市の中に採索して見給へ。その中の十分の九は、この潮の屠所と、何等かの關係ある人々である。即ちそこで育つた人とか又はそこで旗上げした人とか、又未だ世に名をなさぬ間こゝに住んだ人とかである』と。

ヘンリー●エル●メンケン（文學批評家にして雜誌編輯者）はかく言つた。

『大部分の讀賣通俗文庫を夥しく出版したもの、國民文學の形式主義を打破して、國民的精神を注入したものは、紐育に非ずして市俄古市である。Little Review House Beutiful 等の雜誌を出したもの、又米國に於ける最初の最良の小劇場たる、モウリス●ブロウンの劇場を設けたものも市俄古市である』と。

小說家に關し、此權威者は又言つてゐる。

『年若く、見地清新なる、此國の權威ある彈力と精神とを有し、民衆の眞の性格描寫、彼等の哲學を現はす、凡ての米國の文學上の運動は、——凡て市俄古市より來つたものである』と。

紐育人は右の如く言つてゐる。又それ以上に市俄古市の特色に就て語つてゐる。即ち眞に優秀なる小說家を有ずる、最善の最も多產なる土地であると批評してゐる。かゝる見解に對する贊否は別として、兎に角その決定は批評家に委せておけばよいことである。米國の文學界に於ける市俄古市

の位置は、美むべきものである、而してそれは文學の各部門に於て左樣である。凡ての方面ともに注意せられてをつて、藝術、科學、事務の各方面ともに、國民中の最も著名なる權威者を市が出してゐる。

最近五百五十名以上の著名なる著者が、市俄古市に於て頭角を現してゐる。而して彼等は種類別けにすれば、文學上の各分野、百十二種の方面に屬し、探究し努力してゐるといふ、駭く可き數を示してゐる。而して彼等全躰の力を合した結果が米國の愛書家、學生、勞動者の書架に、四千種以上の書冊は年々貢献してゐる、而してそこには稀にしか現れぬ傑作が二十種ばかしは生れてゐる。

市俄古市は又才能あり知名である、特別なる記者や寄稿家——著名なる編輯人、批評家、劇曲家短篇作者（彼等は凡て市の文學界に千紫萬紅の花を咲かしてゐる）——の夥しい數を有してゐる。

市の記者等が勢力を張れる出版界の分野（その中には六十二名の女流作家記者を含み、その中の幾分は知名の人々である）は、歴史、小說、哲學倫理、隨筆論文、生理學、戲作物、童話、英語學數學、政治、經濟、法制、神學、宗教、ユーモーア、藝術、旅行、諷刺文學、植物學、社會學、天文學、醫學、劇曲、動物學、新思想、農學、醫術機械學、鳥禽學、考古學、東洋學、詩、音樂、人種學、商業學、神仙譚、生理學、地理學、財政、販賣學、言語、敎科書、心理學、森林學、化學、圖書解題、工藝學、表現、運輸、唱歌、讃美歌、齒科學、作法、形而上學、傳記、電信學、家畜學語原學の分野を占めてゐる。

歴史家の中には以下の人々がある。エー・シー・アンドレアス、ソーロン・バック、イ・ビー・ワッシュボルン、アイ・エヌ・アーノルド、エリアス・スルベルト、ルウフス・ブランカード、ウキリアム・ヘンリー・スミス、ウキリアム・ブロッス、エーミエヌ・マルキス、カルター・エイチ・ハリソン、カロリン・エイチ・マクアイル、ベイン・デヨセフ・キルクランド、アイル・ミルトン・クワイフエ、又新聞記者の大家の中には、フランク・イー・ヴイル

キイ、フランセス●イーストマン、エドワルド●ディイ●アーソン、著名なる歴史物語作者には、キンディ夫人のWar Bun(米國西部の開拓時代の物語)アリイ●エイチ●カザーウッドの『トンチーの話』『老カスカスキャ』ランデル●バーリッシュの『荒野が王たりし時』(此作者は過去十五年間に廿三冊を書き、二百萬冊を出版してゐる)クラーク●イー●カールの The Illini and The Iron Way エアルソン●ホウの『ミスシッピイの泡立ち』『西の道』等である。その他多數の書物が著はされてゐる。

文學史に關する最も價値ある貢献をした書物には、バーシイ●ボイントンの Book of American Poetry『米國の詩』ミラー●レイノルドの Elizabethan Poetry『エリザベス時代の詩』イー●プレストン●ダルバンの Romance Literature(羅馬文學)、アルチン●シュッチエの German Literature(獨逸文學)市俄古大學は著作の豐富なる源泉であつてその指導者等は此分野に於て多數の著作をしてゐる。

市の出身者では、ジユリアン●ストリート(現代の第一流の通信員)フランク●デイ●クレエーネ、ハーリソン●ロウデス、ペーター●フインレー●ダン等がある。實際市俄古市は東部の發行者にとつては最も人氣ある補充の地點となつてゐる、ヂヨルヂ●エーデ(米國最大のユーモリスト)ジョン●チイ●マックカッチエオン(意匠の驚く可き程に、多種多樣に滿ちてゐる圖案家)。此等の人々は全世界に最も有名な市俄古人である。

遙か始の章に於て、市俄古は兒童にとつて最良の場所であると述べておいた。此市は『兒童の詩人』であり人を生捕にする力あるユーモリストたるオイゲネ●フイルドの居住する處である。又有名なる『滑稽なる人』であり、『オズの魔法使』の著者であるフランク●エル●バウムも此處に住んでゐる。又魅力のある神仙譚を書く、エリザベズ●ハーリソンも居住してゐる。年長者のために『アザリヤ』『圍まれたる森』『恐ろしき姿』(怪談)等その他多くの書物を書いたエリア●ダブルユー●ペアッチイ夫人もゐる。ゲオルゲネ●フオルクナーも、各國の寓話を書いて、我國の寓話を豐富にした。クラ

ラ・ラウグリンは娘等のためになる多くの書物を書いたクララ、ルウイズ・バールンハム、エリザベス・ハルモン、エミリー・シイ・ブレエーク、アン・エイチ・ウッドラッフ、ルウシイ・フイッチ・ペルキンス、アリス・ビー・ライレエ等も又同様である。少年のための物語作者中には、エイチ・エフ・セイラー、フランク・ダブルユ・ヴイル、ダブルユ・エフ・ウインスロウ、ジョシアー・エイチ・ヴイラード、エチ・エス・カンフイルド、ウイルリス・ブイ・アボット等もゐる。

眞に價値ある書物を書くことは、繪畫を描くと同樣、新しき或物をねらはねばならぬ。市加古の記者等は獨創の精神を呼吸してゐる。鮮活、簡潔香氣等をもつて、想像を鋭からしむる、泰西の精神のある處には、彼の市の典型であり、彼の時代の典型である。泰西記者に幻影と眺望とを附與する—同時に元氣回復力、人間的、適切てふ特質を附與する—確に或物をもつてゐる。

我等は舊き時代の記者の著作に於て、標準的の文學を有してゐる、之れを模倣する者は尠ない彼の時代の天才は、今日の時代の天才でない。何故である。我等は民衆のかく言ふを聞いてゐる。『この書物もあの書物も、生き殘らぬであらう』と。藝術家とその勞作物に就ても、同樣のことを言ひ得る。がこの書物は長き生命を有す、かの書物は有せずてふことを、差別して何人が示し得やう。不朽なる著作物は、凡て今日の時代の傾向に適したるものに外ならぬ。今日の時代の記者は、我等の時代、我等の國民に要求せられてゐると見ゆるものを著してゐる。舊き時代の勞作物は、之れが傑作であつても、矢張りそれは舊時代のものに過ぬ。民衆が要求する時に、よしそれが所謂舊き時代の文學的價値の許準に、當嵌らなくとも、彼等の要求してゐるものを與ふることは、決して蔑視すべきことでない。新標準は毎に造られつゝあるのである。こういふ見解が今日の最善の標準である。今日の用に役立つ限りは、その作物は決して嘲る可きものでないといふ。

市加古市が有用なる智識の倉庫に、大なる富と永く價値あるものとを、貢献し得たのは、其等の科學者を通じてゐある。米國の最も深奥なる思想家、有爲なる記者（探究と學問との各部門全體に）等は、凡て市加古市に居住してゐる。

今日の所謂文學的雜誌（近世小説を含む）、眞の價値ある世界に於ける眞實の事物に就ては、眞面目なる考慮を拂はない。今日の時代の愉快な輕い陽氣な小説は、その道、その場所にとつては結構である。併しそれは民衆、團體をして、道德的に心的に發達せしむるに就ては、眞に力ある業はやつてゐない。自分は今、現在『市俄古市の文明化』てふ題目に時折り、己を打込める、或文學批評家、文學者を想ひ起す。彼の論文は題目は惡いが、優れたもので、快活な花々しいものである。之れは小説家、詩人、ユーモリストの立場から、時代の好尚に迎合せる文學上の功業に就て描いたものである。かゝる類のものはその立場からは、滿足す可き、完全なるものであるが、併し想像し見よ。何時、又何處に小説家、殊に現代の多くの小説家が、文明の問題に行き當つたことがあるか寧ろ之れ等の著作は非文明をつくるために、多くの貢献をしたかも知れぬ。眞の文化、心的發展の眞の寒暖計として、彼等の作物は何等の價値なきものである。眞に文明の基礎となるべきものは、世界に關する知識と探究の、深い結晶の池より發したものでなくてはならぬ。之れ等の作物に就ては、市俄古市は非常に祝福せられ、又その産物に豊富である。重要なる題目に就いて論じ、又書く著名なる著者の勞作物は、『最も大きな販賣人』たることを要求する。喧騒なる廣告の中には、見出すことは出來ぬ市俄古市の眞の發達が生ぜしめた、最大にして、最も魅力あり、遠大なる章の一は、人の道德を高め、人の知識を富ませ役立たしむる無數の文章を出した、幾百の記者を見れば分る。以前ならば稀には、こういふ人々に就て、鳥觀することを厭ふ者もあつた。以下その人々の姓名に就て數へ立てゝ見るが、かゝる企としてはこれが最初である。

次に最も興味ある事實が現れてゐる。

市俄古市の發行者は、この最も無比な、有用なる書物を出してゐる。即はち(一)Who's who in America (二)Chicago Daily News Almanac と(三)年鑑である。(一)は米國が有する最も著名なる人々に就て語り、(二)は事實と事件の記錄である。兩書とも繁忙の人々には缺く可らざる參考書である。米國の顯著なる男子婦人の傳記の中に Who's who の人名中千二百人以上は著名なる市俄古人である。この書の中に記さるゝならば、この人は眞に記さるゝに價値ある有名の人であり、又何等かの價値ある事業をやつた人である。此比類なき價値を有する、知名人に關する百科全書は時には眞似をする者もあるが、決して成功したためしがない。該書が一八九九年に始めて發行された時には、八六〇二名の人物が記されてあつたのみであるが、一九一八年の發行版には二一、九二二名に增加してゐる。二年に一回發行される The Daily News Almanac ang year book とは、米國最大の新聞の一によつて發行されてゐるのであるが、一九一八年版には、世界に於ける最大なる出來事、過去に關するもの、又現在最も重大なるもの二萬五千項目を記載してゐる。同年版に於ける新事項は、合衆國參戰の記事で、項目は餘程その項に集中されてある。

○物思ふときれや
　炭の發る音

○言葉さへなくて
　月見る寒さかな



住宅と色彩（一）

會員　工學士　建築士　葛野壯一郎



（一）住宅の赤化

住宅の赤化などといふと、何だか穏かならない問題の様に聞えるかも知れませんが、決して其んな種類の事件では無く、たゞ私が、住家の屋根の赤瓦昔が、近年著しく眼立つて其處にも此處にも、増加した事を申した迄で有ります。此赤屋根が非常に増えたといふ事實は、觀方によつては單なる一時的流行だと云つて仕舞はれるかも知れませんが、私は左樣簡單に、此事實を見逃す事は出來ない。其れは吾が在來の無彩色單調な住家建築に一種の強いショックを與へるもので有り、明快な色彩の侵入で有り、吾々が持つて居つた住宅に對する色調の觀念が、根本から變化せんとする前提で有り、將に其一大轉換期を暗示するものでは有るまいかと、斯樣に觀察せらるゝので有ります。

由來私共は、強い色彩、赤色とか橙色とかいふ鮮明な色彩の建築に對する應用に就ては、比較的甚だ冷淡で有つたので有ります　衣類や調度の問題はしばらく是を別として、建物殊に住家建築に對しては、無色單調を原則とし、赤とかオレンヂとか綠とか云つた樣な、鮮明な色彩の應用に關しては、全然門戸を閉鎖して居つたので有ります。在來和風住宅の色調としては、白色にあらざれば何れもクスンダ茶色か灰色、或は淡、淺黄色水色と云つた樣な調子のものゝみで、其取合組合せ方の如きも、是亦極めて單調なもので有ります。殊に木部の如きは、殆んど全く素地其儘を愛用し、色合よりは寧ろ柾とか杢とかいつた樣な、木理鑑賞の方面にのみ發達し、色付けするとしても、ヤット床框か襖の框位で、それも黒色とか蠟色の樣な、至極黒ずんだ色に塗らるゝので有ります。室によつては、襖紙の色合或は其れに描かるゝ繪畫によつて、多少複雜な色調を與へる樣な事は有つても、それは特種の場合に限られ、襖紙の多くはヤツパリ灰色か茶色乃至淺黄色の、クスンだ種類のものが多く、襖に繪を描く場合にしても、淡彩の丸山風か、墨繪の狩野風或は南畫風の如き、カラーレスのものが最も多く、全然白紙張りの場合も、亦決して少なく無いので有ります。

住家の外觀に至つては、色彩に對する考慮は全然欠けて居ると云つても宜いので、壁は白色、羽目板は黒い燒板か漉塗の素地板を使用し、クスンだ鼠色の屋根が、一種陰鬱にして單調な氣分を漂はして居るの外は、何等色らしい色彩を私共の住宅に認むる事は出來ないので、町といふ町、村といふ村は何れも千遍一律、たゞ鼠色の浪のうねり〳〵した中に、白壁が所々に隱見するといふ外、色彩に對する何等特種な感じの無いものとなつて居るので有ります。

斯樣に貧弱な、全く色らしい色を持たない、殆んど或意味に於ては元始的なカラーレスドゥエリングに、私共は長い間住み慣れて來たのであります。其結果、私共は色彩に就いては非常に冷淡であるか、自然からめぐまれたる赤とか青とか、綠とか紫とか橙色の如き、明るい強い晴れやかな色

彩を、吾々の住家に取入れる事には少しも考慮するところ無く、其等の色彩の配合調和は、全然住宅建築とは、別途の問題で有るかの如く取扱つて來たのであります。一言にすれば、『色付けを忘れた住家』、それが從來の私共の住家で有つたのであります。衣類や調度の色彩が、何れもクスンだ眼立たない趣味の物の多いのも、其背景となる可き住家の無彩色單調から、自然現在の如く發達して來た事も、亦疑ひの事實ないで有ります。

併し右の事實は、私共の祖先が、建築に色彩の適用を、全く知らなかつたといふ事では有りません。嘗つては、朱とか黄土とか群青の様な、きわだつて眼さむる様な色をも、可なり強い調子で、自由に適用し、建築の内にも外にも、大膽な色彩裝飾の計畫を實行した事も有つたのであります。たゞ其版圖が、堂塔伽藍か、あらひは貴紳邸宅の一部に限られ、廣く一般住家に及ばなかつたのみならず、是等特種の建造物にあつても、色付けする事が柱や軒廻り壁面等から忘れられ、漸く内陣だの天井の一部に、片身を留むる事となつたのであります。其徑路は濃い彩色繪が、何時の間にか淡彩や墨畫の方にのみ、專ら發達して、濃い繪の具の取扱ひ方が、甚だ下拙になつたのと同様の行きかたであります。

此原因に就ては、元來の國民性が、割合に淡泊りした好みで、萬事に徹底味の少ない事に素因する點も多いではありませうが、更らに他の半面に於て、禪と茶道の流行が、著しく近因をなして居る事は事實であります。禪の流行が朱と黄土を、寺院の軒先から盡く追ひ出して仕舞ひました。赤や黄で彩ることは、恰るで遊女でも近づける事の如く、一種の罪惡視せられ、禪以外天臺でも淨土でも、自然同様に、其堂塔建築の色彩的外容を、全く一變して仕舞つたので有ります。

西洋にも同じ様な例があります。初期復興式の後、敎界にピユリタニズムが起つて、其れが中古からの寺院建築の内容に一大變化を與へました。即ち壁からも天井からも、在來の美くしいモザイツクやフレスコデコレーションを追ひ出して、全く寺院を白化し、ヤット内陣窓のステンドグラス

に、中古以來の美くしい片身を留めるのみと仕てしまつたので有ります。此ステンドグラスだけでも殘つたのが、兎に角有り難い事だつたと、現在西洋の裝飾家は、涙を流さん計りに悦んで居るので有ります。

寺院の無彩色化が、住宅建築に著しき影響を持つた事は勿論、禪とは關係の頗る深い茶道の流行が、直接間接住宅の樣式並に色彩に影響し、支配し、家の内外から、あらゆる明るい、鮮やかな、愉快な色調を追ひ出して、一歩も門内に入るを許さず、現に視るが如く、私共の家をして、甚だ單調無色なものとし、非藝術的なものとして仕舞つたので有ります。

斯の如く明るい強い色、鮮やかな強い色から、全然めぐまるゝ事を忘れて仕舞つた、黒ずんだ陰氣な空氣に包まれた家に、長い間住み慣らされた私共は、決して幸福では無かつた事を、私は切に思ふ者で有ります。茶道趣味に共鳴し或は沒頭する種類の人から觀れば、所謂『澁い』といふ事が、凡ての好尚の究極で有り、吾々の住家が踏んで來た進歩？が、其上乘で有るが如く思はるゝかも知れません。事實多數の、過去にのみ執着の多い人達は、左樣に信じて居るので有ります。成程『澁い』といふ事が、必ずしも無價値で無い事は當然で有りますが、『澁い』といふ世界外に、モット明るい花やかな、色彩の自由な世界が有る事を知らなければなりません。現代私共の要求するところのものは、特種の限られた『澁い』世界では無くて、限られない普遍の明快な世界で有ります。其處には鳥歌ひ花笑ふ、自然の美くしさを其儘に思ひ起さすやうな、自然味、現實味の充實が必要とさるので有ります。

近頃著しく殖えた赤屋根の住家を觀て、私のツクヅク感ずるところは、其れが吾が在來の住家にとつては、明らかに一大謀反で有り、革命で有つて、是れを住家の赤化と呼ぶ事が、甚だ至當で有る事を思ふのであります。古い鼠色とは何のゆかりも無い赤色瓦の使用が、私共に暗示するところのものは、古い素地のクスンダ灰色の衣を脱いでモット明快な強い色調の世界に、吾人の住宅を導く事で無くて何でありませうか。明るい色、鮮やかな強い色、其色々の近代的組合せが、私共の家を一歩〳〵何んな結果に導かんとするのか、そは非常に興味ある現實の問題であります。（未完）

大阪北港株式會社 經營の住宅に就て

會員 建築士 小笠原鈅



大阪北港株式會社は市内の西南隅にあたる正蓮寺川沿岸一帯百二十萬坪の地域に於て正蓮寺川の河口に大阪築港と聯絡して所謂大阪の北港を造り港灣の設備をなし此人家の稀少にして殆んど田圃及荒蕪地たる一圓の地に一種の都市計畫をなす目的を以て其全地域中先以て約四十萬坪即正蓮寺川と新淀川との間に介在し殆んど煤烟のなき大阪市内に於て空氣の最も清鮮なる地區を住居地域と定め第一着に住宅經營をする計畫を立て昨年五月より約一ケ年間に五百戸の住宅を新築する事になりました。

其地盤は〇P十一尺の高さとし全部砂を以て之を盛上げ其結果市内の平坦部に比し更に幾分の高さを增す事とし排水を最も宜くし之に上水下水の設備は勿論近く市電の便利を有する市内稀なる田園都市的住宅地とするのであります。

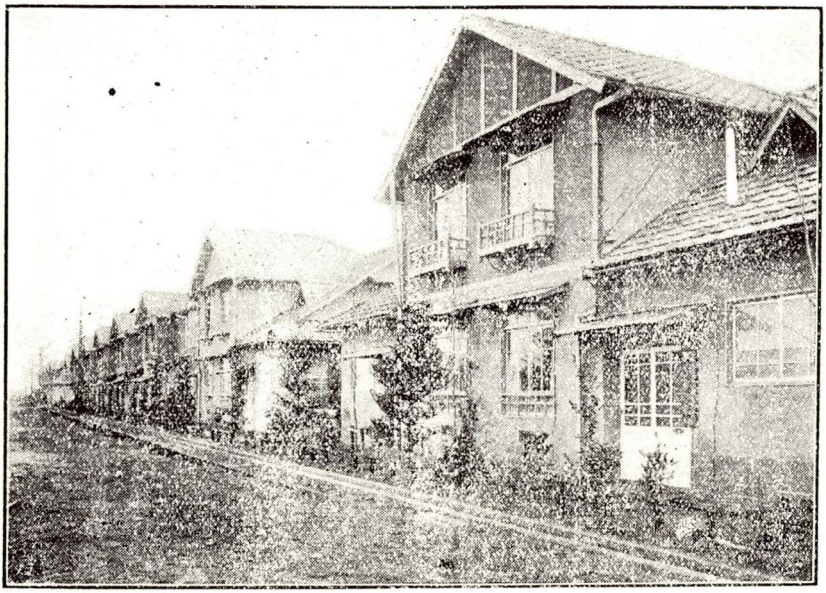
會社の第一着に經營する住宅は所謂中産階級の「サラリーメン」用の可成家賃の低廉なるものを建設し一日も早く之を社會に供給せんとするもので其第一期建築を五月より始め十一月までに先以て百五十戸を新築し一般に之を貸付けました續いて第二期建築は八月より着手しまして昨年末までに百戸を建て目下は浴場、理髮店及一般商店を建築中で更に本春二百餘戸を南岸地に新築せんとして居ります。

私は此建築工事を擔當致して居りますから聊か之に就て御紹介申上たいと思ひます。

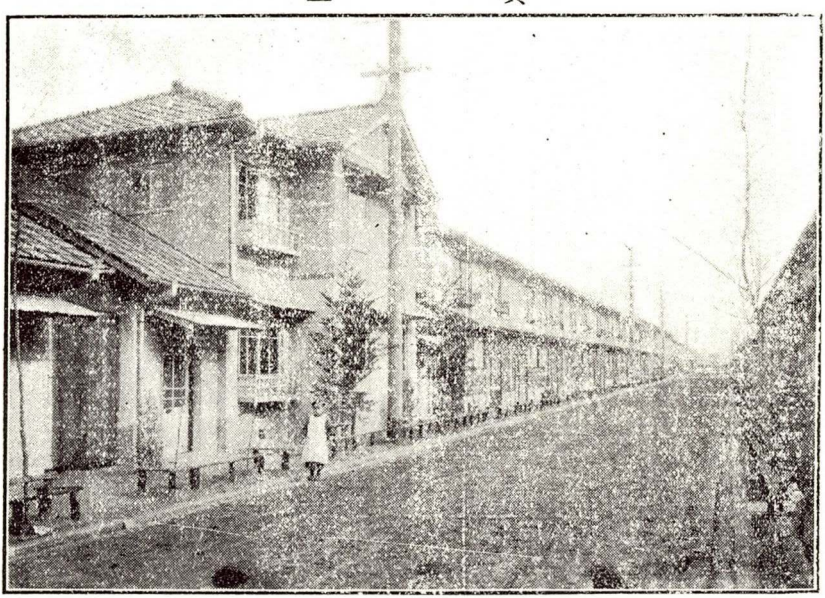
會社の希望として可成家賃の低廉なる目下一般に最も渴望せらるゝ幾分改良せられた住宅にした

北港株式會社經營住宅外觀

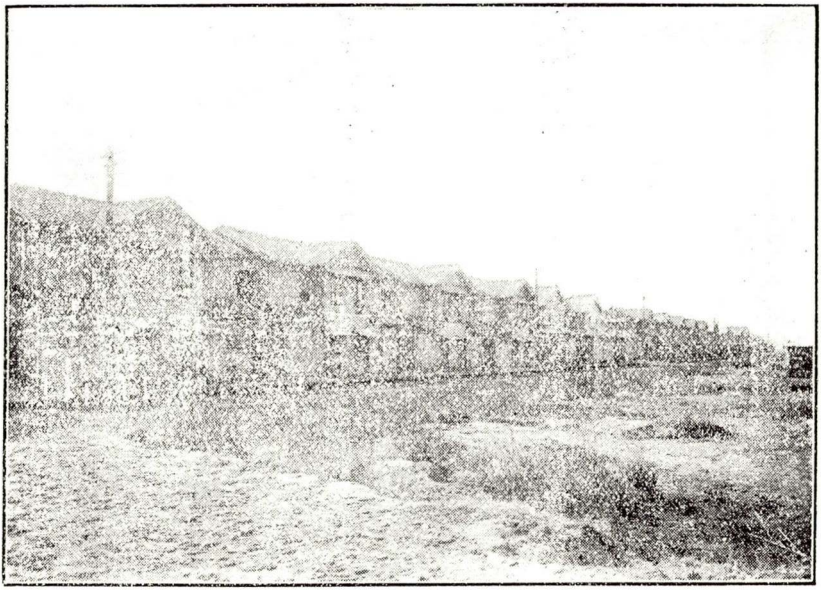
其一　（在大阪市西區西島町）



其二



其三



其四

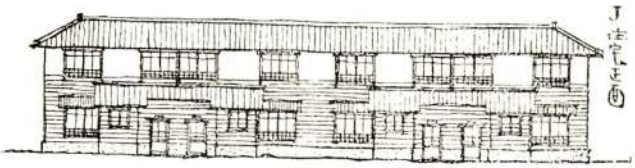


北港株式會社經營住宅立面及平面圖

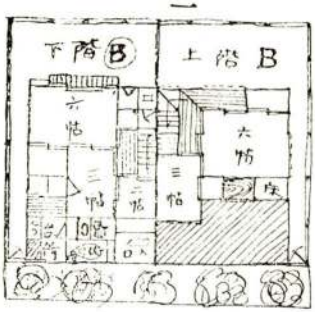
一　其

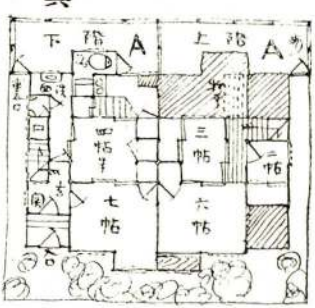


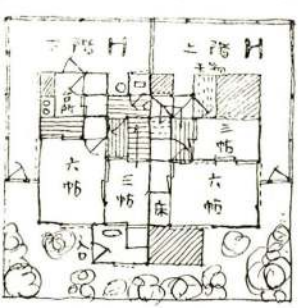


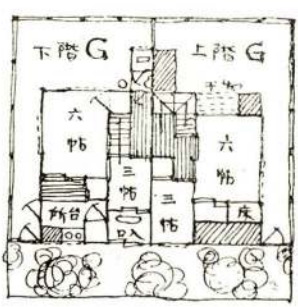


二　其









其三

其四

いとの事でしたから先以て其大さを建坪八九坪から十二三坪位全部二階建のものとして延坪十五坪から二十坪までのものを街路の日向の別に従ひ別紙圖面の如く稍相似たるものをAよりJまで十種類設計いたしましたそして建物の内容仕上の程度を四級としABCDを一級EFを二級GHを三級IJを四級のものといたしましてIJは四戸建長屋其他は全部二戸建のものと致しました。

大體の間取りは六疊三疊又は四疊半を重なる居室として之を一階にも二階にも取りまして大體ごの家も玄關の次ぎに階段室と便所への廊下とを取りまして一階二階の何處の室よりも他の室を廻らすに便所及各室へ交通し得る樣に按排しましたそして一級のものにはチョットした西洋間の樣なものを付け洗面所浴室等を付けました。

尙又會社の希望に據り餘り世間にありふれた貸長屋的のものでなく幾分目新らしき家にして貰ひたいと云ふ事でしたから道路に接しては從來の如き門塀等を一切造らず全部開放的にして前庭を造り樹木を植へ芝張に致しまして家の外觀は幾分西洋館らしきものに致して見ました併し家の裏の方は矢張り板塀を以て各戸を仕切り尙窓より見通しをさくる爲處々に樹木を植へました。

次下少々構造の點に就て申上げます之は果して改良か改惡かは勿論疑問でございます。

第一に考へましたのは一棟の家屋が二戸建又は四戸建でありますから其界壁が完全でないと兎角に隣りの話し聲が聞えたり夜光が見透いたりして非常に不愉快のものですから此界壁構造を全然改めて三寸五分丸太を三尺間に建込み之を土臺上より屋根裏までの通り柱として其兩面へ竹小舞を掻付け土壁を塗り付け空洞の太鼓壁に仕上ました之れで音響を遮り幾分準防火的の意味に致しました勿論室内の方へは其大壁の外へ所要々々の付柱を用ひましたから一見して普通の壁と異りませぬかくして所謂壁一重でなく二重壁になりまして大變工合がよい樣に思ひます。

次ぎには外觀を多少西洋館風にし大壁仕上に致しましたのは一つは柱が大體に片面ものでよいから建築費が安くなると二つには壁の「チリ」透きが

なくなり冬期保温に都合がよいと思ひましたからでございます且又可成建築費を低廉にする爲此大壁も手數のかゝらぬ樣に之迄の眞壁を其儘柱の外面へ持出したる工法を取りました大體柱眞より厚二寸五分程度の塗り上りとして外の方へ竹小舞の土壁を付けたのであります其結果室内の柱の「チリ」が大きくなり天井の廻緣や寄付敷居が少しく廣くなりましたが併し之は却て室内の面積を幾分でも廣く使ひ得る利便がありますし只少々工合ひの悪いのは間内の眞壁構造と隣り合せの處の柱や廻緣の「チリ」が同一に見廻りません爲一寸「ヘン」な感じが致しますが併し大した事でもありませぬ故安價建築としては此位の事は我慢が出來ると思ひます。

右の樣に外觀を大壁にしたる爲と便所の廊下を家の中央部に取りました結果や尙又費用をはぶく點等より從來の椽側は之を全廢して各室共全部窓ばかりに致しました之は前申上たいろいろの關係の外更に又表通りが開放的でありますから除り家内の見え透かぬ樣にしたいのと一つは外廻りの兩戸を全廢しました爲戸締りのいくらか便利になる樣にしたいのと今一つは之迄の日本家が除りに開放的で冬期暖房に不便なる事を幾分よくする爲とで御座います其窓は疊上から一尺二寸上げて内法四尺五寸のものと致しましたから採光や通風には何等の差支もない樣でございます併し室内の掃除をいたします時に塵の掃き出しに困りますから各室共其窓下に巾一尺二寸高七寸の掃き出し小窓を付けました之も勿論掃出に便する爲ではありますが又夫れのみでなく夏期幾分の通風を助けるのみならず冬期に各室を閉鎖したる場合に空氣の「インレット」になる積でございます之と同時に各室の換氣法を天井下の小壁に於て各室共廊下及階段室に面する部分に約八寸角の明放し「ランマ」小窓を造り之へ換氣せしめて階段室を登り其階段室の天井に小屋内への空氣拔穴を設け小屋内を通して軒下より屋外へ換氣せしむる事にいたしました

天井は在來の日本屋の羽重ね張は兎角其羽重ねがそり返りまして天井の塵も落ち易く且冬期に室内の暖氣を之より放散せしむる事が多い樣に思ひ

ますから此羽重ね張りをやめまして竿縁上に天井板を明き三分位に並べまして其上から押へ目板を以て張り付けました。

外壁に面する窓入口の建具は全部硝子戸に致しまして柱の建て付きには風透き止の棧木を打ちましたから冬期に於ては室内が從來の紙障子を用ひたる部屋よりも餘程暖かになりました。

其替り雨戸がございませぬから夜光を遮り又は日光の直射を防ぐ爲全部「カーテン」を付ける事にしまして引幕用の「カーテン」棒を建築の際取付け置き「カーテン」は居住者が各自任意のものを架張せらるる事にしました、爲に現在の居住者の内では已に「グリーン」などの仲々ハイカラな心地よき「カーテン」を用いて居らるる方もありまして大變に室内を引立せます。

外廻りには雨戸がございませんから降雨の際に吹き降りの雨が窓の敷居にぶつかり雨水の浸入する憂がありますから敷居の溝は全然之れ迄の構造を廢し畦溝共巾を七分とし深さを五分に決りまして建具は全部外「ククミ」に切込み溝底でなく樋端上を摺動する事に致しまして吹き掛けたる雨水は敷居の溝底を流れ處々に小穴を抜き之より外部へ流れ出る樣にいたしました。

建具の戸締りは全部内側より捻止めの締りとし建具は勿論上げ溝に致しまして表口裏口は隨時内外より錠前掛になる樣いたしました。

臺所には全部櫻「セメント」會社製の人造石洗流しを据付けまして竈は二タ口とし一つは普通の薪焚き用とし一つは鋸屑を燃燒する簡單にして經濟的なる試用に便しました。

大體前申しました樣なわけで普通の貸家建築よりは幾分改良した積りでございますが此上更に便所に少々改良を試み度思ひましたが到底建築費がゆるしませぬから止を得ず之は在來のまゝと致しました。

此建築では居住者が直に住ひ得らるる樣に疊建具一式は勿論のこと各押入内の中棚や臺所に器物を載せる棚までも建築と同時に拵へまして居住者は單に極一部の障子紙を張るのと窓の「カーテン」を吊ればよいのでございます。

夫れで之に要したる建築實費は一戸分最少金壹千八百圓より最大金參千圓でありました尙其附帶工事として道路、雨水溝、上水、下水、電燈、植樹等の設備一切を施しまして結局會社では社會奉仕の爲全部の施設實費のみを以て家賃を割出し最低一ヶ月一戸分金二十一圓五十錢より最高金三十三圓五十錢で貸して居ります。



「ペイント」の種類竝に應用に就て（上）

日本「ペイント」會社技師長　伊藤貞興

○

私は最近日本「ペイント」會社に入社しましたもので、葛野理事長から御紹介に相成た樣に、從來大阪高等工業學校に敎鞭を執り、又轉じて大阪工業試驗所長として職を奉じて居りましたもので茲に「ペイント」に就いて御話を致すのは、現在の位置の關係からでありますが、總じて我國に於ては一般に塗料に關する研究が十分でない事は遺憾に禁へぬ處であります。

塗料と申しても種々あります、一般に塗料と申せば塗る材料でありまして、或時間經ちますと乾くしこれを吾々專門家は「酸化」と申して居りますが―すると薄い膜が出來る、此の性質を利用しまして他の物體を保護することが出來る、木材でありますと其腐蝕を防くことが出來る、金屬である場合には銹の發生を妨げるといふ事になりますが又其酸化した膜の表面は一種の裝飾になりまして

應用の範圍が廣く、建築、船舶、橋梁、器械、器具等に利用せられて居ります。

扱て「塗料」と申す言葉は我國獨特の名詞で外國語には此塗料に適合する名詞がありません、英語では、「ペイント」及「ワニス」と二つの名に別けて呼んで居ります、「ペイント」とは不透明な材料を總稱し、「ワニス」は其透明なる塗料を呼んで居ります、「ワニス」は亦單に「ニス」と稱して居りますが、塗りたる後透明に出來上るものであります。只今は主に「ペイント」に就いて御話を致さうと考へて居ります。

「ペイント」は「ピグメント」則ち色素に主として植物性の油を混ぜ合したものであります、一般に申せば「ベヒクル」則ち展色料を加へたものでありまして自から三つに分れます、則ち油、水、及「エナメル」の三つであります、就中油製のものが最も需用が廣いのであります。普通此の油製の「ペイント」を單に「ペンキ」と申して居ります、從つて素人の方から「ペンキ」と「ペイント」とは什う異ふのだなどと質問を受けることがあります。

扱て「ペイント」の色は色素に依つて種々雜多であります、特別のものは顏料を練り合せます、大體純白のものは亞鉛華（亞鉛を燃燒して得たる白粉）或は白鉛（則ちオシロイの原料）を原料として製します、其外にも白の原料は色々あります、黑には煤を使ひます、又黃色には黃土を用ひます。

何れにしても顏料と油とを適當に混入し、夫れに乾燥性の油を加入します、何となれば油自身早く乾燥するの必要があるからであります。

水を「ベヒクル」とした水性「ペイント」は、顏料と膠又は「カゾエン」と申して牛乳より得たる材料を用ひて製します、之れを水に溶きまして使用します、又水に溶解した儘を用ふるものもありますが、これは防水力劣しき故、主として室內の塗料として用ひられて居ります、英語ではこれを「デステンパー」といふて居ります、製造する會社で名稱が異つて居ります。

Calsomine（カルソミン）
Alabastine（アラバスチン）
Melonia （メロニア）——これは日本「ペイン

ト」會社で販賣して居るものであります。

總じて水性「ペイント」は乾燥致しまするとも光澤がありません、乍併室内裝飾用としては少しも差支へはないのであります、「メロニヤ」は三越の舊館に御使用なりましたが、普通「ペイント」の下塗としては少しも差支ない樣であります。

「エナメル」は顏料と「ニス」とを混合して用ひます、光澤があり美麗でありますので、自動車馬車其他金屬性の物品に使用されます、「ニス」を用ひるので高價であり、故に室外には用ひられません。室内でも浴室か臺所等に用ひられるに過ぎません、光澤が必要な場合は之を磨いで「ツヤ」を付けます、「エナメル」にも種類がありますが時間がありませんから詳しい御話は止めます。

其外特種の「ペイント」としては防火塗料とか特許になつて居る「モテキ」ペンキ等があります。

斯く「ペイント」には三種の別がありますが一番需用の多いのは油「ペイント」であります、油「ペイント」にも堅練り（Paste Paint）と調合練り（Ready Made）との二種があります、顏料丈のものと油狀のものとある。

容器は普通二八听入でありますが、英國製のものは Hundred Weight の四分の一であります、五六听入のものもありますが、實用上には大き過ぎる嫌があります、堅練のものは「ボイル」油又は「テレビン」油に「ドライヤ」を加へて調合するのでありますから、誰でも出來るし、從つて隨分惡い事も出來ます。

調合練りのものは出來合品ですから溶解油や乾燥劑を加へてあるので其儘使用することが出來ます。

普通十听入「ブリキ」罐を使用して居りますが海陸軍に納めるものは五キロ入り指定品であつて調合練のものを御用命になります。

實際御使用になるものは出來合品（レディーメード）の方がよろし殊に家庭用に便利であります、我日我國ではあまり行はれて居りませんけれども、米國にては盛んに一般に行はれて居ります、我國でも今一步進みて出來合品を使用すれば大いによろしいと思ひます、吾々も亦大いに望む所であります。

「ペイント」は如何なる色でも出來まする、同じ様な色でも調合によつて各種類も出來ます。

一番上等の「ペンキ」は油も上等、顔料も上等のものを用ひて居ります、二等以下のものは材料も凡て落ちますから價は低廉となります、總じて「ペイント」は惡いものより良いものを鑑定するのに骨が折れます。

今其識別について述べますれば、第一色合でありますが、これは純良なものをよしとします、第二に分子でありますが、細粉のもの程よろしい、第三には被覆力(Covering power)の大きいもの程よろしい。第四は耐久度の大きいもの程がよい。

殊に被覆力が一番大切であります。被覆力の大きいといふのは一定の目方のものを成るべく廣い面積へ塗ればよろしいのであります。つまり上等のペイントは此等の性質を具備して居るものならば高價のもの程良ろしく且德用であります。

扨て實際の上について述べますれば、製造會社と塗工業者とは別業となつて居るので甚だ困るのであります、塗工業者は利益を擧げる事に骨を折るの結果良い品物を使用する事を避けまするから良い品物を選擇すると同時に良い塗工業者を選擇することが大切であります。（つづく）

再び酒造を制限す

萬治元月十一月二十八日幕府命じて江戸、京都、大阪、奈良、堺、其外諸國の酒造半額たるべきを嚴命せり。



大阪都市の生態現象

K・E

社會として觀たる——であるか、乃至は、市場に**都市は一個の生體**——己のがジシ財布の口を握つて聚まつたような、人の群れに過ぎないであらうか。若も單なる人の群れであるならば『都市』てふ觀念は、——社會てふ觀念は——、所詮『群衆』なる觀念と異字同義であらねばならぬ。即ち『群衆』は『社會』なり、といふ理屈になる。されば、群衆には、縱むば多少な共同目的があるにせよ、節次がない、秩序がない。そして、比較的恒久性がない而も、その一團を抽象したる何の觀念もない。況して、共通な何ものをも有たない群象現象に於ては、一段と亦意義の無いことである。されば『都市』なる一社會は『群衆』其ものでないだけは明確な事であらう。そして、都市は、縱し國法上の何であらうとも、それは都市團體の性能を說明し盡したものではない。或は都市を地域的に觀て、又は之を經濟的にのみ稽へて、都市團體を說明することは、所詮、都市を群衆だと謂ふのと、云葉を換へたまでのことである。即ち、兩者とも、謂はゞ都市を可視物に解して、其雜多な現象を說明するだけなことで、實は、可視でなく思念すべき共同の目的と作用、即ち都市の生命其ものを忘れてゐ

るからである。即ち生命なきものは、只存在あるのみにして、生活はない、作用もない。何にしても都市は、社會としての一個の生體であらねばならぬ。

スペンサアの『社會有機論』をげなしても——其眞理の幾部は確實な權威を有つてゐる。果して、其凡てが權威でなくとも、スペンサア自身が、ホップスプラトンの社會有機說の誤謬を指摘しながら『をぼろけ乍らも、眞理を物語つてゐる』と云つたように、スペンサア自身の、社會有機說を、わたくしは、モ一つ確威と明確を有つた意味に於て、是認する。されば、スペンサアの、社會有機觀とは什麼ものか、先づ、左に摘記してみよう。

A 有機體と社會組織は、孰も、其源始は、極めて微細な一つの集合體であつて、それが漸次に擴つて、竟に其大なるものに到つては源始のものに比して十數萬倍なる膨大なものになることもある。

B 兩者ともに、其初期に於ては頗る單純な組織體であるが、其發達を遂ぐるに從ひ、漸次に絕へず複雜となる。

C 其初めに方りて、それ等を組織せる分子相互の間には、絕對に從屬關係なかりしも、次第に其從屬關係を生に來つて、それ等分子の生存と活動は、竟に、他の分子の生存と活動に俟つてのみ初めて可能となるように、相互關係を有するに到る。

D 社會其ものゝ生命は、其社會組織の分子たる各個人の生命とは全く別個の存在を有し、各個人よりも遙かに長命である。個人其ものは、始終死と生とによつて新陳代謝を爲してゐるが、それ等によりて組織されてゐる社會其ものは、斯る裡に在りて、恰度、一個體と其組成分子たる細胞の關係の如く、分子の代謝に拘はらず、分量の增加、組織の複雜、絕へざる機能活動の增大等によりて、增々發展する。

社會生活躰を認——都市社會體が、斯樣に、果して**四箇の理由**——してわたくし共人間と等しく有機體であるか否なかは、必ずしもスペンサア

の件の理論が唯一な信條でない許りでなく、スペンサア自身も、社會を有機視すると同時に、有機體と異つてゐる例證として更らに四箇のものを擧げてゐるが、其孰れが最も類似點と論據が多いかと云へば、やはり、有機説の方がそれである。殊に、スペンサアが有機體と社會の一致せざる理由として擧げたる四つのものは、前の類似點として擧げたものよりも、遙かに論據が薄弱である、とわたくしは想ふ。事の序でに、ざつと、それを擧げてみると、第一『社會其ものには有機體の如く特殊な外形がない』と云つてゐる。奈何にも、社會といふものを、わたくし共肉體其ものを指して人間である、といふ論法で行かば、尤もな事ではあるが、わたくし共人間は肉體其ものが人間ではない。それは、人間を徴象したものに過ぎないので、一言にして云はば、自我の意識其ものが人間であると同時に、他人から觀れば、其意識の動作杯から抽象して觀たものが人間其ものである。要するに、見るべきでなくして、感識すべきものである。肉體が人間即ち外形なきものは人間でない、といふのは、凡てを唯物的に見たもの、而も哲學上の唯物でなくして、單に眼の壺を通して感識されないものは虚無である、といふ風の唯物的な考へからである。人間——人格といふものは、そんなものではない。故に、社會體其ものも、特殊な外形が無いとても、有機的社會は、其社會的思想や感情抔の動作によつて識られる社會生命其ものが、有機的實在で、之を徴象したのは、都市の如き都市民の共合的生活其ものに見られる。そして、其共合生活には、個人の生活よりは異つた外形即特殊な外形を有つてゐるとは、個人生活と集合生活——共同生活——自體が既にそれである第二に『個體を構成する有機組織は連續せる一體を成してゐるも、社會有機的要素は各所に散在してゐる』と云ふてゐるが、是は前に述べたように、人間抔の有機體を、何處迄も肉體其ものと解するらで、有機體とは、我等の具へてゐる處の機官自體でなくして、生命即自我の意識より作用する機能を指すのが妥當であるから、何も、連續した一體を成さないとて、必ずしも有機的社會な

るものを否定する譯には往ない。況して、社會其ものは、社會を組織する人自體が個別的に散在しあつても、彼等の生活と生活を繋ぎ、彼等の目的と目的を統一する處の共同の意思又は共同の目的なるものがあるから、意識上、連續せる一體を成すものと觀て差支へなく、何も、幷う、形態なくむばあらず、といふ理由がない。更らに、第三には『個體の組成分子は、多くは其定まつた位置に停着してゐるが、社會組織の分子は、絶へず一方から他方へ移轉する』といふ理由を以て有機體否認の一とつとしてゐる。併し、わたくし共の個體を組織してゐる細胞とても、細胞其ものの組織にすら我陳代謝がある。即ち絶へざる移動がある。人間の場合は、甲から乙へ移るといふ譯でなくして、只其一細胞組織の中に、謂はゞ立體的移動が行はれ、社會の場合は、平面的移動が行はるゝに過ぎない。そして必ずしも、個人のそれが立體的だから、社會のそれも爾かなければ、有機體でないといふ理由は論據があるまいと想ふ。終りに、第四の差異而も最も重要な差異として『個體組織に於ては或特殊な分子のみが感情を有してゐるに反し、社會に於ては凡ての分子が皆感情を具備してある』ことを擧げてゐる。けれども、個體の無感情な部分は、生理上、感情を要せないからだ。即ち、爪の如き毛髮の如き、或は、四肢々單に部分として觀た場合抔、皆な無感情である。併し、人間の組織機能に於ける感情は、種々な部分に覺知し表現しても、實は、中樞感情一つあるのみで畢竟それが分布的に表現するに外ならない。社會を單に個人の寄り集り生活と觀れば、個人の個々な感情が問題であらう、けれども、有機的社會を觀ることはそれ等に抽象した一個の有機的實在と觀るのであるから、個々人の異つた感情其ものは問題でなく、其抽象されたる社會的感情、即ち一個の中樞あるのみであるから、件の相異は、決して、有機的社會を否定する強き理由とはなるまい。要するに、斯る四箇の相違點を擧げても、どちらかと云はゞ前に擧げた類似點の方が重要さを有するようであるから、先づ、わたくしは、社會殊に都市なる社會の生活體であることを信ずる。

實際の問題から觀——都市の有機的生活體たること**た『都市』の生活**——との理論は、尙はも他の種々な方面から立論し得られるが、理屈は、先づ斯の位ひにして措いて、わたくしは、都市を社會的一個の生活體と觀たる上より、我大阪都市其ものゝ生態現象ともいふべきものを考へてみたい。維れ、飜て、大阪都市自體の、生理的——或は精神的にも——進化と其健康奈何を識るのよすがとなるであらう。そして、何よりも著い事は、大阪都市を、現に見るが儘の狀態に於て、先づ、都市を形成する市民が增々殖へるといふ事は、縱し、都市を生活體と看なくとも、事實は、大阪都市なるものが、それだけ、其組織分子としての要素を、質と數に於て增加する事になる。そして、現に在るが儘の大阪都市に於ても、殆むど、一セコンド毎に、都市民の轉入、轉出、死亡、出生抔が、事實を新にして繰り返へされつゝあるが、大阪都市其ものは、縱むば歷史にのみ其存在を留めてゐる古昔の諸都市と同樣に滅亡の時は來るとも、兎も角、其新陳代謝を繰り返す都市民其ものよりは、恒久な存在を有する。そして、單に輸入超過のみを續げてゐる時は、飜て經濟的に衰滅を來す樣に、都市民の死亡又は轉出超過が、事實、其都市の衰頽となるとは、都市は生活體であらうと、あるまいと、其處に現象を二三にする譯なものでない。更らに、都市民の結婚の如きも、それだけ其都市の形成分子を殖增する可能的單位が新に出來た譯にも成り、或は、それより因果的に、種々な現象を產むの單位ともなる。されば、都市民の產する種々な現象が、飜て、其都市自體に影響を及ぼすことは、恐らく、何人も否定し得まい、と想ふ。若しも、都市を一個の生活體と觀ることが出來得るならば、之等の事實は、一段と意義を深められることゝなる。わたくしは、是より、我大阪都市に於ける諸多の事象を掲げ、讀者が、大阪都市に就いて、何ものかを獲むとする資料に供しよう、そして、此處に斷つて置き度い事は、以下掲ぐる處の資料は、大正十年一月より六月に到る上半期間に於ける現象である。素より、是を以て大阪都市の生態現象を盡したのではないが、少くとも最

近に於ける生態現象の大勢を識り得ようと想ふ。そして此處に揭ぐる材料を奈何に取捨し、奈何に利用し、そして、奈何に歸納するかは、勿論、讀者の自由である。

動態から觀たる大阪都市の現狀——先づ、大阪都市の膨脹主因たる人口の增殖中、出產の事實より觀るに、前記上半期に於て、實に、一萬八千二百六十人を算じてゐる。そして之を性別に觀ると、男九千四百二十二、女八千八百三十八、即ち男一に對して、女〇、九三餘といふ比例となつて略ぼ同數な出產となつてゐる。大正九年の國勢調査以來、我大阪市の人口には、勿論增減を來してゐるであらうが、それにしても、爾來約一箇年に於ける異動は、大勢上顯著な差異を來したとも想はれないから、先づ、斯の國勢調査上に現はれた大阪市人口を基礎として、件の出產對人口比を觀れば、六十八人餘毎に、一人の出產を見る勘定になる。そして、更らに、之を對世帶比に觀れば、國勢調査上に現はれたる大阪市世帶數二十七萬六千三百三十一を基礎として、十五世帶毎に一人の出產と成る。其他、出產なる事象を種々な方面に援用し得られるが、左に其詳細な數字を揭げて、參照に供しよう。

大阪市現住者ノ出生　其一（大正十年一月中）

		生產			死產		
		公生	私生	計	嫡出子	庶子	私生子	計
西區	男	五〇	公	六三	六	一	三	一〇
	女	五五	八	六三	三	一	一	五
	計	一、〇五	一六	一二六	九	二	四	一五
南區	男	五一四	二四	六三八	二一	一	三	三五
	女	四九一	二二	六三三	一六	一	三	三六
	計	一、〇〇五	二六五	一、二七〇	三七	二	六	四五
東區	男	三六七	二六	三九三	三〇	一	三	三四
	女	三三三	二九五	三六八	三五	一	八	四四
	計	七〇〇	五五五	七六一	六五	二	一一	七八
北區	男	四八〇	四〇	五二〇	二五	一	三	二九
	女	四四六	三七	四八三	二八	一	三	三〇
	計	九二六	一、〇七七	一、〇〇三	四三	二	六	五九
計	男	一、八二一	二九六	二、一一七	九二	四	一四	一〇〇
	女	一、七六六	二三四	二、〇九〇	七二	二	一四	八八
	計	三、五七七	五三〇	四、二〇七	一六五	六	二八	一八八

其二（大正十年二月中）

		生產			死產		
		公生	私生	計	嫡出子	庶子	私生子	計
西區	男	五六	七	六二	三〇	一	四	三五
	女	五四	六	六〇	一四	一	九	二四
	計	一一〇	一三	一二三	四四	二	一三	五九
南區	男	五四四	二一	六六五	二一	一	三	二五
	女	五一二	二一	六三三	一六	一	三	二〇
	計	一、〇五六	四二	一、二九八	三七	二	六	四五
東區	男	三六四	二六	三九〇	二五	一	三	二九
	女	三三三	二九	三六二	二八	一	三	三二
	計	六九七	五五	七五二	五三	二	六	六一
北區	男	四八〇	四〇	五二〇	二五	一	三	二九
	女	四四六	三七	四八三	二八	一	三	三〇
	計	九二六	一、〇七七	一、〇〇三	四三	二	六	五九
計	男	一、八二一	二九六	二、一一七	九二	四	一四	一〇〇
	女	一、七六六	二三四	二、〇九〇	七二	二	一四	八八
	計	三、五七七	五三〇	四、二〇七	一六五	六	二八	一八八

區別	南區			東區			北區			計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
生產 公生子	四三	四〇	八三	二四六	二二一	四六七	四二五	四一六	八四一	一、〇五四	一、〇〇三	二、〇五七
生產 私生子	九	一〇	一九	六〇	五六	一一六	六一	六九	一三〇	一五五	一五八	三一三
生產 計	五二	五〇	一〇二	三〇六	二七七	五八三	四八六	四八五	九七一	一、二〇九	一、一五八	二、三六七
死產 嫡出子	二	三	五	一四	一三	二七	一六	一四	三〇	三五	三一	六六
死產 庶子	一	一	二	一	一	二	一	一	二	三	三	六
死產 私生子	一	一	二	一	一	二	一	一	二	三	三	六
死產 計	三	三	六	一六	一五	三一	一八	一六	三四	四一	三七	七八

其三（大正十年三月中）

區別	西區			南區			東區			北區		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
生產 公生子	五八	四九	一〇七	四七	四五	九二	二六〇	二五六	五一六	四二	四〇	八二
生產 私生子	六四	五三	一一七	八三	七一	一五四	三一	二六	五七	一八	一五	三三
生產 計	一二二	一〇二	二二四	一三〇	一一六	二四六	二九一	二八二	五七三	六〇	五五	一一五
死產 嫡出子	五	七	一二	二	三	五	一〇	一〇	二〇	一	一	二
死產 庶子	一	一	二	一	一	二	一	一	二	一	一	二
死產 私生子	一	一	二	一	一	二	一	一	二	一	一	二
死產 計	七	九	一六	四	五	九	一二	一二	二四	三	三	六

其四（大正十年四月中）

區別	計			北區			東區			南區			西區			計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
生產 公生子	一、〇六二	一、〇五六	二、一一八	四二三	四一三	八三六	二五〇	二四九	四九九	三四六	三二四	六七〇	三四	三二	六六	一、〇五六	一、〇五六	二、一一二
生產 私生子	一、一八七	一、一七〇	二、三五七	四五四	四五	九九	一〇七	一〇七	二一四	一二八	一二三	二五一	三九	三九	七八	一、一七〇	一、一七〇	二、三四〇
生產 計	二、二四九	二、二二六	四、四七五	八七九	八五八	一、七三七	三五七	三五六	七一三	四六一	四四七	九〇八	七三	七一	一四四	二、二二六	二、二二六	四、四五二
死產 嫡出子	七五	六二	一三七	二三	一四	三七	三八	三〇	六八	一〇六	一〇一	二〇七	一	一	二	六二	六二	一二四
死產 庶子	一	一	二	一	一	二	一	一	二	一	一	二	一	一	二	一	一	二
死產 私生子	四五	四〇	八五	一〇	一三	二三	一四	一五	二九	一三	一三	二六	一	一	二	四〇	四〇	八〇
死產 計	一二一	一〇三	二二四	三四	二八	六二	五三	四六	九九	一二〇	一一五	二三五	二	二	四	一〇三	一〇三	二〇六

其五（大正十年五月中）

區別	計			北區			東區			南區			西區			計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
生產 公生子	一、〇八四	一、〇三〇	二、一一四	四三〇	四〇〇	八三〇	二五〇	二四〇	四九〇	三四〇	三二〇	六六〇	三四	三〇	六四	一、〇三〇	一、〇三〇	二、〇六〇
生產 私生子	一、一八〇	一、一五四	二、三三四	四五九	四三七	九〇一	一〇七	一〇二	二〇九	一二六	一二三	二四九	三九	三九	七八	一、一五四	一、一五四	二、三〇八
生產 計	二、二六四	二、一八四	四、四四八	八九〇	八三七	一、七二七	三五七	三四二	六九九	四六六	四五三	九一九	七三	六九	一四二	二、一八四	二、一八四	四、三六八
死產 嫡出子	七二	六二	一三四	二四	一四	三八	三〇	三〇	六〇	一〇六	一〇一	二〇七	一	一	二	六二	六二	一二四
死產 庶子	一	一	二	一	一	二	一	一	二	一	一	二	一	一	二	一	一	二
死產 私生子	四五	四〇	八五	一〇	一三	二三	一四	一五	二九	一三	一三	二六	一	一	二	四〇	四〇	八〇
死產 計	一一八	一〇三	二二一	三四	二八	六二	五三	四六	九九	一二〇	一一五	二三五	二	二	四	一〇三	一〇三	二〇六

		南區			東區			北區			計		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
其六（大正十年六月中）	生産 公生	二九七	二六五	五六二	一六四	一三〇	二九四	六二	六〇	一二二	二七七	二五五	五三二
	生産 私生	一三〇	一二四	二五四	一四六	一四〇	二八六	六四	六二	一二六	三四〇	三二六	六六六
	生産 計	四二七	三九〇	八一七	二一〇	二七〇	四八〇	一二八	一二二	二五〇	六一七	五八一	一一九八
	死産 嫡出子	一一	七	一八	七	七	一四	一	一	二	一九	一五	三四
	死産 庶子												
	死産 私生子	三	一	四	三	一	四	一		一	七	二	九
	死産 計	四	一	五	一〇	八	一八	二	一	三	二六	一七	四三

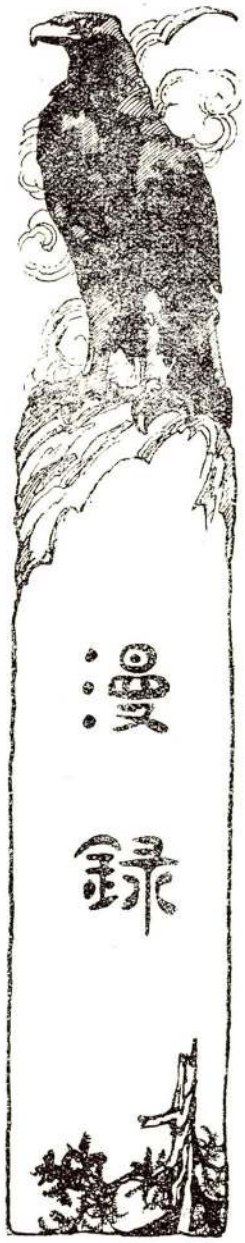
次いで、都市衰退の一素因たる都市民死亡率の如何を觀るに、同期間に於て、現住者の死亡は、一萬三千八百三十二人を算じ、之を前記出産數と比較せば、四千四百二十八人の出産超過となる。即ち、質に於て奈何にあるかは別として、數に於ては、實に、一箇年約一萬人近い出産比率に於て我大阪都市の純然たる膨脹素因となつてゐる。そして、性別に觀れば、男七千二百七人に對して、女六千六百二十五人の死亡數を示してゐる。即ち男に於て五百八十二人の死亡超過となつてゐること、前記出産に於て男五百八十四人の超過を示してゐるのと、現象を異にして、數を殆むど等ふしてゐる。蓋し、其處に面白き或るものを看出し得るであらう。次いで、年齡別に於ける死亡數に現れば、茲に驚くべき事實は、死亡者全數中、五歳未滿の者が最多數を占むる事實である。即ち、死亡者全數一萬三千八百三十一人中、五歳未滿の死亡者實に其四割七歩六厘弱約五割にして、六千二百七十六人を占めてゐる。次いで、更らに、聊か寒心に禁へざることは、最も生産力に富み、又都

市元氣の中堅ともなるべき二十歳以上三十歳又は四十歳までの者に、死亡率の高き事である。即ち死亡率に於て第二位に當る者は、二十一歳以上二十五歳迄の者六百七十六人、三十歳迄の者五百十人、三十五歳迄の者四百四十五人、四十歳迄の者四百三十四人にして、之を通計すると、死亡全數の一割五歩二厘弱即ち十五%を占めてゐる。斯の事實は確に、我大阪都市の非衛生的事實を雄辯に語るものにして、所謂都市計畫なるものを、小さい黨派的根性から、又個人的憎惡から、乃至は、寸前の打算から、けちを付ける事の、奈何に自家頭上の問題であるかを識るに足りよう。左に其詳細表を掲ぐる事とする

現住死亡者年齡別（大正拾年自壹月至同年六月）

	本籍現住者										非本籍者										合計									
	未婚者		配偶者ノ生存スル者		配偶者ニ死別シタル獨身者		離婚セシ獨身者		配偶關係不詳者		計			未婚者		配偶者ノ生存スル者		配偶者ニ死別シタル獨身者		離婚セシ獨身者		配偶關係不詳者		計			未婚者		配偶者ノ生存スル者	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計	男	女	男	女
五歳迄	一、六六八	一、五三三	—	—	—	—	—	—	—	—	三、二〇一	一、六五二	三、八五三	八七	六八	—	—	—	—	—	—	—	—	一五五	一三五	二九〇	一、七五五	一、六〇一	—	—
十歳迄	八	九四	—	—	—	—	—	—	—	—	一〇二	九四	一九六	六	七六	—	—	—	—	—	—	—	—	一四	一五五	二九	一一七	一七〇	—	—
十五歳迄	二〇	一〇五	—	—	—	—	—	—	—	—	一二五	一〇五	二三〇	四八	八一	—	—	—	—	—	—	—	—	六八	一八六	二五四	一六八	一八六	—	—
二十歳迄	一三八	一四七	一	八	—	—	—	—	—	—	一四四	一五五	二九九	一五八	一五一	三	一〇	—	—	—	—	—	—	一六七	二五七	三〇六	一五九	一五三	三	一〇
二十五歳迄	一二七	七六	四	五五	一	一	—	—	—	—	一三三	一三四	二六七	一〇〇	二九	四	一九	—	—	—	—	—	—	一〇四	一三三	二三七	一〇一	一〇五	四	二八
三十歳迄	五七	三三	六	四	五	一	—	—	—	—	八四	三六	一二〇	三三	一六	三〇	二六	—	—	—	—	—	—	三三	五二	八五	三六	四二	三〇	二六
三十五歳迄	三四	二八	四一	七八	四	六	二	二	—	—	八一	一四	一九五	二一	二五	四一	七八	四	六	二	二	—	—	六三	三九	一〇五	二七	三三	四五	八四
四十歳迄	二九	一八	七四	八四	七	八	二	七	—	—	一一三	一一七	二三九	一〇五	一〇〇	七四	八四	七	八	二	七	—	—	一七七	一八五	三六二	一三四	一一八	七八	九一
四十五歳迄	一九	一九	七九	八一	一四	一二	四	三	—	—	二二六	二一四	四四〇	一二七	一三二	七九	八一	一四	一二	四	三	—	—	二四四	二三三	四七四	一五四	一四五	九三	九三

| | | |



印度洋より

會員　工學士　置鹽章

○新嘉坡より彼南へ

七月二日午前七時、船は彼南へ向つて出帆した西の方群小の島嶼を縫ふて進む、右手の丘陵の上には點々として白堊の住宅が散見する、濃厚な南國の背景に浮き上る一幅の畫帖を觀る樣な感じである、船渠には先頃衝突したといふ横濱丸と印度丸とが御互に傷か淺うて仕合せですといふ樣な姿で入渠して居る。

左手には水上家屋の一集團が整列してゐる、船員の話によると茲に約二千人からの土人が棲んで居るさうな、水中に長い杭を打ち込んでその上に粗末な小屋を架け並べて押すな押すなといはぬ許りに群つて居る、大風一度起れば忽ちに吹き飛ばされるだろうと餘計な心配迄して居る間に水道を通過する。

茲は俗に新嘉坡の松島とやら、綠樹鬱蒼たる小島が點々として應接する、水際に近く黄褐色の美

しい岩が蟠まつて居る佳い景色である、船は漸く進んで右手に馬來半島の群山淡く横はる頃は、波いかにも靜かに明晩彼南に到着する迄氣樂な航海を續けるに過ぎない、此夜甲板に寢てゐると、急に驟雨が襲ふて來た、やがて雷鳴迄伴ふた、誠に意外千萬一同頗る恐縮する、だがマラツカ海峽の常夏の海上に不計も鳴神の御見舞を受けたのは如何にも詩的情緒をそゝり立つて私は甲板を去らずに電の行方を眺めた、ゴロ〳〵と鳴る音は故國の夫と變りはないが、音と音との連絡が斷片的で物足りない、これは洋上の雷の特色かもしれないが藝術化するには惜むらくは餘韻が乏しい。

翌日午後彼南近しの聲に甲板に出づれば、右手は近く椰子の林の立續く海岸に沿ひ、左手には折々波上大魚の踊るを觀る、午後三時半船は彼南港に入る、美しい彼南の市街を眺めつゝ阜頭近く投錨した。

○彼　南

七月四日午後四時、旅券の檢査を終へて上陸、早朝出帆との事、此處時間を最も有効に利用しなければならない、早速自動車を雇ふて例の如く市街見物を初める、道路の完全にペーブせられたる郊外にも及び安樂にドライブされるのはいつもながらうれしい。途上彩色横筋入りの二人乘俥を見る、注意して視ると大阪製である、MADE IN JAPAN も此處迄輸出せられるかと思ふと心強い譯である。尤も上海香港新嘉坡等何れも日本品の市場であるが注意しないとうつかり逆輸入をやる事がある。

車は郊外に出でゝ植物園に入る。

茲の植物園は新嘉坡のよりは小さく草花等も余り見えない。熱帶植物が自由に繁茂して居る。樹上や芝生に熱帶の猿猴が人を恐れず遊んで居るなど一寸日本では觀られない光景である、今一つ珍しかつたのは十間位の瀧が在つた、夕暮時蛩々の音を聞いて凉風の面を吹くとき一寸冷寂を感じた、時間がないので直ちに極樂寺に向ふ。

極樂寺は山の中腹に在る、自動車を山麓に乘捨てゝ壹丁餘の石段を登る路傍各所に乞食が帽子を

出して金を乞ふ、何れの國にても名所古蹟には附物と見える、中途からして頼みもせぬのに小僧が先に立つて一々説明する、中々よく英語を話す寺の門を入ろうとすると黒顔白毛の爺さんが突然やつて來て一行を一人々々團扇で煽ぐ、變な格好をしてフワリ〳〵となまぬるい風を送る、何となく氣味が悪い。それでも相當の勞力を供給して金を得やうとする處が可愛い。

案内の小僧に引廻されて複雑な伽藍を見物する龜の池がある、大阪の天王寺の夫の樣に食物を投げると爭て之を喰ふ、金魚池もある。本寺院の最高所に廻階段で登れる、眼下は椰子の林遙かに彼南港を望む蓋し絶景である。寺の建築は明瞭の粗末なもの佛像なども大小種々あれども何れも劣等の作であつた。奈良三月堂の傑作を想ふてそゝろに故國の藝術を偲ぶ。

門を出づれば例の爺やん來つてフワリ〳〵と煽ぐので銅貨を與へて呉れた。歸路は亦自動車上の人となり市中を見物して六時半阜頭に歸る、土人をなして來る、見ると大鰐を曳いてゐる、青味を帶びた其甲羅を物凄いと思つた、大分傷を負ふて居るらしい。土地柄の出來事の一である。サンバンを雇ふて本船に歸る。

○夜の街

夕食後亦上陸する、夜の市街を觀るべく、I君とY君と一所である、今宵は非常に暑いので汗がダク〳〵流れ出る、夜の支那人町、土人町は中々賑かで却つて商業の中心地は寂漠である、路に迷ふて佇む折柄浴衣姿の日本婦人を目付けて路を聞き電車に乘つて阜頭に歸る。

最後のランチが將に出やうとする時、K氏M君其他N君とO君とが人力車で驅け付けて來た、大急ぎでランチに飛乘る。すると後から巡査と車夫が追ひかけて來て車賃を二人分拂へと吐鳴る、K君は四人分既に拂つたと答へたが相方言葉が不充分だつから事面倒となつて來た、丁度一外人の馬來語を話す人が居て通譯して呉れた、K君は既に癪に觸つて居る處だから大に昂憤する、得意の英語も咽喉につかてい出て來ない。

『バット、バット、ウー、バットヽヽヽ』

然しながら漸く通譯の骨折で四人分の車賃を二人の奴が持つて逃げたから後の二人分を出せと巡査を介して交渉するので事柄が漸く判明した。

N君もさすがに默つて居れず、時々横合から相の手を入れたが、そう長くは續かない。

『エー面倒苦せ—ヤツチマエ!!!』

惡國ナマリの大聲で吐鳴つて二人分を叩き付ける此時ランチが動き出す、一人の車夫が何とかいふて居る、又他の奴にせしめられたらしい、だがもう駄目だ。君叫んで曰く

"I paia twice! Good bye!"

これで漸く鳥が付いた譯だが、大の男二人掛で、遂に大枚七拾錢を損したのであつた。

○マラツカ海峽を越えて

七月四日午前六時コロンボに向つて出帆する、五日にはスマトラ島の北端を左舷に見る、富士山の樣な美しい形のゴルドン山が高く雲の帶を纏ふて聳えて居る、サバン島を過ぎて愈々印度洋上ベンガル灣の沖邊に差し掛つたのである。

西南の風強く、波は漸く高まり來る、やがて名にし負ふ猛烈なモンスーンの御見舞を受けねばならないのである、食堂はボツ〳〵落伍者が出來、大變寂しくなつた、夫れは食堂ばかりではない、

私の日課は例の如く讀書と晝寢とゴルフとである、時々トランプ、將棋、輪投をやるが、此頃は考へる處あつてS君を敎官として、スウエーデン式體操を始めた、船中の運動としては誠に適切な試であるが、荒れ狂ふて來た波浪は甲板を越す樣になつて來たので、吾々の唯一の運動も中止の止むなき事屢々であつた。

彼南を出でゝ六日目の朝、セイロン島の南端を廻つてコロンボ沖に近づくに從つて波は稍靜まつて來た、丁度喫煙室に休んで居るとき

『鯨だ! 鯨だ!』

と叫ぶ聲が聞える、急いで甲板に出て見ると約三十呎位の鯨が右舷約一丁の處に高く潮を吹き上げて居る、一同物珍らしさに歡聲を擧げる、此航海中初めての見參であるからだ、鯨は船と殆んど同

じ速度で波間に浮きつ沈みつ追ふて來たが、いつしか姿を沒してしまつた、一同火事を見た跡の樣に暫しは鯨が話題に上る、單調な航海生活には何よりの慰安である、こんな出來事は確かに單調を破る些細のバラエテーで頗る面白く感ずる。島が見えたといふては喜び、燈臺の光が見えたといふては集まつて來る、單調に對する變化といふ事は建築の意匠の上にも考へられて居る、此のバラエテーの偉大なる効果は確かに一つの眞理であるとをつく〳〵思ふたのであつた。

波と雲との間にコロンボの市街が現れた、近づくに從つて低い丘の上の高い建物の立列ぶ有樣が手に執る樣に延べられた、有名な防波堤に逆卷く怒濤が打突て高い白煙を擧げて居る、誠に雄大な景色で壯觀を極めて居る、此怒濤の間を三角帆の小舟が殆んど轉覆せんばかりに搖り揉まれつゝ土人の巧みなる操縱に走つて居るのであつた。

船は漸く港内に進んで九時半無事投錨した。

○古倫母の田舍道

七月九日午前拾時、旅券の檢査を終へて上陸しトーマス、クック社の自動車を雇ふてカンデーに向ふ。カンデー迄七十二哩の行程、今宵九時迄に往復しやうとするのである。大分急がしい事だ。

市街の道路は極めて平坦、中心街はさすがに立派である、が、土人町は矢張り汚なくて小さい、鳥が群がつて路上に集まつてゐるのが目につく。ビクトリヤ橋を渡つて郊外に出つれば田舍の往還でペーブーントがない爲に砂煙を擧げる。だが平坦であるが爲にドライブするには誠に心地がよい。

沿道一面の椰子の林、田畑遠く開け、土人の子童が水牛と伍して泳いでゐるセイロンの田舍の景色は頗る物靜かである。運轉手田を指してライスフイールドだと敎へる、成程稻も植えられてあるが成育はあまりよくない。土人の小屋の散在する邊には一面の野菜畑、所々に五尺位の蟻塔が立つて居る、途上一村落を過ぎる、軒並の商店は相等に完備して清潔なマーケットに肉類、野菜、菓物等が並べられてあつた。

往還には時に鋪裝工事を施して居る處があつたター或はマカダムを用ひて居た、此田舍道にスチームローラー二臺の姿もあつた、珍らしや象の姿！土人の子童を載せたる、小川に脚を洗へる、椰子の林間に數頭憩へるなど忘れ兼ねる景色であ

る、土人は頭上に荷物を載く、草花の籠を頂く女を　て舊都洛北の美しい大原女を聯想してそゞろに學生時代を追懐したが、錫蘭の女はあまりに原始的で詩的情緒を繰る程でもなかつた。

事は少しく尾籠に屬するが土人の腰卷が目に付く子供迄も多く用ゐて居る、丁度日本の越中褌と似て居る、由來越中褌は松平越中守の發明と聞いて居るが我大和民族の祖先は數千年の昔に於て、既に既に此原始的發明品を使用して居たのではあるまいか、越中褌は亦常夏の國よりの輸入品ではなかつたかと私かに考へたのである。

○カンデイ行

我自動車は山を越え谷を渡り或は町を貫き又河を渡つて植物園に入る。

綠樹鬱蒼として繁茂してゐる植物園は可なり大きい、竹の偉大なるもの、椰子の並樹、草花の强い色彩、いつもながら一行の目を樂しませる、園を出づれば右にゴルフ場あり、やがてカンデイの町に入り湖畔のスイスホテルに晝餐をとる、宿帳に友人木子廣瀨兩君の名を發見して大いになつかしかつた。

カンデイの町は百年前英領となる迄約二百年間錫蘭島酋長の居城の在つた處である、海拔二千尺幽邃閑靜な古都、遙かに日光の町を想起する、カンデー湖畔を半周して有名な佛牙寺に詣づ、本名はダラダマラガワ寺、釋尊の聖齒を奉祠せるので其名高し、石造の印度サラセニツク式築建、外壁のフリーズには裝飾の地獄畫あり、塀の裝飾、入口のアーチ形、入口段下のムーンストーン（圓形紋樣の石）等頗る面白い、中央の佛殿に聖齒を奉安せる處、外壁面には壁畫がある、隣りは列柱吹き放しの木造建築ローコートといふのがある、チーク材に各種の模樣が彫刻してある、柱頭組物など中々面白い。寺の前には例のダゴバがある、伊東博士の東洋史を想起せざるを得なかつた。

午後五時歸途に就く、路傍の哩標石三十五を數ふる頃には日は全く暮れた、車上標石の減少し行くを樂しむ、途上の小驛に車を留めると女子供が集まつて來た、風貌頗る日本人に似て居る、色黑くとも何處となく賢こそうな顏付を見てサヨナラを叫ぶと相應じて一齊に手を擧げて吾等を送る、頗る可愛い、螢盛んに飛ぶ、烏大の蝙蝠亦飛ぶ牛車の連續せるに遇ふ、九時古倫母に歸着、直ちにオリエンタルホテルに投泊。

住むくふう

——思ひ出すまゝに——

吉村美代子

□つい過日のこと、木材が騰貴して住宅の建築費が騰つたといふことを新聞で讀んだけれど、全く建築材料の中で一番主要な木材が、追々伐採が困難になつたり其他の理由で騰貴して來ることは、大阪のやうな建築の盛んな處では困つたことに違ひない。住宅が拂底してゐながら、家を建てる人さへ手控へして段々に減くなるといふ事は、中産階級以下の人達はそんな事にもいよ〳〵益々生きの苦しみを嘗めなければならない。市では市民の日用品を便利にするため公設市場を設けたり、住宅の不足を補ふために市營住宅を建てゝゐるけれど、まだ木材の供給に就ては十分計る處がない。出來る事なら、宜しく市營で大仕掛けの木材の供給方法を講ずるがよいと私は考へる。

然うすれば一方市民は、不當に高い木材を買はされたり、一部の投機的商人に不當の利益を貪られたりするやうな不利益は免がれる。供給の木材は、內地や朝鮮や北海道や臺灣のばかりでなく、近頃は亞米利加松などが盛んに輸入されるといふから、それ等を取扱つたらいゝのである。アメリカ松は、之を取扱ふ木材會社などは、隨分と割合のいゝ利益を占めるいふ話である。

□樟蔭女學校々長の伊賀駒吉郎先生の話に、日本では大抵の都會の開けるとき、道路の出來ない前に先づ家を建てる。だから建てられる家は、當人達の好みのまゝに勝手氣儘な方向を向いて各自に秩序もなく座つてしまふ。そしていつか家と家との間をうね〳〵と道路がついて、廣かつたり狹か

つたり、隨分と不規則な、險惡な日本の都會特有の有名な惡道路が出來上るのだ、……現在大阪市の市外東の方に擴がりつゝある鶴橋町を一寸眺めて見ても分るであらうと。だから市府の當局では家屋の建築を許す前に先づその過路を完成する必要があると。殊に都市計畫などの、遠大な理想を實現しやうといふやうな現在では、一層注意すべき事だ、との話であつた。——それは左もあるべき事だ。私達は、一寸都會の場末の町を歩いてみると、本當にその事をよく感じられる。また郊外でも、阪神沿線の芦屋や住吉や、阪堺に沿ふ天下茶屋や、その他いくらでも斯うした實例は見つけ得られる。けれども、特に別莊地風の郊外區は、その背景の廣い、美しい風致で以て、まだしも不規則な道は雅味があるけれど、都會や都會に近い町や住宅地は必ず最初に道路の上に周到な用意を以て懸らなければいけない。

□ジャワやシンガポールあたりに往つて來た人の話で聞くと、土人のカラッパ（椰子）で建てた原始的な家に、西洋人が面白く工夫を凝らした設備をして、簡易に住つて暮してゐるものを往々に見るといふ事である。日本でも日本風の家屋に西洋人が住むと、いろ〳〵に工夫をして、氣轉の利いた氣持ちのいゝ住み方をしてゐる事である。けれどもそんな點になると、日本人は案外に無頓着だ。無頓着といふよりも、智惠がなくて含蓄に乏しいのかもしれない。日本人の中に普請道樂といふ一種の趣味をもつ人があるさうだ。それは、年中家作を捻つて、氣を揉むことである。けれどもその人の拵らへるものは、床の間を擴げてみたり、天井を竹張りにしてみたり、楠の一枚戸を張つてみたりといふ種類なので、實際に人間の住居としての肝要な設備の中心に觸れる事は、知らないのだらうとしか思はれない。

□曾つて或る人は、人間の住居やこれに附屬した物體を最も簡明に表現してゐるものは、日本の能樂に用ふる家居や、壇井や舟や車などであるといふ意見を云つた事であつた。それに依ると實際にこれは人生に於る「住」の表徴を尤も巧みに出したものだといふのである。——例へば「石橋」の牡

丹の岩床、「土蜘蛛」の頼光の寝床、「舟辨慶」の舟、これを見ると日本人は必ずしもそこに工夫のない國民ではないのだが……といふのである。けれども、私達の今日住つて居る普通の住宅は、五十年前の儘であり、百年前その儘の形式であり或は二百年も三百年も以前其儘の習慣であるのは何故だらうと云つた。

□滅びゆくものゝある傍に新しく生れ出づるものゝあるのは、世界永劫の繰り返す時の流れである文明が築いた目下の私達の生活裡には、やはりその瞬間も泯滅と創造は停滞してはゐない。あの交通の頻繁な、又あの高い建築物の組み合つた四ツ橋河畔で、昔來山が眺めた月の形に變りはないけれど、彼の有名な句碑は今は大方市民にも忘られてゐやうし、又小春治兵衛で名高い北の新地の蜆川も、今はその片影も認めない。或は大阪のあらゆる橋の最後の擬寶珠橋であつたといふ淀川橋は既にアスファルで固められた鐵橋となり、今の陸軍衛戍病院は、その昔徳川幕府の治下に於て東の町奉行役宅であつたといふではないか。然うして失はれるものに代つては、淀屋橋のふもとには巨大な市廳舎が聳え、難波橋が出來、中之島遊園地が造られ、更に築港の埋立は成つた。

私達は、只それを、現在の、いまの、世の姿として眺めればいゝ。それが、私共の受け取るべき現在の生活だと思へばいゝのだから。

よく世間には、吾々の祖先が殘した名所や舊跡や、紀念碑などが、現在に浸入し來つた文明のために、一つ〳〵壞され失くされてゆくことを嘆く人があるけれど、それはでも致し方のない事である。吾々は、無意味な壓制や暴力の外、この強い時の力には從はねばならない。そして吾々は、今の瞬間に亦澤山の紀念物を殘しつゝある事を知り意識すればいゝのである。

□大阪の都市計畫がいつの頃に實現されるかは知らないが、新たに設定された彼の區域が余りに大き過ぎると某氏は云つた。即ち南は堺の大和川から、西は市外の尼ケ崎近くまで、更に東は寢屋川(?)あたりまでも擴げる事は、決して優れた手法ではないと云ふのである。粗末な、腰の弱い家屋

などを、いくらも四方へ擴げるよりは、都市と云ふものは、適宜にせまく、かつちりと上へ築けといふのである。空間を利用して、もつと上空へ、高い家を建て並べればいゝといふのだ。すると、第一に交通機關の電車は短縮される、それに伴つて總べての冗費は省ぶかれる。時間と物質の經濟的利益は、決して人一人の決算ではない。幾萬といふ人を合すれば隨分と大きい國家的の利益になるのだ、といふのだつた。都市といふものは、せまく堅實に、內容の充實を第一にすべきだといふのであつた。

先づ己れに眞實なれ、然らば何人にも僞りなる能はず。
心誠色溫氣和辭婉必能動人。

閨秀鎖談

M記者

住宅改良の希望

工學士内藤太郎氏夫人
内藤周子



生活改善の叫びは最早古いもので、種々な機會に皆樣の御高説を拜聽し、又實行もせられてありますが、その中でも住宅の改造に關しては、從來の日本住宅をどんな形式に改造すべきか、まだ一定の方針はきまつてないやうに思ひます。

近頃は、只一般に洋風住宅に近似するものが要求しつゝあるので、どんな割合に洋式を取入れるかと申す事は、主人の職業及び家族の種類等によりまして多少の相違はある事と思ひますが、概して從來の習慣や服裝にとらはれて和洋折衷式を欲する事は止むを得ないことゝ思ひます。

で住宅改良の最も障害をなすものは、何か主婦と老人のやうに申さるゝ方も少くないやうに伺ひますが、老人は別として現代の中流階級以上の主婦に於きましては大抵は洋式設備のもとに敎化を受けてゐますし、大なる不便はないと思ひます。然し住宅の中でも働く場所と安息の場所と二樣に分けられますが、應接室、客室、書齋、臺所の如きは全く働く生活の場所ですから、椅子式が適當と思ひます。又寢室、居間の如きは安息の場所ですから純倚子式では、まだ私達日本人には本當に息まる氣持ちにはなれないだらうと思ひます。ですから現代住宅の大部分は先づ洋式で差支へはないと思ひますが、しかし私共の服裝の立場から許りでなく、日本人の生活から見て椅子寢臺式の純洋式が果して不愉快なしに續け得られるすか何うか、又西洋人の生活が全く完全なものとも思へません。

それ故に日本人は日本人に適した獨特の新しき建築樣式が此處に生れなければならない筈のやうに思ひます。それは和洋折衷式住宅であると考へられるでせうが、ゴツ〳〵した高い椅子や學校や事務所のやうな窮屈な寢臺を用ひ、ペンキ塗の粗末な建築で洋風生活は現代的ですと納まつてゐるのも苦痛な事と思ひます。

云ふまでもなく改良住宅は有產階級の特有物ではありません。私共はもつと私共の現代生活に適應し、日本人向きに融和せられた單純なもので、衞生的で便利で丈夫で、しかも廉價な建築が得らるゝやうにならねばならないと思ひます。

藝術生活を本位に

河野咲子

私は別に新らしい獨創的の考へを、持つてゐるといふ者でも御座いません。只先進の皆樣方のお話を承つて、自分でいゝと思ふ事を私達の事情の許す限り、勇敢に實行の上に移したいと努力してゐるもので御座います。



私の實生活に對する方針とでもいふべきものは、精神方面では複雜に出來るだけ文明的に、物質方面では簡單に出來るだけ原始的にといつた樣なもので御座います。從つて衣食住方面では一口にいへば簡易にして出來るだけ自然に從ふつもりです。それで住宅にしましても今日の私達の生活から見ると今までの普通の家は隨分無駄な所が多い樣で御座います。それに第一これまでの住宅は封建思想の下に支配されて建てられてゐるので、凡て表面ばかりを立派に裝つて自分等の生活振りを、秘密にするに便利な樣になつてゐます。これをも亦改造しなければならないと思ひます。

どうしても今後は藝術生活を本位として設計された家屋でなければなりません。從來の日かげ生活をもうすこし明るみへ出さねばなりません。如何なる人に對しても、それが例令目上の人であらうとも凡てを掩ふはずに、生活の凡てを擧げて交

際して行かなければならぬと思ひます。そこに本統に人と人とが融和する、暖い交際も結ばれ延いては社會の爭闘もすくなくなる事と思ひます。もう一つ私の住宅に對する考へは食堂にしても、ベットにしても、談話室にしても、臺所にしても、汽車汽船のそれに學ぶ所が大いにあらうかと思ひます。あの簡易なものに地上の安定と自然の風光を加味し擴梅したものと考へれば餘程面白い、便利な實際的のものにならうと思ひます。又室内の裝飾などにしても現代の藝術生活によく調和したものでなければなりません。壁間の額一面にしても、床の間の飾りにしても因襲にのみよる、部分的の技巧よりも室全體としての調和を謀る事が大切だと思ひます。骨董屋的の品物のみを列べるのが裝飾ではありません。

これは別ですが、私の家族はこゝ七八ヶ月全く坐る事を廢めて居ります。そして只今までは少しも不自由を感じて居りません。これによつて住宅に必ずしも疊が必要でないといふ自信をもちました。

とにかく以上のべました如く、これからの住宅は生活本位にして（お客本位でない）自然になるだけ近づき簡易でなければならないと思ひます。夫れにはバンガロー式建築の中から理想に近いものが見出されるだらうと思ひます。

百骸九竅の中に物あり、かりに名づけて、風羅坊といふ。窓にうすものゝ風に破れやすからん事をいふにやあらん、狂句を好む事久し。終に生涯のはかりごとゝなす。或時は倦て放擲せん事を思ひ、或時はすゝんで人にかたん事をほこり、是非胸中にたゝかうて、是が爲に身安からず。しばらく身を立てん事をねがへどもこれが爲にさへられ暫く學んで愚を曉る事を思へども是が爲に破られ、終に無能無藝にして、只此一筋に繋がる。

（今より二百三十餘年前の紀文行の一節）

——芭蕉——



◉道路受益者規定

大阪市都市計畫道路新設擴築事業費受益者負擔規定は左の如し

第一條　大阪市内に於て都市計畫事業として大阪市長の執行すべき道路の新設又は擴築に要する費用を都市計畫法施行令第九條第四號及大正九年内務省令第二十八號の規定に依り受益者に負擔せしむる事務は本規定の定むる所に依り大阪市長之れを行ふ

前項の費用中路面鋪裝に要する費用は大阪都市計畫路面鋪裝工事費受益者負擔規定に據る

第二條　本規定に於て道路と稱するは道路法の規定に依り行政廳の認定したる幅員三間以上の道路及行政廳に於て新設又は擴築の計畫を公告したる道路を謂ふ

第三條　本規定に於て並行道路と稱するは新設又は擴築道路と稍其方向の等しき道路を謂ふ

第四條　道路の新設又は擴築に依り受益者が費用を負擔すべき區劃は新設又は擴築道路の兩側より百間までの地域とす但し區劃内に介在する道路幅員は地域の幅員に算入せず

前項の規定に依る區劃は土地の狀況に依り必要ありと認めたる時は新設又は擴築道路の兩側より各百五十間まで延長する事を得

第五條　左の各號の一に該當する界線ある時は前條の規定に拘らず其界線まで費用負擔の區劃を伸縮する事を得

(一)新設又は擴築道路と同等級以上の並行道路ある時は兩路線の中間を折半する線(二)新築又は擴築道路の附近が海面なる時は其の海岸線(三)新設又は擴築道路の附近に崖地ある時は其の天端或は地脚線

幅員十間以上の道路は前項第一號の規定に依る同等以上の道路と看做す

第六條　費用負擔區劃は新設又は擴築道路の兩側より左の規準に依り順次之を三地帶に區劃す

(一)第一地帶區劃總幅員の十分の二(二)第二地帶區劃總幅員の十分の四(三)第三地帶區劃總幅員の十分の四

費用負擔區劃内に並行道路ある時は前項の規定に拘らず各地帶の幅員は相隣れる

道路の中間を平分する線に依り左の通り之れを定むる事を得

(一)第一地帶新設擴築道路の兩側(二)第二地帶第一次並行道路の兩側(三)第三地帶第二次並行道路の兩側

前二項の規定に依る各地帶の地域は其地域内に在る土地の現行地番界、道路、河川、溝渠、鐵道、又は專用軌道の位置幅員等土地の狀況に依り之れを變更する事を得

第七條　前條の規定に依る各地帶の負擔額を定むる事左の如し

(一)第一地帶總負擔額の六割(二)第二地帶總負擔額の三割(三)第三地帶總負擔額の一割

第一地帶の負擔額は其の半額を新設又は擴築道路に面する土地の間口の長さに比例し其の受益者に負擔せしめ他の半額は地帶内に在る全部の受益者をして其の面積に比例し負擔せしむ第二帶及第三帶の負擔額は各其の地帶内に在る全部の受益者に其の面積に比例し之を負擔せしむ

第八條　受益者の負擔すべき費用の總額は河川、運河、鐵道、專用軌道又は幅員八間以上の道路等が新設又は擴築道路を横斷するに依り限られたる區間に要する費用を基本額とし新設の場合は基本額の三分の一擴築の場合は基本額の四分の一とす前項の場合に於て道路の新設又は擴築の區分は大阪市長の定むる所に依る

第九條　第六條第二項及第三項の規定に依る各地帶の幅員に變更ありたる場合と雖も各受益者の面積負擔額の一坪當金額は同條第一項の規定の基準幅員に依り算出す但し第七條第一項の規定に依る割合を超過することを得ず

第十條　二線以上の道路の新設又は擴築に要する費用を負擔すべき區劃に該當する場合に在りては土地の狀況に依り面積負擔の一部を免除する事を得

第十一條　負擔金は第八條の規定に依る區間事業着手の日の現在に依り其區劃内に在る受益者より之れを徵收す但し場合に依り相當の利子を徵し分納を許可することを得

前項の規定に依る受益者の義務は關係土地に關する權利の移轉ありたる場合に限り其移轉を承認することを得

第十二條　道路の新設又は擴築に要する費用を補足する爲め土地、物件、勞力、又は金錢を寄附したる者に對しては其寄附金額の範圍内に於て本規定に依る負擔を減免することを得、大阪市長に於て適當と認めたる工法に依り工事を施行し之れを寄附したる者亦同じ

第十三條　本規定の施行に必要なる事項は大阪市長之を定む

以上の方法で特別負擔金を算出すると今次施行せらるゝ道路の新設及擴築に要する費用中用地費及道路築造費(路面、鋪裝費を含まず)のみの合計額九千四百卅六萬千七百七十七圓に對して二千三百八十九萬千七百七十四といふ結果になるが其の内訳路相互の交叉點の爲め共の一割五分河川鐵道其他公用或は公共の用に供したる土地若くは收益の爲に使用せられざる無租地等の關係に依り其の三割、建築敷地造成其の他の爲約一割二分は負擔を課し得ないから結局豫算計上の金額は著るしく減却し算出額に對し四割三分弱、費用總額に對し一割一分弱に相當する千二十四萬七千五百十圓となりしかも其内公債償還に充當される額を除いた

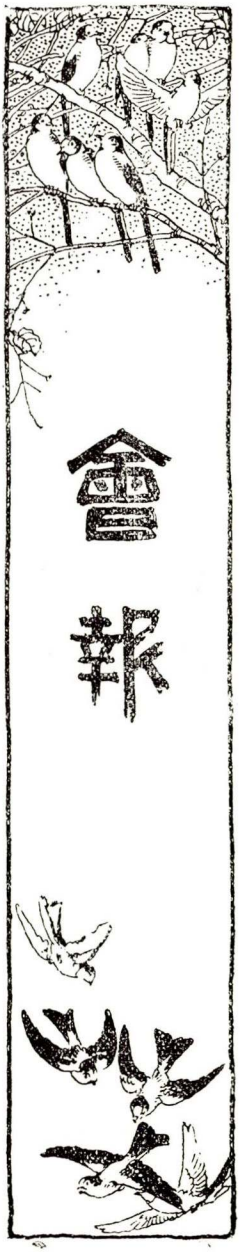
七百九十九萬四千二百三十一圓が其の特別財源金として第一次都市計畫の財政計畫に計上されるのである

◉防火地區指定

大阪都市計畫事業中最初に着手せらるべき幹線道路の築造工事前に當り地區の指定中防火地區の決定は最も急を要する者あるを以て其具體案は目下府都市計畫課に於て極力成案を急いで居るがその大體の方針は幹線沿道中御堂筋、堺筋、四ツ橋等の重要幹線道路沿線並に中之島及同公園附近一帶は甲種耐火構造としその他幹線道路沿線を乙種として準耐火構造の防火地區として指定する事に方針が定まつて居るが都市計畫大阪地方委員會に於ては都市生活の脅威が火災にある事を痛感し更に左記調査要項に依りて之れが指定に關する方針を定むることゝした

(一)地理的調査―土地の高低、河海、運河流川濠渠等の位置及幅員並其水量、道路築堤、公園、社寺、廣場等の配置及其系統廣袤、森林、綠樹等の分布(二)現況調査―主要地區に於ける建築物の構造及高さ、耐火建築物の分布(三)氣象調査―烈風及強風の方向並風速一般風位及風速、雨量濕度、濕度(四)火災に對する既往の調査―過去に於ける火災の統計(度數及其原因並損害高等)火災の分布、火災の徑路及大火の主因、建築物の構造別による災害比較、發火と類燒との損害比較、南北大火に關する調査(火元及類燒の方向風位)濕度消防其他火災後の施設等)火災と地震との關係(五)火災に對する防備施設の調査―防火線及防火建築、水道及消火栓、消防機關(六)火災及防火地區に關する報告(蒐集)(七)防火地區の理論的査定―建築物の最低限度指定と防火地區指定との關係、防火地區の奥行と地域奥行の關係、甲乙防火地區の奥行の考案、河川運河を防火地區と見なすの可否等、





會合

○第二回懸賞圖案審査會

△日　時　十一月十九日午後五時—十時
△會　場　本協會事務室
△出席者　野村、内藤、中西、吉井、設樂、瀨戸、小笠原、久保田
△記　事　前回に撰擇せる圖案十八通につき審査を行ふ。

○第二回懸賞圖案審査會

△日　時　十一月二十二日午後五時—九時
△會　場　本協會事務室
△出席者　野村、内藤、小笠原、瀨戸、中西、設樂、久保田、吉井
△記　事　前回に引續き審査を行ひ當選圖案を決定す。

○理事會

△日　時　十一月二十五日午後六時—十時
△會　場　本協會事務室
△出席者　葛野、波江、吉木、松本、吉井、小笠原、瀨戸、池田、西谷（書記）
△記　事　一、材料委員會の新設　二、會員の詮衡　三、博覽會々場の件　四、第二回懸賞圖案審査會報告

○博覽會財務部招待會

△日　時　十一月二十六日午後六時—九時半
△會　場　大江ビルヂング大廣間
△出席者
鷲尾殿（北大阪電鐵會社常務取締役）
金須殿（岡町住宅經營會社取締役）
關川殿（安治川土地株式會社）
吉田殿（濱寺土地株式會社取締役）
新海殿（新海工務所主）
志保井殿（高田商會支店長）
池原殿（日本水道衛生工事會社々長）
村井殿（作山鐵工所常務取締役）
田中殿（田中タイリング商會代表社員）
森上殿（日本セメント防水劑製造所）
伊藤殿（伊藤喜商店主）
東野殿（中外アスファルト會社）
高田殿（日本建築紙工會社大阪出張所々長）
鹽野殿（鹽野商店主）
上山殿（關西石材會社取締役）

有雅殿（大日本鉛石商會大阪出張所）
島田殿（島田硝子製造所主）
鶴丸殿（宇野澤組スティンド硝子製作所）
山谷殿（山谷洋家具合資會社）
鵜谷殿（旭家具裝飾會社大阪出張所）
長尾殿
赤山殿（内外木工所）
三木殿
鯖瀬殿（淺野木工場關西販賣部）
萩原殿（大阪高野鐵道會社）
田部殿（内外興業會社常務取締役）
（委員）細原、德政、谷、辰巳、竹中
中川、久保田、松尾、舟橋、
小林、有山、設樂、森下、片岡
（幹事）松本、瀨戸
（理事）波江

△順序　定刻に至りて食堂を開始す。食後片岡副會頭より一場の挨拶あり次て博覽會開設の趣旨及經過について報告及各位の援助を希望する旨述べられ來賓伊藤氏、金須氏等の賛同演說あり會談の後宴を閉づ。

○理事會

△日時　十二月五日午後五時―九時半
△會場　本協會事務室
△出席者　葛野、横濱、波江、小笠原、松本、吉井、西谷（書記）
△記事　一、例會開催のこと　二、役員改選に關し辭任者の抽籤を行ふ　三、會員の詮衡　四、博覽會に關する打合其他

○會場委員會

△日時　十二月二日午後五時―八時半
△會場　本協會事務室
△出席者　小笠原、池田、新海、小川、呼子、長田、松本、福永、佐藤、有山、舟橋、西谷（書記）
△記事　一、小笠原幹事より理事會に於ける博覽會に關する經過報告あり後委員長の選擧を行ふ　二、會場の設計圖作成のこと　三、會場實地檢査のこと其他。

○第二回懸賞圖案當選者披露會

△日時　十二月六日午後五時―九時
△會場　本協會事務室
△出席者　高橋（大阪朝日）奥村（大阪毎日）山口（大阪時事）筒江（大阪新報）和田（大阪日々）中村（關西日報）今村（萬朝報支局）福井（帝國通信社）池田、葛野、内藤、波江、江村（編輯）、西谷（書記）
△記事　來會者へ當選者住所氏名及審査概評等の印刷物を配付し内藤幹事より種々說明あり。後晩餐を共にして笑裡に閉會す。

○第二回懸賞圖案審査會

△日時　十二月十日午後五時―八時
△會場　本協會事務室
△出席者　内藤、瀨戸、久保田、中西、西谷（書記）
△記事　一、懸賞圖案審査講評作製

○理事會

△日時　十二月十二日午後五時―九時
△會場　本協會事務室
△出席者　葛野、瀨戸、小笠原、平井、波

江、西谷(書記)

△記　事　一、會員の異動　二、會員の資格　三、第二回懸賞圖案審査の件　四、第二回懸賞圖案審査概評の件其他。

○會場委員會

△日　時　十二月十三日午後五時―七時半

△會　場　本協會事務室

△出席者　舟橋、有山、呼子、福永、小川、新海、長田、佐藤、柳下、小笠原、横濱、西谷(書記)

△記　事　會場内本舘及實物模型の配置並に餘興場賣店等諸設備に就て協議す。

○審査員總會

△日　時　十二月十七日午後五時―十時

△會　場　大江ビルヂング第九號室

△出席者　片岡、武田、池田、葛野、竹腰、波江、小笠原、中西、内藤、久保田、藤井、瀬戸、吉木、阿部、横濱、西谷(書記)

△記　事　一、第二回懸賞圖案審査員の慰勞及第三回懸賞圖案審査員の打合せを兼ねて開催せられたり。

二、本會主催博覽會に建築出品すべき本協會案の改良住宅につきて協議す。

○審査員總會

△日　時　十二月十八日午後二時―七時

△會　場　本協會事務室

△出席者　葛野、武田、竹腰、波江、小笠原、中西、久保田、瀬戸、吉木、阿部、西谷(書記)

△記　事　前回に引續き協議の上決定す。

○例會

△日　時　十二月十九日午後五時半―九時

△會　場　大江ビルヂング大廣間

△出席者　小川、池田、竹中、山口、長野、本村、中澤、片岡、吉田、土居原、山脇、酒井、呼子、小寺、楠瀬、森本、杉原、村上、富永、清水、菱田、河合、天羽、本田、永野、田中、境、島田、生野、小林、多田、小林、澁谷、坪井、吉井、川崎、前田、葛野、長尾、久保田、横濱、近澤、和田、野呂、瀬戸、吉木、波江、田中、中川、小笠原、森、武田、山本、高堂、長田、井上、光安、森、大原、中川、小川、竹腰、阪井、中村、内藤、佐々木、本多、山本、平島、島本、姫野、池田、片山、須川、福永、林、宮本、瀬戸、濱田、岡本、小池、菅、増山、河合、佐伯、小西、増田、西谷(書記)、江村(編輯補)、山崎(書記)

△記　事　本々は例會開會に先ち第二回懸賞募集改良住宅圖案當選者に賞金授與式を擧行し當選圖案十通を陳列一般會員の展覽に供せり出席者百六十餘名非常なる盛會にて午後七時半散會す。かくて少憩の後午後八時改めて本月例會を開會し會務報告の後規程により理事半數改選を執行即時開票の結果は當選者左の如し。

竹腰　健三君　二〇票
中西　甚作君　一六票
舟橋　喜一君　一五票

內藤　太郎君　一四票
野呂長四郎君　一〇票
終つて談笑裡に閉會す。

會務

△十二月一日　第二回縣賞募集改良住宅設計圖案當選者へ通知發送す。

第一等　中村　一秀君
第二等　山本辰次郎君
第三等一席　須藤　員雄君
第三等二席　小川安一郎君
第四等一席　島本　四郎君
第四等二席　野口　昌三君
第四等三席　首藤　重吉君
第五等一席　小西　一良君
第五等二席　伊藤　次郎君
第五等三席　增山　新平君

△十二月七日　京都府警察部衛生課より「京都衛生年契」の寄贈を受く。

△十二月十六日　大阪市立衛生試驗所長より本會誌寄贈に對し叮嚀なる謝狀を受く

△十二月十七日　大正十年度會員名簿完成す。

△十二月十九日　本月例會を開催第二回懸賞當選改良住宅圖案を陳列し當選者へ賞金授與式を擧れたり。

○新入會員（名簿記入以後）

（會員）中村吉太郎君
（普通賛助員）松浦松市君　小山照雄君
西川啓三君　大森島藏君　服部逸治君　大野竹一君　田島長二郎君

○住所移轉（名簿記入以後）

中村　一三君　茨城縣稻敷郡阿見村海軍建築本部出張所
川原梅次郎君　名古屋市中區古鄕町四二
堀　宇一君　大阪市北區堂島濱通二大阪合同紡績會社工務課

○寄贈圖書

庭園　一二號　同　協會
住宅　一二號　住宅改良會
建築雜誌　一一號　建築學會
委員會報告　一二號　同　社
農家の友　一二號　同　社
材木新聞　每號　同　社
金屬工業新聞　每號　同　社
經濟資料　一二號　東亞經濟調査會
都市公論　一二號　都市研究會
住宅研究　一二號　住宅改良會
土木建築　一二號　同　社
建築世界　一二號　同　社
通商彙報　五八號　大阪府立商品陳列所
電氣評論　一二號　同　社
工業評論　一二號　工業評論社
商工時報　三九號　大阪市商工課
帝國鐵道協會々報　一一號　同　協會
建築畫報　一一、一二、一〇號　同　社
京都衛生年契　京都府衛生課
國民經濟雜誌　六號　神戸高等商業學校
家のしるべ　一二號　同　社
建築業協會々報　一一號　同　協會

役員及職員

副會頭	片岡安	理事	池田寶
理事	葛野壯一郎（理事長）	理事	吉木久吉
理事	波江悌夫（主記）	理事	松本禹象
理事	瀨戸文吾（主計）	理事	平井三郎
理事	横濱勉（編輯）	編輯補	佐藤四郎
理事	小笠原鋤（編輯）	書記	江村郊 西谷節 武波泰
理事	吉井長七（編輯）		山崎萬壽夫

會員	二〇九	會員（地方）	七八
名譽贊助員	七〇	終身贊助員	五二
特別贊助員	一七	普通贊助員	三四九
合計（十二月二十日現在）			七七五

備考　役員中任期滿了退任及び改選の結果異動ありしも二月號に掲載

本誌及廣告料定價表

本誌	冊數	定價	郵稅
	一冊	金五拾錢	貳錢
	十二冊	六圓	貳拾四錢

廣告料	種別	金額
	半頁	八圓
	一頁	拾五圓
特別頁モ料金一定シアリ御照會アリ度シ		

大正十年十二月二十七日印刷（毎月壹回）
大正十一年一月一日發行（一日發行）

大阪市外中津町下三番一九八番地ノ一
發行兼編輯人　江村恒一
大阪市東區內淡路町二丁目卅一番地
印刷兼印刷人　大阪活版所
大阪市北區絹笠町九
大江ビルヂング三十七號室
發行所　日本建築協會
電話北四二九一番
振替口座大阪三九九七五
大阪市西區京町堀羽子板橋北
特約販賣店　柳々堂書店
電話（土佐堀二四四〇番）
振替口座二〇八四番

第二回懸賞改良住宅應募圖案審査概評

第一回懸賞改良住宅應募圖案審査概評

今回の應募圖樣は總數百三十八通の多數に上り何れも熱心なる努力を傾注せられたる作品であつて之れが審査は十一月中に於て前後六回の會合を重ね愼重審議の結果懸賞募集規定に適合したる比較的優秀なるもの拾通を撰び當選圖案を確定した次第である今回の募集規定によれば市街地に建設すべき改良四戸建長屋で二階建、延坪百坪以内（四戸合計）經費約一萬二千圓を豫定せられ居住者は主人、主婦子共二人合計四人を容るゝ要求であつて數地は前面三間道路に面し間口、十五間以下敷地面積百二十坪以下三面は隣地に接して居るのである。

審査の方針は住宅改造の程度に於て急進的たると急進的たらざるとを問はず主として懸賞募集規定に適合し配置、間取、外觀、構造等最も現代住宅改良の要求に適應するものたることを主眼とし審査の適確公正を期する爲め審査員を配置平面、外觀、構造、法規、豫算の各方面に分ち詳細に分担審査したる後、各圖案に對し各自調査の結果を發表し意見を交換して愼重審議を重ね優秀なる圖案を精撰し入選圖案を決定した次第である。

今回の應募圖案は數に於て前回に比し多數に上りたるも市街地長屋建住宅として其内容現代の實生活に適し外觀簡易質實にして品位を保ち豫算も亦適當にして直に利用し得らるゝ程度のもの少く且つ法規に關する注意を缺きたるもの少からざりしは甚だ遺憾とするところである應募圖案中其四割は急進的改良を企て其五割は漸進的改善を謀り他の一割は從來の住家に多少の改良を加へたものであつて前回に比し急進的改良圖案の著しく增加したことは前回の審査概評發表の影響を受けたこともあらうが一般に現在の不便なる住宅に倦厭し生活の單純化を欲求しつゝあることは明に窺れるところで長屋住宅改良問題に對する貴重なる促進案であることを疑はない次第である。

終に臨で應募者諸君の此多大なる努力に對し深き感謝を禁じ得ないのである。

○第一等當選圖案評

本案は配置間取外觀及構造等に細心の注意を拂つた力作である。

配置は前庭を廣く取り二戸宛を巧みに組合せ前面にテレースを設けたるは長屋として實に長閑なる氣分を發揮して居る、外觀は至極簡單で各室の配置も大に要領を得て居る構造上防火の注意及經費の節約に努め法規上の非難もなく全體に無理の無い極めて感じの宜い作品で蓋し應募圖案中の白眉である。

○第二等當選圖案評

本案は外觀及各室の按配に努力した作品である。

全部洋式で階下は書齋兼客間、食堂兼居間、臺所浴室便所等の關係頗る面白く二階は小供寢室及勉強室、夫婦寢室等巧に配置せられてあるが北側に居間を設けたことは家族本位であるべき住家として不適當と思ふ構造は鐵鋼コンクリート塗の木造で一戸毎に防火壁を設け防火上注意を拂つたことは宜いが經費を增大し且つ外觀上何となく窮屈なる感じがないでもない。

而し外觀は改良長屋として概して申分無く極めて要領を得る優秀の作品である。

○第三等第一席當選圖案評

本案は和式と洋式を巧に按配したる作品である。

階下の應接室兼書齋と階上の廣間を椅子式とし居間茶の間客室寢室は疊式を用ひ相互の關係につき可なり注意が行届いて居る長屋の中間に通路を設け臺所に到る便利を謀つた點に特徴はあるが薄暗き通路

は感じも悪く窮した方法とも見られる階上の廣間の利用は狹過ぎる爲め一考を要する外觀は生氣に乏しい感じはあるが豫算比較低廉直に現代の往宅に利用し得る作である。

○第三等第二席當選圖案評

本案は配置に於て第一等案と同主旨で前庭を廣く取つた處に面白味がある各室の按配も可なり工夫を盡した作であるが稍〻不規則に流れ過ぎた傾きがある椅子式食堂の一部に疊式の主婦仕事場を設けた點は面白い試みである。

外觀は大した非難はないが中央の偉大なる竪樋は甚だ目について厭味がある工費は豫算の範圍内で目的を達するには骨か折れると思ふ。

○第四等第一席當選圖案評

本案は他の部屋を通らずに各室に到り得る點に特徴のある案であるが未だ平面圖の洗練が充分でない浴室の位置は不適當である階上廣間の利用も狹過ぎる小供室も小室に區分することは一考を要する外觀は先づ無難の作である。

○第四等第二席當選圖案評

本案は全部洋式で間取は比較的整つて居る作であるが階上各室は稍々窮屈の感がある寢室の棚は押入とした方が實生活に便利と思ふ。

外觀は單純であるが入口屋根の邊や窓は尙工夫を要するものと思ふ。

○第四等第三席當選圖案評

本案は間取の單純なる點に面白味がある階下は全部洋式で廣い一室とし家具類を利用し巧に之れを區劃した新しい試みであるが餘り開放的に過ぐる非難がある玄關の部分は仕切つた方が宜いと思ふ階上寢室の一部に疊式の部分を設けたるも面白い外觀も單純で纏まつた意匠である。

○第五等第一席圖案評

本案は間取に於て比較的整つた作である階下は椅子式階上は疊式で各室の按配の行屆いた點は見るべきものがある。

應接室は狹過ぎ浴室及厠の部分は廣過ぎると思ふ外觀は大した非難もないが細部に洗練の足らん點がある。

○第五等第二席圖案評

本案は外觀と間取に努力した作であるが間取は稍々複雜に流れた感がある兩端各戶の應接室及書齋は狹過ぎ又押入の少きは實生活に不便ならん。

外觀は雅致ある手法であるが市街地長屋の感が乏しいと思ふ中央部の高大なる屋根は非常に不經濟な遣り方だと思ふ。

○第五等第三席圖案評

本案は全部洋式で間取は比較的整つた作であるが北方に居間を設けたるは不適當で階段の採光不充分の憾がある。

外觀は大した非難もないが生氣に缺けて居るのは遺憾である。

●第五集　第一号　掲載広告一覧（掲載順）

川北電気企業社
日本輸送機製作所
浅海商店
池田稔事務所
出浦建築事務所
新海建築工務所
小笠原建築事務所
大阪建築所
渡辺建築事務所
葛野建築事務所
片岡建築事務所
横河工務所
竹内建築事務所
宗建築事務所
国枝工務所
柳下建築事務所
真水工務所

真水三橋建築事務所
舟橋建築事務所
木子建築事務所
遠藤於菟
設楽建築工務所
茂、野村建築事務所
片岡松井建築事務所
田中工業所
池田勘蔵
日本土木大阪出張所
大阪橋本組
大林組
竹中工務店
長瀬組
中川辰蔵
野村亥之助
久保田組

熊取谷熊次郎
山本組
松村組
小西組
藤木正一
鴻池組
駒井喜兵衛
安藤組大阪出張所
太成社
木村組
清水組大阪支店
銭高組
都市工業
山縣組
清水工務店
日本木材工芸
久原鉱業大阪出張所

山田大理石製作所
矢橋商店
吉田鹿之助商店
高田商会
須賀商会
内外土木建築材料
栄進社
松尾和助本店
山本窯業商店
萩原煖房工務所
新田ベニヤ製造所
南満鉱業
砂崎
山本コンベス商会
大野式特許品営業所
東京建鉄
河村青写真調製所
宇野沢組ステインド硝子製作所
コルク工業

日本水道衛生工事
鈴木製作所
大阪煖房商会
大阪電気商会
東京電気
別府ステインド硝子製作所
旭家具装飾
大理石工業
川崎工場
北木島石材大阪出張所
ホーン
城口汚水処理研究所
吉田鉄工所
田中タイリング商会
淡陶
東洋水道木管
野村商店
鈴木商店
日本トラスコン鋼材神戸支店

住友製銅販売店
住友東京販売店
関西ステンドグラス製作場
共同建材製作所
日本工剤
大阪窯業
横河橋梁製作所
田中源太郎商店
極東硝子工業